271
259

篇二第書叢嬰育

③

0050638000

0050638-000

２７１－２５９－（２）

幼児の科学教育と其指導

小池喜代蔵・著

育嬰協会

昭和１７

AHM

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第６７条の規定に基づき、平成１２年５月１５
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

271
259

兒の科學教育と
指導のそ

財團法人
育嬰協會發行

育嬰叢書第二篇

はしがき

一般に科學といへば自然科學と同一に解され、科學教育は理化學を主とする教育といふ意に取られがちである。科學教育といふ場合には勿論、理化學の教育もその中に含まれるであらうが、科學教育の眞の意味は、更に廣く我々の生活の科學的水準を高めるための教育でなければならない。しかし科學的知識を傳達するのみでは眞の科學教育ではなく、我々の生活を科學的にするやうにする教育にして科學教育といひ得る。科學的知識の傳達は生活と遊離してゐる、知識が生活の中に生きてゐない。科學教育に於ては生活全體が科學的に組立てられるところまで行かなければならない。この上に知識が受容されて始めて知識は生命を持つて來る。生活の科學化がなくして科學教育はない。知識も、從つて生活的要求からのそれでなければならない。

科學教育といへば又直ぐに學校教育を聯想する。しかし科學教育は特定の學科に限らるべきも

のではなく、凡ての學科の礎地ともなるべきものである。學校生活になつて始めて科學教育となるべきものではなく、それ以前にも既に存しなければならない。生活のあるところには生活の科學化があり、科學教育があり得ることになる。科學教育を徹底するにはどうしても幼兒時代にまで遡つてこれを行はねばならない。生活的礎地はこの時代に築かれて力强きものとする。事實日本人一般の科學的水準を高めるには幼兒の科學教育から出發しなければ效果を容易に望めない。

幼兒が科學的に生活を營むとは、幼兒が科學的に物を見、考へ、表現し、處理することで、かゝる態度を養ふことが幼兒の科學教育である。

この本では、幼兒のその時その時に斷片的に現はれる知的欲求を科學的に導かうとするのではなく、幼兒の現實の生活に卽して科學的態度を養ひ、生活全體を科學的に高めて行かうとするのである。生活全體が科學的に高められて行けば、その幼兒の持てる知能は充分に延ばされることになる、特殊な國民學校を志望し、所謂知能檢査の練習をさせて、性格的にもその子供を汚してゐる母親達は、その練習による知識が如何に體驗的でなく、又生活からの要求でなく、目的に添ふものでないことを知るであらう。

271
259

この書が公刊されるに際し、私は先づ渡邊德三郎君に感謝の意を表したい。昨年育嬰協會育兒參考館主幹新井信郎氏からこの書執筆の依賴を受けたが、公私身邊多忙で筆を取る暇なくそのまゝにて責を果すことが出來なかつたが、私の口述するところを記錄し、又それを校正するといふ煩雜な仕事を快く引受けて呉れることを渡邊君が申出られたので、やつとこの書が公にされることになつたのである。若しこの書によつて讀者が多少なりとも幼兒教育に役立つことがあらば渡邊君に感謝していたゞきたい。といふのは渡邊君を得なかつたら、恐らく私の此の書も世に出る機會を得なかつたであらうから。

昭和十七年七月二十九日

著者

幼兒の科學教育とその指導

一、科學教育とは何か……一
二、科學教育と幼兒時代……二
三、幼兒の科學教育……四
四、合理的態度（正しい物の把み方）と生活指導……七
　先づ親が模範を示せ——迷信を排せ——幼兒に理由のない恐怖心を與へるな——親自身が我が儘であってはならぬ——父母の間で教育方針を一致せよ——合理的態度と數量——數へ方の指導——おやつと數へ方——お金と數へ方——時間の指導
五、創造的態度（自ら工夫する態度）と生活指導……四三
　先づ子供の自發性を伸ばせ——自發性と劣等感——自分で食べたがる氣持を禁止するな——寢卷と自發性
六、科學的な考へ方と生活指導……四九
　科學的な考へ方とは何か——幼兒に自分で考へる機會を與へよ——いたづらを理解せよ——質問の答へ方

(滿二歳半頃)——滿四歳頃の質問の取り扱ひ方……六五
七、科學的處理と生活指導……
科學的處理とは何か——先づ整頓の習慣をつけよ——着物の整理——所持品の整理——計器と科學的處理……七二
八、觀察態度と生活指導……
見ることと觀察することとの相違——觀察態度と自發性——觀察するものを與へること——野菜の種蒔き——草花の種蒔き——觀察する必要を持たせよ——觀察を必要とする遊びは何か——描畫と觀察……八五
九、表現力と生活指導……
表現とは何か——言葉による表現の指導——描畫表現の指導(畫の描かせ方)——掻畫圖式畫時代(滿一歳半頃より滿四歳頃迄)の指導の要點——記憶畫の描かせ方(滿五、六歳以後)……二六
十、科學教育の實際指導……
——描畫による幼兒の科學教育——……一六四
十一、結　び……

一、科學教育とは何か

一口に科學教育と云つてもその教育を受けるものの年齢によつて色々とちがつた內容を持つてゐる。例へば大學專門學校に於ける科學教育と中等學校に於ける科學教育とはちがふものであり、又中等學校と國民學校とでも異るわけである。この本では幼兒時代の科學教育について述べるのであるが判り易くするために、まづ國民學校程度の年齢の子供を對象とした科學教育について、その意義を述べそれから幼兒時代の科學教育の說明へ入らうと思ふ。

科學教育と云ふことについては從來から多くの誤れる考へ方が行はれて來てゐる。その代表的なものを一つ二つ拾つて見ると第一は科學的知識を豐富に子供に與へればそれで科學教育が出來るんだと云ふ考へ方である。例へば以前の小學校に於ける理科の如く四年生になると突然に理科といふ科目が現はれて、机上に於て理窟を敎へ、或は實驗をして見せる。そこには殆んど實生活との結びつきが行はれて居らず單に兒童の模倣力、記憶力を試驗して見ると云ふやうなことになるだけで科學的な、合理創造の精神を養ふと云ふことは望めなかつたのである。又家庭に於ては

多少進歩的な親達が子供に電氣の理窟を説明したりヴイタミンの話をしたりしてきかせるとか、或ひは、その時々の流行に從つて科學的と云はれる玩具を買つて與へると云ふやうに、專ら斷片的な科學知識を耳から與へることや、たとへ目からとしても體驗させずに與えることのみ行はれて來たのが一般の狀態であつた。その結果單なる物識りや小賢しい子供が出來たり神經質な人間が出來たりする。又「衞生とかヴイタミンなんてことを云ひ出すから日本人の身體が弱くなつたんだ」と云ふやうな反動的で而かも一面の眞を含んだ言葉が放たれるやうになつたのである。勿論我々の先輩諸學者の研究結果であるところの色々な科學上の知識を與へることも大切である。子供は色々な知識を得てそれをきつかけにして自分自身も調べて(研究して)見ようと云ふ興味を抱くことは極めて多いことでこれを除いて科學教育はあり得ないが、しかし個々の知識を與へることだけが科學教育ではないことに注意しなければならないのである。

第二の誤れる考へ方は、科學教育と云ふとすぐに機械工學を聯想して例へば機械や飛行機を作ることだと考へることである。たしかに模型飛行機や汽車、汽船を子供に作らせることは、彼等の科學への興味を助長する役目はする。しかし科學教育を以つてそれですべてが終つたと考へて

はならない。これ等は科學教育の一手段一材料として極めて大切ではあるが、決してその根本に來るべきものではない。

それならば國民學校兒童を對象とする科學教育の眞の意義は何處にあるのであらうか。一言にして云ふならば、科學的態度を養ひ、それを通して皇國民を錬成する事にある。それならば科學的態度とはどう云ふ事であらうか。科學的態度とは相手(對象)が自然の事物にしろ、又世の中の出來事にしろ、合理創造の精神を以てのぞみ、その對象を正しく觀察し、考へ、處理し、その結果を表現する態度を云ふのである。

合理とは物事の理窟を尊重することである。例へば防火用の水槽は一個でその周圍に半徑約七米の圓を描いた範圍内に有效であると云はれて居る。これがいはば防火用水槽の持つて居る理窟である。從つて水槽を配置するにも、門の所に一個置くよりも、もつと家に接近した所に置く方がはるかに有效であると云ふことになる。かう云ふ風に理窟に合ふ樣にする事を、合理的な仕方であると云ふのである。そして今あげた例は卑近なことにすぎないが、これを押しひろげていつも事にのぞんで、出來る限り理窟に從つて行かうと云ふ氣持を合理的精神と云ふのである。從つ

て合理的精神の所有者は單に事物を取り扱ふときだけに限らず、たとへば目下の若者の意見であらうとも、若しそれが本當に正しいことであることを知つたならば、よろこんでそれに服すると云ふ態度をとるのである。ところが世の中にはそんな場合に「若僧のくせに理窟をこねて生意氣な奴だ世の中と云ふものはそんなものぢやあないんだ」と云ふやうに相手の意見の正しさを知り乍ら、無理に自分の非を通さうとする人がある。合理的精神の所有者はかうした卑劣な眞似はしないのである。

又創造的精神と云ふことは、現狀に執着せず、他人の眞似だけに止らず、そこへ自分獨自のものを作り出して行かうと云ふ氣持である。所謂、獨創的な氣持と云つてもよいのであらう。又防空の例をひくが、例へば　警戒管制下で許される燭光の下で出來るだけ有效に商賣や生產が出來るやうに工夫することも、創造的精神あつて出來ることである。又たとへ詩一つ作るのにも、昔のもののあいまいな燒直しを潔しとせず、外觀は拙くとも自分の本心から湧き出たものを尊重するのもそれである。更に戰場で傷いて、不具になつた勇士が自分の力で新しい人生を切り開いて行かうとするのも創造的精神である。以上に說明した合理と創造と云ふ二つの精神は　科學的な

心構として常に結びついてゐるものであるから、この二つを合せて合理創造の精神と呼ぶわけである。

さて科學的態度とは、かう云ふ合理創造の精神を以て先づ物事を正しく觀察することである。正しくとはつまり數量的に、時間的に、又物の形や位置の關係から(空間的に)正しくといふ意味である。又別の言葉でいへば事實のありのまゝを觀ると云ふ意味でもある。物を觀るのに、先入觀や、感情的な偏見を以て觀ないことである　さうして觀察し得たものを材料にして「これは何故かうなつてゐるのか。」とか「この前のものとこれとはどうしてかう違つてゐるのだらうか」などと云ふ疑問について考へて行き、その因果の關係を發見しようとするのである。又は、その觀察したところを基として、合理的な處理を施す。更に以上の觀察し、思考し、處理したところの結果を言葉や文章や圖形を以て表現することも科學的態度の一面である。

以上が科學的態度の大體の說明であるが、一つの例を擧げて更に判り易く說明して見よう。

例へば、人間は重い病氣にかゝつた時等、科學的な態度(心構へ)のない人は、ともすれば、それを輕く考へたがり、樂觀しようとする。又その病人の身邊の人も、病人を悲觀させまいとして大

局から見て、知らせた方がよい事實をも知らせないで、ひたかくしにしようとすることがある。勿論强いて、重く考へて悲觀するのは愚の骨頂であるが、そして、それも亦非科學的な考へ方であるが、樂觀してゐるために、爲すべき養生も充分しないで、治るべきもの迄治らなくなつてしまふと云ふやうな場合がある。かう云ふ場合に科學的な心構へがある人は、どんなにその眞相が悲觀すべきものであらうと、それをはつきりと觀てとり(觀察)、新たなる勇氣を以てそれの原因をしらべそれを克服すべき方法を考へる(思考)。そしてそれを着々と實行して行く(處理)のである。幸ひにして、その人が治る事が出來れば、自分の經驗を發表して(表現)研究の資料として貢獻できるかもしれない。

右は一例にすぎないが、前にあげた、防空用水の例も、一つの科學的なやり方である。もつと日常平凡な事を考へて見ても、たくさんの科學的態度の例を擧げる事が出來るであらう　例へば配給の食品を使つて出來るだけ、榮養價豐富な且つ美味な食事を作ると云ふことも立派な科學的態度である。又子供の躾についても、只在來の仕方に止つてゐないで、すこしでも改革し、一層よい日本國民を育て上げようとすることも科學的な態度なくては出來ない事である。

以上の例を見ても判るやうに科學的態度と云ふものは專門の科學者が持つべきものであることは當然であるが、一般社會人も亦日本の國力を增大するために持たなくてはならぬものなのである。一般社會人として、家庭に於ても職場に於ても又街頭に於ても我々は事にのぞんで相手が何事であれ、科學的な態度を以て仕事をすることが、如何に能率をあげ效果を擧げるかを考へて見ればすぐに判ることである。

勿論この世の中のことが、科學的態度だけで片付くとは云へない。信仰とか情操とか大切なものが色々ある。しかしその大切な信仰も、科學と云ふ武器をとることによつて　更に一段と强い力になるのである。このことは今日の我が國の軍隊が如何に科學的な兵器によつて武裝されてゐるかをお考へになればよく判ることであると思ふ。從つて「國民ノ基礎的錬成ヲ爲スヲ以テ目的トス」る國民學校に於ては當然この科學的態度の涵養と云ふことを取り上げなければならないのである。

さて以上述べたやうな科學的態度は大人の場合のことであつて、そのやうな科學的な態度がはじめから子供にあるわけではない。それは子供が、自然界や親や先生や、友達等から受ける廣い

意味の教育によつて段々と作り上げられて行くものである。

ところで子供に於ては科學的態度がどんな具合に作られて行くかと云ふと、先生や親が「合理創造の精神を以て觀察することが科學的態度です」とか「合理的に考へて仕事をしなくてはいけません」とか只口で云つて聞かせたとて到底子供には理解出來ることではないし、從つて又科學的態度が出來るものでもない。何故かと云ふと、國民學校時代以下の子供はその精神發達の程度からして一般に物事を實際に見たり觸つたり、つまり體驗してはじめて理解することが出來るのであつて、實際からきりはなして頭の中だけで推理したり、理論を追及すると云ふことは出來ないからである。(勿論さうした能力が全然無いとは云へないが極めて幼稚な程度なのである。)從つて子供は「觀察」と云ふ言葉の意味は理解出來なくても實物について適當な指導を行へばそれを正しく觀察することは出來るのである。それと同じく、實物について疑問を起せばそれを考へて解決しようともするのである。更に見たことや考へたことを他人に話したり畫に描いたりして表現することも出來る。又子供なりにたとへ拙くとも科學的な處理を加へることも出來るのである。勿論これらの能力は普通兒では年齢環境によつて幼稚であるか否かと云ふ相違があるが、いづれ

にしても之等の範圍を出て、抽象的に物事の理窟を考へることは殆んど不可能と云つてよい。

かう云ふわけで國民學校兒童に於ては實物についての(體驗を通じての)正しい見方や考へ方等の指導が直接當面の目標となるのである。(究極の目標が皇國民の錬成にあることは云ふまでもない。)そしてこれを通じて徐々に合理創造の精神を養つて行かうとするのである。

以上が國民學校兒童を對象とする科學教育の內容のあらましであるが、國民學校の實際に於ては理數科を中心としてこれを組織的に行はうとしてゐる。卽ち國民學校令施行規則第七條を見ると「理數科ハ通常ノ事物現象ヲ正確ニ考察シ處理スルノ能ヲ得シメ、之ヲ生活上ノ實踐ニ導キ、合理創造ノ精神ヲ涵養シ、國運ノ發展ニ貢獻スルノ素地ニ培フヲ以テ要旨トス」とあるのを見ても判る通りである。

(註) 以上に於ては、實物につくことが大切であると云ふことや體驗が必要だと云ふことを、主に國民學校だけのことのやうに說明したが、中等學校、大學專門學校に於ても勿論必要なことは云ふまでもないのである。只比較的に云つて國民學校ではそれ等が一層大切であると云ふのである。同時に口で教へる教育方法の無力なことを書いたが、これとても程度の問題であることを御承知願ひたい。

しかしこゝで誤解ないやうに願ひたいことが一つある。それは國民學校の科學教育は理數科だ

けに止るものではないと云ふことである。從來はともすれば算術とか國語とか理科とかをそれ等のものゝ間に何等關聯なく教へてゐた傾きがあつた。これは教へるものゝ立場からは、むしろかうした學科の取扱ひ方の方が易しいために、かうなりがちであつたかもしれぬが、家庭も一般にさう云ふ考へ方で算術國語の點はやかましく云ふが、圖畫手工はどうでもよいと云ふ傾きがあつたやうである。現在の國民學校教育に於ては、かう云ふやり方を排して出來るだけ個々の科目を關聯させて教育して行かうと云ふ行き方である。たとへば科學教育と云ふ方から云へば　先づそれを組織的に行ふために理數科を設けてあるが　決して科學教育は之に止るのではないのである正しい見方で見れば、藝能科（特に圖畫、工作）の世界ほど子供の科學的態度を涵養するのにより機會はないのである。何故かと云へばこの科目に於ては科學的態度を實踐する機會が豐富にあるからである。例へばグライダーを作らうと思へば先づ精確に全體の計畫をたてゝ測定を行はねばならない。うまく飛ばさうと思つたら翼の取付位置をきめるために、胴體の重心を精確に調べることも必要である。このやうに科學的な態度を實踐することが必要となり、この實踐を通じて一層それはみがきをかけられることになるのである。

以上述べたことによつて、科學教育とは何であるか、そして國民學校の科學教育は何を直接の目標としてゐるか　と云ふことが大體お判りになつたことゝ思ふ。

そこで我々はもう一歩深く考へて見よう。それならば少國民の科學教育と云ふものは、國民學校入學を以て始まることで充分とすべきであらうか。結論をさきに云へばそれでは充分ではないのである。科學教育は幼兒時代に迄溯らねばならない。この理由を次にのべよう。

（註）こゝで幼兒と云ふのは、誕生後一年目頃から國民學校入學迄の子供のことである。

二、科學教育と幼兒時代

前節に於ては科學教育は幼兒時代に迄溯らねばならないと述べた。次に此の節でその理由を述べよう。

この理由は第一に常識的にも說明出來ることである。俗に「三つ子の魂百迄」と云ふ言葉があるが　その意味は極く幼少の時にその心に受けた樣々の影響は一生の間容易に變らぬ位强いものであつてその人の人柄とか性質とか云ふものを決定する度合が極めて大きいと云ふことである。

これを逆に云つてみれば躾と云ふものは、これを出來るだけ早いときから始めなければならないと云ふことなのである。教育と云ふことは、ひらつたく云へば躾である。從つて科學教育とても之を國民學校入學迄放つて置いてよいと云ふ道理はないのである。勿論從來の家庭でこれを放つて置いたと云ふのは正しい方法を知らなかつたから放つて置かざるを得なかつたわけであり、又手を加へた場合も多くは中途半端な知識の詰込式のものとなり、むしろ放つて置いた方がまだしもと云ふやうな有樣であつた。しかし今後はこれを放つて置くわけには行かないのは前述の通りである。

次にこのことをもう少し詳しく說明して見よう。

先づ前に述べた觀察とか思考とか表現とか云ふ色々の心のはたらきを、一本々々の植物にたとへて考へて頂きたい。それは心又は精神と云ふ畑の上に生へるものであり、その種子は、人間にすでに與へられてゐるものである。そしてそれ等はある時期が來ると自然に芽を出す。出て來た芽に對して我々は教育とか指導とか云ふ養分を與へて、これの發育を助けるわけである。丁度農夫が作物を立派なものにしようとして肥料を與へるやうなものである。勿論生き物は何であらうと、自然の與へた強い生命力を持つてゐるから、日かげに置かれた植物であらうと、荒地に蒔かれた種子であらうと、容易に枯れずに生長して行くものである。しかしその場合は日かげの植物は青白くなり、荒地の草木はねじくれ萎縮したものであることを免れない。

この理窟は精神的な色々なはたらきの場合とても同じである。つまり精神のはたらきはそれが丁度芽を出した時にうまい具合に養分を與へないと、たとへ枯死しない迄も、それを十分に發育させ、その力を發揮させることが出來ないと云ふことになるのである。このことは將來の國民の精神的資質をそれだけ低下させることになるわけである。

ところで科學教育に於て助長し指導しようとするところの、觀察とか思考とか表現とか云ふ色々の心のはたらきは何れも國民學校へ入つてから急に芽を出すと云ふわけのものではない。それ等ははるか以前に芽を出してゐるのである。例へば表現の中に入ることだが、畫を描くと云ふ能力は普通兒では滿一歲三四ケ月頃に現はれるのを標準としてゐる。(尤もこの時期の畫は錯畫又は搔畫と云はれて、大人の意味では畫ではなく、線や點の亂雜な交叉、つまり無茶苦茶ななぐり書にすぎない。)その他物を觀ることであらうと、考へることであらうと、何れも幼稚な形ではある

が、とにかく芽を出してゐるのである。これ等の芽を國民學校入學迄放つて置いて養分を與へずに置いてよいと云ふ道理はないのである。勿論それ等は放つて置かれたとて枯死するものではない。それは前に云つたやうに、自然の力と云ふものがそんなに貧弱なものではないからである。しかし尙そこに、指導とか教育とか云ふ人間の力を加へることによつて、それ等を一層良いものに生長させることが出來る餘地が多分にあることも事實である。(若しこれがないとしたら、教育と云ふ仕事は意義を失つてしまふわけだ)同時に人間の力を加へないと、とかく正しい生長を妨げられることも事實である。科學教育を幼兒時代から始めなければならぬと云ふ理由の第一はこゝにあるのである。

三、幼兒の科學教育

前節に於ては、幼兒の科學教育を必要とする理由を述べたのであるが、それでは幼兒の科學教育とは實際にはどう云ふことをするのであらうか。次にこれを述べよう。

前述した如く國民學校の科學教育の基礎を作ることが幼兒の科學教育の目標なのであるから、幼兒の場合も、觀察、思考、處理、表現の基礎的な態度を作ること、及びそれ等を通じて合理創造の精神を涵養することが主要な目標となるわけである。それならばこの目的を達するためにはどうしたらよいか。

一體に幼兒教育の實際に於ける原則として最も大切なことは、幼兒の生活全體を教育的に有益であるやうに整へてやることである。例へば整頓のきちんと出來る子供にしたいと思つたら、親が先に立つて家庭生活全體をきちんと整頓することが先づ必要である。これが出來ればもう半分以上は目的を達したことになるのである。あとは時に應じて整頓することの大切なことを話してやればよいのである。かう云ふ背景とでも云ふべき生活全體の整頓があつてはじめて「きちんと整頓なさい」と云つて聞かせることが有效になるのである。(我々が、只口で云つて聞かせても效果が少いと云ふのはかう云ふ意味なのである。)

ところで生活を整へると云ふと、その用語の關係から、單に几帳面に家の中を整頓することばかりのやうに考へられるかもしれないが、さうではないのである。

こゝで生活を整へると云ふのはもつと廣い意味なのである。その意味としては、「生活を整へ

る」と云ふ言葉の代りに「環境を作る」と云ふ言葉を用ひた方が却つて判り易いかもしれない。（もつとやさしく云へば「仕向ける」と云つてもよい）例へば時間と云ふものをはつきり判らせようとするならば、たゞ口で教へたり時計の針を見せるだけでなく、幼兒が自然に時間を知ることが必要になるやうな、又それに興味を感ずるやうな環境を作つてやる（さう云ふ風に仕向けてやる）ことが第一に必要なのである。（「環境を作る」と云ふことの例として29頁の「數へ方の指導」や39頁の「時間の指導」をこゝでさきに讀んで頂きたい。さうすればこの言葉の意味がもつとはつきりするだらうから。）これと同じく畫を描かせようと思つたら畫が描きたくなるやうな、又描かざるを得ないやうな環境を作つてやることである。又字を教へたいと思つたら、幼兒が自然に字を知りたがるやうな環境を作つてやるのである。かう云ふ意味の「環境を作る」と云ふことも「生活を整へる」と云ふことの中に入つてゐることを御承知願ひたい。

要するに子供の生活を整へ、その整へられた生活を通じて樣々なことを自然に體驗させて、心のはたらきをみがくやうに仕向けてやるのである。仕向けると云ふのはつまりわざとらしい無理な「教育」をしないで、自然に子供を良くなる方向へ進ませてやることである。從つて幼兒に向つ

て「これから教育するんだぞ」と云ふ態度をあまり見せてはいけない。又一日の中に特別に「教育する時間」があるものでもないのである

以上のやうな意味で生活を整へることは別の方から見れば親が幼兒の生活をわざとらしくなく指導することである。そこで我々はこれを幼兒の生活指導と呼ぶことにするわけである。

さてこのやうな生活指導が幼兒教育に於ける原則であるが、これは幼兒の科學教育に於ても當然同じことである。つまり前に述べたやうな科學教育の目標に向つて幼兒が自然に進んで行くやうに幼兒の生活を整へてやることが必要なのである。それではどんな風に生活指導を行へばよいのであらうか。以下それについて述べて行かう。

四、合理的態度（正しい物の把み方）と生活指導

科學的態度の根幹をなしてゐるものが、合理と創造の態度であることは前節に述べた通りであるが、この態度を養ふためにはどう云ふ生活指導が必要であるか、その要點について以下述べよう。先づ説明の便宜上合理的な心構へと云ふことから取り上げて行くことにする。

（註）これから以下、合理的態度にはじまつて創造、思考、處理、觀察、表現と云ふことについて夫々節を別にして説明して行くが、こゝに一つ御注意願ひたいことがある。それはこれらの六つのことは夫々別個のものではなく、科學的態度と云ふ一つのものの六つの面（樣相）に過ぎないと云ふことである。それを説明の便宜上六つに別けて説明する迄であつて、これらは互に結びつきからみ合つて一つの科學的態度を成してゐるのであると云ふことを御承知願ひたい。從つて合理的態度涵養のところで述べる色々の注意は、他の五つの態度を涵養する場合も關係して來ることなのであつて、只合理的態度涵養について特に必要な注意をその項の中にまとめたと云ふことになつてゐるわけなのである。以下、創造的態度のところも、表現のところも皆そのつもりでお讀み願ひたい。

先づ親が模範を示せ　合理的な態度を養ふためには先づ親自身の態度が合理的であることを必要とする。つまり親自身が先に立つて模範を示すことが必要なのである。（この親自身が模範を示すと云ふことは、幼兒指導の場合は勿論のこと、子女の教育上、子供を良くするのに大きな力を持つてゐるのであるから、これからも機會ある毎に述べるが、吳々もお忘れないやうに願ひたい）

ところでこの點に於て從來多くの缺點があつたことは否定出來ないであらう。その缺點の最たるものは、(イ)迷信であり、(ロ)親が子供に向つて自分の我が儘（無理）を通さうとする態度であり、更に(ハ)父母の間で教育方針が一致してゐないと云ふことである。以下順に説明して行かう。

迷信を排せ　迷信と云ふものは人間の心の弱點に觸れてゐることであるから容易にこれを排撃し得ない事情にある。餘程性格の強いしつかりした人でないと、すべての迷信的な習慣を棄てると云ふことは不可能であるのが僞らざる事實である。又結果に於てそれを棄てることが出來る人であつても、そこに達する迄に、心の中で、これでいゝのかなと云ふ不安や迷ひがなかつた人間と云ふものは、稀であらうと思はれるのである。それ程私達の心には迷信的な考へ方が巣を喰つてゐるのである。從つて一般大衆に於ては、ある迷信的習慣が科學的研究の結果無意味であると知つても尙之に執着するのが普通なのである。それは一方に於て、未だ科學の力が充分でなく、多くの説明し切れない樣々の出來事が存在することにもよるであらうが、他方に於て我々が小さい時から育つて來た環境の中に、迷信的なものが多かつたことによることも、大きな原因をなしてゐると云へるのである。ある心理學者によれば子供には自然發生的にまぢないのやうな迷信的な考へ方があると云はれるが、所謂緣起をかつぎいだりするやうな迷信は周圍の影響によるものが大部分であると考へられるのである。

ところで現在或ひは迷信と云はれてゐるものの中にも、實は宗教的色彩の豐かなものもある。それ故に我々はそれ等の迷信と云はれるものを、十把ひとからげにして高飛車に排撃しようとするものではないのである。我々は國家の實際の必要と云ふ點から考へて、迷信は排撃しなければならぬと云ふのである。つまり今日の日本は高度國防國家の體制を整備し、大東亞共榮圏を完成すると云ふ大使命を擔つてゐるのである。このためには科學の力が大いに必要なのであつて、科學教育を盛んにして國民を一人でも多く、科學的態度を持つた日本人にしようと骨を折つてゐるわけなのである。ところが迷信と云ふものは、人知に不可解なものごとを科學とは最も相反した考へ方で說明したものであつて迷信的な考へ方があるかぎり、それは科學的な考へ方の生長を妨げることになるのである　これでは科學的態度を涵養しようとするのに困つたことであるのは明らかであらう。要するに我々が迷信を排撃するのは、そんな考へ方をしてゐては日本の國力が充實しないではないか、と云ふ極めて實際的な立場からなのである。

從つて家庭に於ては迷信的な習慣や考へ方は努めて除くやうにせねばならぬのである。勿論正しい信仰はよいが、それが科學の力を用ふべき時にもそれを排撃するやうなことになると、それは迷信である。例へばよく云れる例であるが　病人を醫者に見せずにまぢないとか祈禱で治さうとするやり方である。勿論すべての病氣に對して、現在の醫學は萬能であると云ふわけではない。又病氣によつては殊に慢性となつたときは容易に醫藥の效果が現はれぬこともあるし、又時の經過と共に、人間の身體に自然に備つてゐる療能力(自然に病氣を治して健康體へ戻る力)が働いて、醫藥を離れてゐても治ることがたくさんにある。かう云ふ場合に遇然まぢなひや祈禱に類する治療法がとられてゐると、それによつて治つたのだと思ひ、それを容易に信じて醫者は駄目だと云ふことになることが多い。かう云ふ場合に現在の科學の力の限りあることを知るのはよいが、それによつて科學全體の力を否定するやうな態度は誤りである。科學の力が及ぶ限りはその力を以て事にあたらうとする態度が大切なのである。

又例へば旅行への出がけに靴の紐が切れたと云ふとすぐに、これは緣起が惡いぞ何か不吉なことが起る前兆ではないか等と云ふことを云はずに、それは單に自分の不注意や不用意がそこに現はれたのにすぎないことだと考へればよいのである。そして旅行を止めるとすればそれはもつと準備を完全にするために止めると云ふのが科學的な考へ方である。

又こんな例もある。一般に我々は箸を御飯を盛つた上に立てることを忌み嫌ふ。これは棺の前に供へる御飯に箸を立てる習慣を聯想するからであらう　ところが子供にとつては御飯の上に箸を立てるのは極めて都合がよいのでついこれをやる。こんな場合もこれを純然たる御行儀の問題として「そんなことをするとお利口さんぢやないのよ」と云ふことはよい。しかし「そんなことをすると死んぢまふぞ」などと云ふやり方は迷信的なものとしてやめるべきである。

幼兒に理由のない恐怖心を與へるな　それから純然たる迷信ではないが子供の身のまわりのものごとを迷信的に説明してそれを恐れさすこともつとめて避けるべきことである。例へば雷様は雲の上に住んでゐて虎の皮の褌をつけて太鼓をかついでゐる。子供が裸でゐると下りて來ておへそをとつてしまふぞ、と云ふやうな説明である。その他便所にお化が出るとか、泣いてゐると犬が喰つてしまふぞとか云ふこともこれと同じことである。

ある家庭にあつたことだが次のやうな例がある。その家の二階の床の間には陶器で出來たカンガルーの置き物がかざつてあるが、それを滿二歳の男の子が觸つてしやうがないと云ふので、母親と女中が「カンガルーはくひつくのよ、こわいこわいね」と云つて、自分達もさもこわさうな恰好をして見せて、散々にこわがらせてしまつた。それからと云ふものは、その男の子はカンガルーの置物を見ると決して座敷へ入らうとしない。そしてそれを戸棚へ仕舞つてくれと云ふ。從つてぐづぐづ云つてゐる時も「カンガルーが來ますよ」と云ふとすぐにおびえた顏付でおとなしくなるのである。それをある日曜日にその父親が發見して、これは間違つたことをしてくれた、こんな不自然な理由のない恐怖心を植ゑつけては宜敷しくないと云ふわけでその恐怖心を取り除くのに苦心をしたことがある。恐怖心の取り除き方の例になるから少し書いて置かう。

まづ父親がカンガルーに觸つてそれをなぜて見せながら「正ちやん、カンガルーはかはいゝね、正ちやんにもかはいゝかはいゝして頂戴つてさ、さあこゝへ來てかはいゝかはいゝしてやりなさい」と呼びかけた。はじめは仲々子供は寄り付かうとしない。しかしこれで大部安心したやうに見えたので、今度は子供を抱いてカンガルーのそばへ行つた。ひざに抱いて「カンガルーのお耳どれ？」と呼びかける。子供はやつと手を出すが、カンガルーには觸れずたゞ指さしてゐるだけである。再び「カンガルーのお手々は？」と聞くと、これも亦こわ〳〵指さす。かうしてカンガルーと遊んでゐる中にいつとはなく馴れてしまつて恐怖心もとれたやうに見えた。しかしこれはま

だ早かつたからよいが、いつまでも恐怖心をつけたまゝにして置くと容易にとれなくなる。又今さ
べたやり方とは反對に、子供に無理にそれに觸らせて見たところで決して馴れるものでなく、却
つて恐怖心を增すやうなことになるのであるから、常にその恐怖心の對象となつてゐるものを面
白い愉快な遊びと結びつけるやうにして、徐々に恐怖心を取り除くやうにするのがよいのである。

さて話が少し横道にそれたが、かう云ふことは多く親の都合本位に行はれることで、泣く子を
だまさうとして人買ひが來ると云つたり、大切な品物に觸らせまいとして、それをこはいものに
してしまつたりするのであるが、子供をこはがらせなくても外にいくらも手段があるのだから、
かう云ふやり方はやめるべきであらう。

例へば今述べたやうな、こはれ易いものであつたら子供の手の屆かぬところへあげてしまへば
よい。又駄々をこねて泣く子であつたら一切とりあはずに泣かせて置けばよいのである。誰も相
手になづて呉れないことが判れば自然に泣き止む（これが子供をしつかりさせるのに大切な躾な
のである）いつも大人が相手になりだましたり、すかしたり、時にはおどかしたりすればやはり
子供もいつも駄々をこねることになるのである。泣くとうるさいと云つて親が癇癪を起すのでは

いさゝか大人氣ないではないか。泣かして置くのも子供をよい子にするのに役立つのだと云ふ氣
持になれば、決して我慢出來ないことではないのである。但し子供の方に正しい理屈があり、そ
れを容れられないと云つて憤慨して泣いてゐるときは、それを尊重して相手になつてやることが
必要だ。）

以上は本當にこはくもないものを親の都合本位でこはいものにしてしまつてはいけないと云ふ
ことであるが、もう一つ別の場合もある。それは實際にも危險なこはいものに對する態度のとり
方である。例へば刄物のやうなものである。しかしかう云ふものでもこれを理屈なしにこはがら
せると云ふことをしてはいけないのである。そして危險の程度に應じて子供に持たせてよいもの
は持たせると云ふ風にするのである。例へば滿四歳の子供にかみそりはとても危險で持たせられ
ないが、さきの丸味のある鋏ならば持たせてよいと云ふやうな具合である。若しかみそりを觸り
たがつたら、「これはとてもよく切れるからまだあぶないのよ、もつと大きくなつたら觸つてもい
いのよ」と靜かに云つて聞かせればよいのである。又比較的危險のない鋏でも、それを渡すとき
にはよく氣をつけないと手を切ると云ふことを話してやることが必要である。この外に火鉢の火

などもよい例であるが、これは後に50頁で述べるからそこを見られたい。

以上に色々の場合を述べたが、要するに我々は自然を畏れ愛するのみでなく、自然や事物の持つてゐる性質をつかみ、それ等を生活の中に攝り入れ、引いてはそれ等の生活が國力增大の基礎となるのであるから、理由のない恐怖心を與へて恐れさせるやうなことがあつてはならない。何故なら、恐れてゐては相手を理解し把握すると云ふことは仲々出來ないからである。

以上は二三の例について從來の迷信的なものの說明の仕方を述べたのであるが、子供に向つてはこの要領で說明して頂きたいと思ふ。とにかく迷信的な考へ方が家庭に存在する限り、どんなよい方法により科學教育を施してもそれは徒勞に近い。それ故に先づ科學教育のために迷信を排除しなければならないのである。

親自身が我が儘であつてはならぬ　第二に親(その他一般の大人)が自分の無理を子供に向つて通さうとする暴君的な態度であるが、今迄は往々にしてこれが多かつたのではないだらうか。「子供はだまつてゐなさい」「子供のくせに生意氣な」と云ふやうな行き方が必要以上に多かつたのではないだらうか。子供の方に正しい道理があつても親の沽券にかかはると云ふ理由で(しかし何とつまらぬ沽券だらうか!)親の無理を通さうとして、子供の道理をひつこませると云ふやり方が往々にしてありがちである。これでは子供もやはりその態度を學ぶ結果になるか、或ひは反抗心を抱き、これによつて道理に從ふと云ふ科學的精神の芽生をつみとつてしまふことになるのである。誰の云ふことであらうと、正しいことを正しいとして認め、それに從ふ精神こそ科學的精神の最も大切な現れの一つなのである。

父母の間で教育方針を一致せよ　更に親の合理的態度として、父母の間の教育方針の一致と云ふことが大切である、教育方針の一致と云ふとむづかしく聞えるが、簡單に云へば、例へば父がしてはいけないと云つたことを母がかげへまはつて許したりすることはいけないと云ふことなのである。父と母とが子供の面前で、叱るか叱るまいかと云ふやうなことについて爭ふのは最もいけないことである。又親の氣嫌次第で昨日叱つたことを今日は平氣でやらせたり、今日みのがして置いて明日はがみ〳〵叱ると云ふこともわるい。かう云ふことをしてゐると子供は何が正しいのか判らなくなり、或ひは年長になれば親を小馬鹿にするやうになるから注意しなければならないのである。更に祖父母が居れば祖父母と父母との間の方針の一致と云ふことも大切である。相

談所へは時々、母の云ふことをきかず甘つたれで困ると云ふ子供が來るが、聞いて見ると大抵祖父か祖母(殊に祖母)がゐる。そして母が子供をしつかりさせやうと思つても祖母が後にゐて盲目的な甘やかしをやるので、子供が甘つたれになるばかりでなく、母を馬鹿にして云ふことをきかなくなつてしまふ場合が多い。子供を良くするのには一家そろつて理に服すると云ふ態度が必要なのである。

合理的態度と數量　以上にのべたことは合理的態度を養ふために、これ〳〵のことをしてはいけないと云ふ消極的方面を述べたわけであるが、今度は合理的態度を養ふために特に基礎的なものとして何をすべきであるかと云ふ積極的方面を述べよう。

一體に實際にあたつて合理的に（引いては又科學的に）物事を取り扱つて行く一番元になることとは何かと云ふと、それは物事を數量的にはつきりと認識することだとも云へる。數量的とはつまり數量(例へば長サ重サ等)と時間と云ふ二つの點であるが、幼兒に科學的態度を植ゑつけるにも、この基礎的な點を見のがすことは出來ない。つまり幼兒に、數と時間の觀念をはつきりさせることが必要なのである。ところが從來の幼兒の生活はこの點であやふやなことが多く、たとへ

數や時間を知つてゐても、それは只知識として知つてゐるだけであつて、生活の中で實際に使はれてゐなかつたのである。數を口で唱へることが出來ても實際のお菓子は數へることが出來ぬと云ふ傾向がたくさんにあつたのである。たとへ少い數であつてもはつきりと實際のものを數へていくつあるか判るやうにしなければならないし、又時間にしても、三時とか六時とか云ふ一日のくぎり目がはつきり判るやうにしなければならないのである。

それならばどうしたらばよいかと云ふと、それは幼兒の生活を數と時間と云ふ點から整へることによつて達成することが出來るのである。云ひかへれば幼兒が數を數へ又時間を知ることが必要であるやうな、又それが面白くなるやうな環境を作つてやる(仕向けてやる)ことによつて、數と時間をはつきり體得させることが出來るのである。

數へ方の指導　先づ數のことから入らう。國民學校入學の時に百迄數へられると云ふ子供はたくさん居るが、大抵一から百迄の唱へ方を暗記してゐるだけで、實際の數とは結びついてゐないのが大部分である。唱へることは數へることではない。唱へることだけでは數を數へると云ふ頭のはたらきとしては意味がないし、又却つて子供を神經質にすると云ふ害もある。(これは「それ

學校へ入るのだ」と云ふので强制的に暗記させるやうな場合である。)もつと實際的にお菓子を數へることが出來るやうにせねばならないのである。この實際指導について次にのべて見よう。子供におやつをやる時を利用して數の觀念をはつきりさせると云ふ例をとる。

おやつと數へ方　一般に家庭ではおやつは大人がちやんと良い分量だけ、とつて與へることが習慣になつてゐる。これが一人子の場合は殊にあてがい扶持になり易いし、又兄弟が多ければ多い少いの區別をするだけである。しかしおやつは數へ方の練習のよい機會なのであるから、これを利用して數の觀念をはつきりさせる指導法を述べよう。

子供の數は一つかそれ以上かゞ出發點である。從つて先づ一つと二つとの區別をはつきりすることが大切である。子供が一歳半にもなれば、おやつを與へるのに決してだまつて與へず、かう云ふ風にやる。まづ兩手を出させて　右手に「一つ」と云ひながら一個をのせて、左手に又「二つ」と云ひながら一個をのせる。そして「ハイ坊や二つね」と云ふ。(この間の親の態度がきはめて何氣ない風であることは云ふまでもないであらう。)この時に子供が數を理解しなくてもよい。それはじめは當然のことである。子供は數の唱へ方を眞似て、お菓子のことを「一つ二つ頂戴」と云ふかもしれないが、それでもよい。たまに子供自らにとらせれば、自分で兩手を使つて「一つ二つ」と、とるやうになる。これをしばらくつゞけたなら、次に子供に皿を持たせ母親が「一つ二つ三つ」とゆつくり唱へながら「ハイ三つ」と云つて與へる　かやうにして次第に數をふやして行く。しかしふやす場合にはそれ迄を十分に體驗して數の觀念をはつきりと體得させることが必要である。勿論數が多くなるに從つてお菓子にも量があるから一定量をすぎぬやうに小さい菓子を與へるやうに工夫することも必要である、

かうして段々數がふへて行つた時に、時には母親の方から「今日はいくつあげませうか」と云ふ。若し子供が五つ迄體得してゐれば、その子供にとつて五つが最大の數であるから「五つ頂戴」と云ふにちがひない。そこで「坊やとつてごらん」と云つて子供に「一つ二つ三つ……」と數へてとらせるわけである。若しその時六つとつたとしたら「アッお母さんが一つ損しますよ」と云つてとりかへす。又四つしかとらない時には「坊や四つしかとらないの、一つ損するよ」と云つて一つとらせる　その時に今迄の數へ方の稽古のやうに數へ直しをさせない。母親の氣持はそれではすまないかもしれないが、明日は本當に五つとれるだらうと云ふ希望を持つて明日を待たなければ

ならないのである。同じことが翌日くりかへされゝば又次の日を持つのである。かうして教へずして子供は體驗して來る。かやうにして得られた數の觀念は子供の生活から生れたものだけに力強いものである。

以上はおやつを利用したやり方であるが、滿五歳六歳になつたら、かう云ふ機會を利用するのもよい。例へば母親が八百屋へ行き、ぢやがいもをいくつか買つて來たとする。その時家へ歸つたら早速かう話しかけて見る。「和子ちやん、ちよつとお母さんいそがしいからこのお野菜を數へて見て頂戴ね」。これで子供は數へ方の練習も出來れば、又親から一人前に扱はれて御用を頼れたと云ふことを非常にうれしく感じ、益々お母さんのお手傳ひをしようと云ふ氣になるものである。若しこの場合に子供がまちがへてゐたら、靜かに「それぢやお母さんと一緒にもう一度數へて見ませう」と云つて、をしへてやつてもよい。この年頃になつたら、このやうな形で數へ直しをさせてもよいのである。しかし決して結果を焦つて求めてはならない。

（註）三四歳の頃は自我の芽生への時であり、少しでも他人に阻止干渉されることを嫌ふ時期である。それだけに他の干渉注意は教育的に却つて效果が少いのである。しかし五六歳になるとすでにこの時期をすぎて、他人の干渉を一應まともに受け入れることが出來るやうになるのである。學齡が滿六歳であることはこの理窟によるのである。

お金と數へ方　日常生活の中で自然に數を體得させる方法として更にお金を與へる方法を說明しよう。

世間では生活程度の相違とかその他色々の理由によつて幼兒にお金をやると云ふことは、ある所ではあたり前のことになつてゐるし、又他のところではとんでもない禁制になつてゐるものである。一方には「一錢オクレ」を習慣にしてゐる子供もあり、他方には學校へ入つて可成の上級になる迄、自分の小遣錢を與へられない子供もある。（勿論この中間に樣々な程度のちがつた家庭がある。）しかし子供が求めるがまゝに計畫もなく與へることも、又全然お金に觸れさせずに置くことも誤りである。

さて私達がこれから述べることは、幼兒にお金を與へようと云ふことであるから「一錢オクレ」を實行してゐる方からは別に反對も出まいが、お金に手を觸れさせない主義の方からは反對が出るかもしれない。そこでそれに對して一應お答へして置かう。

子供を金錢から遠ざけようとするには、色々の理由があるが、大體次の三つが主なるものであらう。

(1)金錢は衛生の見地からして不潔である。又幼兒がうつかりして口に入れたりすると危險であると云ふこと。

(2)金錢は人間を賤しくする。從つて子供の中から金錢に觸れさせることは一層それを助長しはしないかと云ふこと。

(3)子供の中から金錢を使ふことをおぼえると大きくなつて浪費家になりはしないかと云ふこと

第一の金錢を不潔なりとする考へに先づお答へしよう。金錢はたしかに清潔なものではないが、金錢の不潔ぐらゐを恐れてゐたのではとても逞しい生活力を得ることは出來ないのである。さう云ふ誤れる神經質は却つて身體を虛弱にするものである。又我々の主張する金錢を與へらるべき幼兒は大體滿五歲以上であるから、よく云つて聞かせれば決してそれを口に入れるやうなことはないのである。

次に第二の理由についてであるが、金錢の與へ方を誤つた場合には或ひは人間を賤しくすると云ふ結果を生み出すことがないとは云へない。その點で正しい與へ方が大切であるが、更に大切なのは家庭全體の空氣である。即ち金よりも義理とか人情とか或ひは又學問とか云ふものを尊重するやうな家風があれば、お金を小さい時から使つたからと云つて、決して賤しい人間になるものではないのである。

第三に浪費家にしやしないかと云ふことであるが、これも亦問題は第一に家庭全體の空氣にある。家庭全體が分に應じた質素な生活であれば、幼い子供に金錢を持たせたからと云つて、決して浪費家になるものではないのである。大事な教育費とか衛生費とか云ふものには金錢を惜しまぬが、無駄なぜいたくなどしないと云ふ家風を作ることが何よりさきに大切なのである。第二には適當に金錢をつかわせて金錢の價値を體得させることが却つて浪費家にすることを妨ぐことになる、と云ふことも注意すべきことである。從つて第三の理由に對しては家風と金の與へ方を注意すれば心配ないと云へるのである。

さて以上の說明によつて滿五歲頃から幼兒に金錢を與へることは一向に差し支へないことがお判りのことと思ふ。而も一般に幼兒は金錢に非常な關心を持つてゐて自分のお金を持ちたくてし

やうがないのである。大人が自由に財布から出して使つてゐるのに、自分にはお金を持たされないと云ふ經驗から　早く大人になつて自由にお金を使ひたいといふ一種の劣等感さえ持つてゐるのである。まさにお金を持ちたいと云ふことは子供の生活的な要求になつてゐるのである。この金錢への關心を善導して金錢の價値を知らせると同時に、數をおぼえさせ體驗させることは極めて道理にかなつた、又それだけ效果の多い方法なのである。そこで金錢の與へ方を述べよう。

滿五歲位になると、幼兒も色々と親の手助けや一寸した近所へのお使ひなどが出來るやうになる。かう云ふ時に「今日はとてもお利口さんにお手傳ひしてくれたね」と云つて、御褒美として金錢を與へるのである。ところでこの時期は未だ金錢の價値を知らない、即ち五錢と云つてもそれで何を買へるのか知らない。五十錢の本でも五錢だと云へばそれで通じるのである。そこで最初は先づ一錢から與へるのである。その時豫め一定の箱を與へて置いて貯金箱とするのがよい。但し子供の自由に開けることが出來る箱でなければならない。貯金と云つても親があづかるのではなくて、後に述べるやう(68頁參照)な子供自身のひき出しのやうな所へ入れて置いて、子供の自由にさしてやるのである。すると子供はお金に興味を持つてゐるから、お金を出し入れしては數へるやうになるのである。しばらくこれを續けて五錢になつたら、機會を見て一錢玉五つと五錢玉一つとで同じものが買へると云ふことを說明してやり　一緒にビーダマとか白墨のやうなものでも買ひに行くのもよい。又その中にもつとたまつて來たら「これがたくさんたまつたら本を買ひに行かうね」と云つてやるのもよい。(一錢と五錢との關係が判るやうになつたら、一度に五錢とか亦進んだら十錢とかを與へるのである。)子供はいくつたまれば本が買へるのか知らない。數に關心を持つてゐれば「いくつたまれば本が買へるの?」と聞く場合もあらう。「十たまれば買へるのよ」と云へば十と云ふ數が眞に關心のまとになつてくるのである。そこで十錢たまつたら「こんなにたまつたからお母さんが十錢たして本を買ひに行きませう」と云つて、一緒に出かけて二十錢の繪本を買はせるのもよいのである。この調子で行くと、六歲では十五から二十位の數を體得するのが普通であるが、金錢に關する限り五十位迄確實になることもある。又お金の價値を知る第一步が始まるのである。(このやうに數を體得すると云ふことをお金の價値を知ると云ふことの外に、前にのべたやうな金錢に關する劣等感を輕減すると云ふ效果があるのである。劣等感のことについては未だ說明してゐないから判りにくいかもしれないが、44頁をお讀みになつた

あとで又くりかへしてお考へになればこの效果の意味がお判りになることと思ふ。）

さて私達のこのやり方を聞いて早速實行した或る母親が次のやうな報告をして來たことがある。次に引用して見よう。

『早速實行して見ると子供は大喜びで毎日數へたり竝べたりしてゐる中に知らず識らず計算をしてゐることが判つた。今でも五つづつ分けるお菓子があれば六人に分ければいくつあればよいかと云ふ樣なことをして遊ぶと喜んで考へ、我先きに答へようとする。こゝではじめておはじき等で形式的に數觀念を植ゑつけようとするよりも生活の中で體驗させることが、一層效果をあげると云ふことが判つた。又本を買ひに行つても三十五錢の本を買ふと五十錢持つて行つてお釣のくることが非常に嬉しいらしい。「この本はもつと高い本なのだけれど安すぎる」と云つて感心してゐた。暫くするとお釣は來なくても五十錢の本を買つた方がよい本であると云ふことに氣がつく。五十錢でも本當は二圓位の値打ちがあるのに安いと云つて大人を笑はせた。今でも時々買ひ物に連れて行くと尋ねなくても買つた物を次々に計算して今はいくらになつてゐるよと云ふことがある。』

以上述べたやうに、實際に數へる機會を出來るだけ與へること、而もそれを遊びとか實際の必要とかに結びつけて與へることが數觀念をはつきりさせることの原則である。

最後にどれぐれゐの數が判ればよいかと云ふと、學齡迄に大體十四、五迄の數を體得させて置けばよいのである。五十迄數へられる、百迄數へられると云ふことを誇つてはならない。五十百と云ふ數はこの時代の子供の生活には不必要であり無意味なのである。數のことはこれぐらゐにして次に時間について述べよう。

時間の指導　時間と云ふものを幼兒にはつきりさせるためには、幼兒の生活を時間的に整へてやることが最も大切である。その第一歩として起床、就床及食事おやつの時間を一定することが必要である。これは子供に時間の觀念を把ませるためのみではなく、人間は時間と云ふものによつて規律ある生活をすることが大切であると云ふことを體得させることに主眼點があるのである（その結果として自然に時間觀念を把むことになるわけである。）つまり「八時になつたから寢ませう」とか「三時だからおやつをあげませう」とか云ふ言葉を日常使用することによつて、人間は時間によつて生活してゐるのだと云ふことを自然に體得させるのである。今迄はよく「早く寢ない

とお化けが出るよ」などゝ云つて寢かせることがあつたが、これはお化けと云ふものに大きな力を持たせたことになるが、今度は時間と云ふものに大きな力を持たせることになるわけである。

從つて母の都合によつて遲くしたり早くしたりする氣まぐれをつとめてさけることが大切である勿論かう云つたからとて例外を全然認めないと云ふのではないことはよく御承知願ひたい。凡そ人間のすることで例外のないなんて云ふことはないのであつて、只一年間なら一年間の生活の中八分通り規則正しい生活を營むことが大切だと云ふことを云つてゐるのである。

先づ起床時間を六時ときめたら、六時になつたら「六時だから起きませう」と云つて起こす。決して「おめざをあげるから起きなさい」とか「早くおきないとお父さんに叱られるよ」とか云はない。勿論父が率先して起き子供を散歩にでも連れ出すことになればこの上もない。この間、訓練してゐるんだと云ふやうな雰圍氣は少しも感じられないやうな和氣靄々たる態度がほしい。

七時に朝食とする「七時だから御飯にしませう」と云ふ。子供が遊びに夢中になつてゐたら、少し大きな聲で「さあ七時だ、御飯だ御飯だ」位のかけ聲もよろしい。相當期間を經てば、七時と云へば、食卓に集まるやうになる。晝食の時間も出來るだけ十二時に守ることがのぞましい。

十二時になつたら「さあ十二時だ御飯よ」と聲をかけらるだけの食卓の準備がほしい。一方時間にならない中に子供が「早く御飯にして」と云つて來たら「もうすぐ十二時だから待つていらつしやい、あんた時計を見てゐて十二時になつたら教へて頂戴」と云ふ風に出る。そして子供が「針がどこへくればいゝの」と聞いたら十二時のときは針が二つ重さなるのだのと云ふことを教へてやるがよい。すると子供は眞の必要によつて時計に注意するやうになる。

午後の三時にはおやつを與へる。三四歳迄は食事と同じに「三時だから」と云ふ言葉を使ふ。五六歳になつたら今度は子供の方で時間に注意させるやうにする。例へば外に遊びに行つてゐる時三時に歸つて來なければおやつをあげないと云ふ約束をする。さうすると子供は外に行つてゐても、店の時計や遊びに行つた家の時計に注意するわけで、時間はまさに實際の必要となるのである。（一方三時にならぬのにおやつを催促して來たら、前と同じ調子で行くことは云ふまでもない。）若し三時前後に歸つて來なかつたら與へなかつたおやつは夕食後に與へるがよい。健康な子供であれば、食慾に從つて、いつぱいになれば無暗に食べすぎたりはしないものである。

夕食の時の注意は同じことである。床に入るのは大體七時半頃から八時頃の間に一定するのが

よいだらう。この時も前に云つたやうに「八時になつたから寢ませう」と云ひ、決して「寢ないとお巡りさんが連れて行くよ」などと云ふ非教育的な言葉を使はぬことである。

かやうにして生活から入つた時間の觀念は眞に體驗されてゐるから、それだけはつきりしてゐるわけである。國民學校に入り、時計を教へられるとき先生が大きな時計を持つて針をまわし、それが七時、これが三時と云つて教へる。しかし實物教育などと云つて實際の時計を見せてこれで足れりとすることは誤りである。そこには前述のやうな子供の實際の要求が少しも含まれてゐないからである。目からのみ入つたものでは子供の生活に喰ひ入るものではない。子供の生活の要求から生れて體驗されたものであつてはじめて直觀教育になるのである。

（以上の生活の時間割は勿論一つの見本にすぎないから適宜に各家庭に合つたやうに變更されることは云ふまでもなからう。勤人の家庭では、子供は通常父と接近する機會が少いだけに父と接近することを非常によろこぶ（例外はあるが）。從つて起床や食事の時間など父と同一時間とした時には變更を免れぬわけである。その場合も睡眠時間を考へて餘り變則にならぬやうに變更することがのぞましい。）

五、創造的態度（自ら工夫する態度）と生活指導

先づ子供の自發性を伸ばせ　創造的態度を作ると云ふ方面から見て、その基礎として何が最も大切かと云へば、それは子供の自發性を充分に伸ばしてやることである。

自發性と云ふのは自分から進んで何かをしようとする氣持であり、又何でも「自分で」「ひとりで」したがる氣持である。云ひかへれば自分の力をためす機會を求める氣持であると云つてもよいであらう。幼い子供がやつと自分で靴が穿けるやうになつた頃、大人に手傳はれると憤慨して「自分で自分で」と云ふのは、この自發性があるからである。これは子供に當然現はれる一つの傾向であり、恐らく子供の盛んな生命力の一つの現はれと云ふべきものであらう。從つて普通健康兒であれば誰でも自發性を持つてゐるわけである。

ところで創造的態度とは前にも說明したやうに自ら工夫して新しきものを創り出すと云ふ態度であるし又自ら自分の進む道を切り開いて行かうとする態度でもある。この場合に自らと云ふ氣持の基礎になるのが自發性なのであつて、幼兒時代に自發性を充分に伸ばして置かなければ生長

の後、創造的な精神を求めやうとしても不可能と云ふことになるのである。

自發性と劣等感　この自發性を持つてゐると云ふことを逆に云へば、子供が過度な劣等感を持つてゐないといふことになるのであるから、この劣等感と云ふことも説明して置かう。

劣等感とは云はゞひけ目の感じであるが、子供の劣等感として最も著しいものは、子供が大人に對して抱くひけ目の感じである。子供は大人とくらべて身體が少さいと云ふことや、子供がしてはいけないことでも大人は勝手にすることが出來ると云ふ點で常に羨望の念を抱いてゐるものであり、それ故に又自分は子供なんだから駄目なんだと云ふ自分を劣等視する感情を抱いてゐるのである。これは普通の子供であれば多少は持つてゐるものであり、又これあるが故に子供は早く大人になりたいと思ふ。その意味でこれは子供が精神的に發達する無意識的な原動力になるわけであるが、これが過度になると子供の自發性を害することになるのである。これを過度にする原因は色々あるが、その一つは子供のすることを無暗に貶すことである。例へば子供が畫を描くと、「なんだいこの顏はお化けみたいだね」と云ふ。又子供が折角ひとりで寢卷をたゝむと、「こんなにくちや〳〵ぢやあしやうがない」と云つて親がとりあげてたゝみ直すと云ふやり方であるが、

かう云ふことは要するに子供に向つて「お前は駄目なんだぞ」と云つてゐることになるのである。大人でも「お前は駄目だ、お前は駄目だ」と貶されつづけたら大抵怒つてしまふか氣をくさらせてしまつて何もする氣がなくなつてしまふであらう。子供の場合には一層他人の言葉に左右され易いから、無暗に貶されたり叱言を云はれると「僕は駄目なんだ何をしても一人前には出來ないんだ」と云ふ感じが強くなり、自ら進んでしようとしなくなつてしまふのである。これを別の言葉で云へば子供に自負心がなくなつてしまつたのである。(つまり僕だつてこんなに立派に出來るんだと云ふ氣持が失はれてしまふのである。)この場合に子供の氣質によつて單に萎縮するだけでなく逆に反抗する傾向になる場合もあるが、いづれにしても自負心が失はれ自發性は阻害される。要するに貶すことや無理解な禁止、叱言、干渉しすぎることなどが自發性を阻害する原因であるが、以下に例を以て説明して行かう。

自分で食べたがる氣持を禁止するな　子供は滿一年半頃から二歳頃にかけて自分で箸やサヂを持ち自分ひとりで食事することを主張する。この時大抵の家庭では御飯をこぼすとかたくさんたべないと云ふ理由でこれを禁止するのを常とする。しかしこれは大切な自發性や獨立心を養ふ機

會なのだから、無暗に禁止してはならないのである。物資殊に米の如きは今日は殊に大切なものである。しかし人間の精神はそれよりももつと大切なものであることを忘れてはならない。この時代の子供にとつて物を大切にすることを學ぶよりも自發性と云ふ根本のものを養ふ方がもつと大切なのである、第一この年齢に於て物が大切だ、節約だと云つたところで一體判ることだらうか。角を矯めて牛を殺すの愚を演じてはならないのである。

先づ子供自身にサジを持たせて勝手にひとりでやらせるがよい。ボロ〳〵こぼすかも知れぬがそれでもよい。こぼしたよと云ふ注意すら與へぬがよい。そつと手を廻してこぼした米粒をかたづけてしまひ「マヤ坊や御利口さんね、上手にたべられるのね」とほめてやるがよい。子供は自分のまわりを見てこぼれてゐないので「オヤ」と思ひ、次にはこぼすまいとして茶椀の方へ口を持つて行つて、茶椀からサヂをすぐ口の方へはこぶやうになる。この樣に自負心を與へ、同時に練習の機會を與へられることによつて、次第に上手に食べられるやうになり自發性を養ふことになるのである。又若し途中でくたびれてしまつて充分に食べないやうであつたら、「さあ今度はお母さんがお手傳ひしてあげますよ」と云ふ調子で食べさせてやればよいのである。

寢卷と自發性　幼兒が何でも自分でしたがることは寢卷の場合にも現はれ、滿二歳をすぎる頃にはひとりで着たがるものである。この場合、大抵は左右をあべこべに着るし又冬などぐづ〳〵してゐて風邪でもひかれては困ると云ふので、いそいで取り上げて大人が着せてしまふと云ふことになりがちであるが、出來るだけ子供の自發性を尊重したいと思ふ。左右をまちがへるのはこの年齢の子供の物の考へ方が自己本位（我々はこれを自己中心と云つてゐるが）であると云ふことから來る當然のことなのである。つまりこの頃の子供は相手の左右をそのまゝ自分の左右に思ふのであり、眞の左右が區別出來るのは滿五歳半頃になつてはじめて出來るのが普通なのである。又寒いと云つても閉めきつた部屋ならば滅多に風邪を引くものではない。親がさうびく〳〵して神經質になり、積極的な鍛錬（例へば輕い皮膚摩擦とか薄着の習慣）を怠るから風を引くのである。とにかくひとりで着させて見るがよい。寒ければ自ら早く着るやうに動作も早くなるやうになる。たとへ左前になつてもそのまゝだまつてゐる。直したければ子供が寢ついてからそつと直してやるがよい。寢つきたての子供は餘程觸つて動かしても目をさまさないものだ。この時「こんな着方ぢやあ駄目よ」と云つて着かへさせることは前に云つたやうによろしくない。學校へ上る

頃になつてもひとりで着物の着られない子供がある。依頼心が強くて困りますと云つて親は嘆き又子供を叱るが、一體誰がこの依頼心をつけたのだらうか。これは依頼心と云ふべきではなく、むしろ劣等感であり、子供にとつて、そんなことは自分には出來ないことだと思ひこまされてしまつた形なのである。

さて以上述べたことの外に創造的な態度を養ふ方法は色々あるが何と云つても大切なのは、この自發性を養ふことである。たとへば工作の材料(粘土、紙)を與へて自ら工夫創作させる方法なども自發性あつてはじめて出來ることなのである。勿論粘土細工や紙細工をしてゐる間に自發性を養ひそこから創造工夫する態度を作ると云ふことも云へるのであるが、實際問題として、粘土や紙が扱へるやうな年齢に達する前に自發性を養ふことに力をそゝがないと、それが萎縮してしまふ虞れが多分にあるのである。こゝでは工作の導き方などは紙數の關係で說明しないのであるが、それらが必要でないと云ふのではないのである。

六、科學的な考へ方と生活指導

科學的な考へ方とは何か　科學的な考へ方とは判り易く云つて見れば、一つの出來事(現象)をその事實に即して(實證的に)原因結果の關係に於て考へることである。もつとやさしく云へば「何故にこれはかうなつたか」とか「何故あれとこれはかうちがふか」等と云ふ風に考へて行くことである。そしてそのやうな疑問を持つだけでなく、更にそれを解決する迄追及して行く態度である。

幼兒に自分で考へる機會を與へよ　これを頭に置いて幼兒の考へ方の指導を考へると一つの原則がある。それは幼兒に自分で物を考へる機會を豐富に與へてやることである。そしてそれによつて自分で物を考へて解決する態度を養つてやることである。勿論思考と云ふ心のはたらきは人間にとつては生れながらにして存在するものであるから幼兒の場合とても放つて置いても當然考へるはたらきを働かせてゐるわけである。從つて我々はそのはたらきを充分にみがくやうに、まはりから積極的に又消極的に助力を與へてやればよいのである。積極的にと云ふのはその心のは

たらきを助長するやうにこちらから進んで働きかけてやることであり、消極的にと云ふのはそのはたらきを妨害するやうなことをしないことである。これは原則であり又少し抽象的に書いたから判りにくいかもしれぬ。早速例を擧げて說明しよう。

子供に物を考へることを助長するために、第一によく物の理屈を子供に判る程度で說明してやることが大切である。たとへば火鉢は子供がわからずに觸るととかくまちがひを起す心配がある。そこで大抵は「火鉢はあぶない」と云ひ、火箸を持つて灰でもかきまはしてゐれば早速「いけません」と禁止命令が出て只「あぶないから」と云はれる位が關の山であるが、子供はどうしてあぶないのかわけが判らない。それは熱いと云ふことと火鉢とが聯合してゐないからである。そこでこれをもう一歩つつこんで子供にそれを知らせてやることが大切である。滿二歲位の子供にはかう云ふ說明が可能である。火鉢のそばへ行つて「ほらこゝに火があるでせう、だからこゝがこんなに熱いのよ」と云つて、一寸瀨戸の熱いところか、やかんのあついところにちよいと指をさわらせてやるがよい。やけどなんかしないやうにちよいとさわらせるがよい。(これを殘酷だなどとセンチメンタルに考へないこと)それから更に火のない火鉢があつたらそれを見せ「これは火

がないから熱くないのよ」と云つて觸らせてやるのもよい。かうすると子供は火鉢の熱いことを體驗するし又靜かにわけを話して貰つたことにより、只「いけません」と云はれたよりもはるかによくおぼえてゐるし、又考へる材料を與へられたことにもなるのである。そしてそれを基として考へ、火のない火鉢はいぢるが火のある火鉢は注意すると云ふ風になるのである。これを頭から「あぶない、觸つてはいけない」と云はれてゐたのでは、考へを發展させるきつかけがない。又物を考へないで無暗にこはがると云ふ態度を作つて子供に消極的態度(ひつこみ思案)を作り上げてしまふことになるから注意しなければならないのである。

これと同じに、小包をあけるところとか、料理するところとか、見せてさしつかへないものは出來るだけ子供に見せてやるやうにする。子供は亦見たがり手を出したがるものであるから、子供に出來ることは少しでも手を出さしてやることが大切である。例へば小包が田舍から來たなどゝ云ふと、早速子供は何が入つてゐるのだらうと好奇心を持ち、親があけやうとすれば大抵そばにくつついてゐて何かと手を出したがるものである。ところが紐がなか〳〵とけないと云ふとそこへ子供が手を出すのでとかく母親はヒステリックな叫び聲をあげて「うるさいね、あつちへ行つ

てゐなさい」とやる。このやうにとかく子供を遠ざけたがるものであるが、逆にこちらから進んで子供にさう云ふことを見せ體驗させてやらうと云ふ氣になることが大切である。小包の場合であつたら「さあ坊やも一緒に手傳つて頂戴」と云ふ形で行くのである。或ひは子供が手を出すと時間も多少餘計にかゝるかもしれないが、それ位の時間を惜しんではならないのである。

かう云ふやり方で行くと、子供は物にすぢみちがあること、理屈があること（極く簡單な形ではあるが）に知らず知らず氣付いて行き、さう云ふ仕方、考へ方を自分の身についたものにして行くのである。（これが正しい物の取り扱ひ方と關係して來るのである。）さう云ふ實際を見せず體驗をさせないと、今云つたところの物のすぢみちを知らずにすごすだけでなく、更に子供は大人が何か特別な力を持つてゐるかの如くに思ひ込み、自己の劣等感を深めて行くことになるのである。そこから自發性が缺けてくると云ふことは前に説明した通りである。

いたづらを理解せよ　一體に子供のいたづら（勿論大人の目から見てのいたづらであるが）の背後には子供の思考がはたらいてゐることが多い。これをよく見拔いてその思考の芽生へをつみとらぬやうにすることも大切である。

筆者の友人の家庭に滿二歳の男の子がゐるが、ある日菓子の鑵をあけようとしてゐたがなかなかあかない。見てゐると遂にそれを投げてあけたそうである。これは普通には「いたづら」だ。ところでその友人によれば、この子供は二三日前に別の鑵を投げたときに蓋が偶然にとれたことを經驗してゐたとのことである。これはまさにその子供が考へてやつたことなのである。つまり菓子がたべたいが仲々あかない。苦心してゐる中にふと先の日の經驗を思ひ出す。この方法だ、と云ふわけでそれを使つて問題を解決したわけである。かう云ふ場合には勿論、鑵を投げると云ふやり方は奬勵すべきではないが、この年齢の子供にいたづらなんて云ふ考へはない。又二歳兒には親の目をごまかさうとする考へもない。たゞひたすらに食べたいの一心でどうしたら蓋がとれるかと考へたのであり、正しいあけ方を知らなかつたから、又それが出來なかつたから投げたにすぎないのである。それ故に一應は子供の考へたことを認めてやり、それから正しいあけ方を教へると云ふ行き方がほしいと思ふ。「よく坊やあけ方が判つたのね、でも鑵はかうするとあくのよ」と云つて靜かにあけて見せるがよい。（そして更におやつの時間でなかつたら「まだ三時にならないから駄目よ、あとであげますよ」とでも云つて鑵はとりあげてしまふがよろしい。この時子供

が駄々をこねたら、泣いても放つて置いて相手にしないだけの強さを持つてゐなければならない。）かうしたとて子供がすぐに大人のやうにあけることが出來るやうになるわけではない。しかしこの場合は考への芽をつまぬと云ふことに主眼點があるのだからこれでいいと思ふ。これをいきなりボンと叱るとせつかくの思考の芽生をつみとることになるのである。

質問の答へ方（滿二歳半頃）　考へると云ふ心のはたらきを助長するにあたつて第二に大切なのは、幼兒の質問の取り扱ひ方を正しくすると云ふことである。

幼兒は滿二歳半頃になると「これなあに」と云ふ質問を盛んに發するやうになる。これはその頃になると歩行が自由となり言葉が發達して來たことによつて、幼兒の生活の場面がづつと大きくひろがつたためにたくさんの未知のものごとにぶつかつたので疑問を發したわけなのである。そこに極めて簡單ではあるが、物を考へると云ふ心のはたらき（思考）が見られるわけである。云ひかへれば、未知のものを自分のものとしてより廣い世界を知らう（展開しよう）としてゐるのである。この態度を助長するやうに導くことが幼兒時代の初期には極めて大切なのである。

助長すると云ふのは、この時期には幼兒の質問に快よく相手になつてやることである。と云ふのはこの質問に對してうるさがつてろくな返事を與へてやらなかつたり、露骨にその態度を見せたら、幼兒は質問などするものではないと感じ、自分から考へる態度をひつこめてしまふからである。

そこで「これなあに」と云ふ質問に對しては、はつきりと名稱を教へるのがよい。いくら子供が片言をしやべるからと云つても親迄一緒になつて片言をしやべる必要はない。子供は片言を云ひたくて云つてゐるのではない。大人の言葉が使ひたいのだが、それを云へないので片言を云ふのである。そこで電車ならばデンチヤと云はないでデンシヤと云ふがよい。但し犬のやうな特有のなき聲を有するものは「ワン〳〵でせう、犬ね」と云ふ形を使つてもよい。同じく「モウ〳〵でせう、牛ね」と云ふ。

（註）片言（幼兒語）で教へることは、大人にとつては子供を可愛くとり扱つてゐるつもりでも、子供自身にして見れば低く見積もられてゐると云ふ感じがないとは云へない。そこから子供に劣等感を植ゑつけることにもなるし、又その結果子供を甘つたれにするから片言に執着してゐてはいけない。

この片言の初期の時代は可愛らしいので母親もつとめて教へようとするが、子供が求めた以上には教へない方がよい。無理に教へようとすると神經質になる。ところが三歳ともなるとかなり

質問が頻繁となり母親はうるさがるやうになりがちである。質問されてもきこえぬふりをしたり露骨にうるさがる。これは子供の「考へる」ことの芽生をつみとることになるのであるからどこまでも親切に氣長に相手になつてやるべきである。

滿四歳頃の質問の取り扱ひ方　次に年齢が進んで通常滿四歳頃になると「何故」とか「どうして」と云ふ質問が出てくる。例へば「どうして電車は走るのか」とか「どうして人が動くとお月様も動くのか」と云ふ種類のものである。これは簡單ではあるが因果關係を知らうとしてゐるわけである。親の方から云へば特にうるさくなる時期である。この期に於ける質問の取扱ひ方の要點を次に說明しよう。

(1)　快よく相手になつてやることは依然として大切なことである。これについては前に述べたことを思ひ起して頂けば充分だと思ふ。只一つだけつけ加へて置き度いことがある。それは子供は同じ質問をすぐに又暫く時をへだてゝ、くりかへして聞くことがある、と云ふことである。かう云ふ場合には「今話したばかりぢやないか」とか「この間敎へたぢやあないか」と云ふ叱言が出ることが多いが、これ等の場合はいつもはじめての質問のつもりで快よく應じてやることが大切である。

(2)　子供からの質問は一應子供自身に考へさせて見ること。「何故」「どうして」の質問に對しては、子供自身に考へさせるために、「どうしてゞせうね、あんた考へてごらんなさい」とか「一緒に考へて見ませう」とか云ふ逆質問の形をとることも大切である。これで子供自身から適當な答が出なければ次にこちらから說明してやることになるのである。

この逆質問の場合に親の態度としては、親も本當に一緒に考へてゐるのだと云ふ態度を自然にとるやうにしたい。これが、自分(親)は判つてゐるのだが「お前考へて見ろ」と云ふ態度だとよろしくない。つまり試驗でもするやうな態度であると甚だまづい。子供は試されることが嫌ひだから積極的に質問して來なくなるのである。この點で逆質問はあまり濫用すべきことではない。

(3)　質問に對して說明してやるときは、子供の考へ方で說明してやること。質問に對する說明は大人の說明であつてはならぬ。どこまでも子供に判る範圍で說明しなくてはならない。今迄はとかく大人の考へ方を元にして說明しようとするために、幼兒には判らぬし又說明しにくいこともあり、その結果幼兒の質問に應じることがひどく面倒なことにもなつたわけなのである。例へ

ば「電車はどうして走るの？」と云ふ質問を受けたとする。科學教育を、知識を與へることだと考へてゐると早速「モーターと云ふものがあつて、それに電氣を通じて動かすのだ」と云ふ答をしなくてはならないと考へるかもしれない。しかしこの時期の子供にはこれでは理解出來ない。又すべてこの調子で行くと、專門家でなければ說明の出來ないむづかしい理論がたくさんにあるわけだ。子供が求めてゐるのはかう云ふ根本的な因果關係ではなく、もつと輕い意味の因果關係である。つまり表面的なもので、子供は自分の日常經驗との關聯によつて說明をつけようとしてゐるのである。決して深いことを要求してゐるのではない。むづかしい理論を言葉だけやさしくしても駄目である。從つてこの場合には「電車は車があるから走るのよ」と云ふ程度の答へでよい。これによつて四五歲の子供は充分滿足するし又これが彼等の頭でこなし得る考へ方なのである。

同じやうな例をつゞけて擧げて見よう。「お花はどうして咲くの」に對しては「お花きれいね、お友達の蝶々を呼ぶんで、お花も身體をきれいにするために咲くのよ」でよい。「蝶々をどうして呼ぶの」と聞かれたら「お花うごけないでせう、だから蝶々の方を呼ぶのよ」と答へる。

子供に判る範圍で答へればよいと云ふことは誕生の事實に關する質問、卽ち「赤ちやんはどこから生れるの」と云ふ質問に對する時に最もあてはまることである。一般に親達は子供に知られてはならないと警戒してゐる性の事實を頭に置きすぎる結果、「そんなことを聞くもんぢやありません」と云ふ式で行くか、或ひは又木の股から生れたとか病院でお醫者さんが下さつたとか、色々それを避けようとする。しかし幼兒が求めてゐるのは、中學生が求めてゐるやうな性的事實に關する知識ではない。大人の困ることを聞いてやると云ふ氣持ではないし、又子供はある特定の場所を求めてゐるのでもなく、非常に漠然と、どこからと云ふことを求めてゐるのである。從つてこの種の問に對しては只漠然と簡單に「お母さんのおなかゝら生れたのよ」と答へればそれでよいのである。子供は滿足する。それは「お米はどこからとれるの」と云ふ質問に對して「田や畑でとれるのよ」と云ふ答を得て滿足するのと同じである。それを局所的に答へようとするのは大人の考へ方であり、何とかしてそれを避けるために「おなかゞわれる」と云ふやうなことになつたり又答へにくゝなるのである。そしていづれの場合にしても、何氣なく躊躇せずに答へると云ふことが大切である。

又中には周圍の心なき大人の影響によつて只單に知識的に、どこからどうして生れるのかと云

ふ質問をする場合もある。又現實に妊娠中の母親のおなかに赤ちゃんが居ると聞いてゐて、それが生れて來たとき、子供は大きなおなかゞ小さくなり現實に赤ん坊を見るので、「何處から生れて來たの」と聞くことがある。これ等の場合は、可成に或る特定の場所を求めてゐるやうに思はれる。しかしかやうな場合にも決して逃げる必要はない。かう云ふのもよいであらう。「赤ちゃんはおなかから生れるのよ、そして生れるときはお母さんはとても苦しいので何んにも判らなくなつてしまふのよ、だから何處から生れるのか判らないの、お醫者さんだけ御存知なのよ」。然しこゝ迄來る幼兒は少い。

(4) 質問はそのまゝにせず、時を隔てゝ同一種類の質問があつた場合、二つを關係させて考へさせること(比較研究)。一度質問の種になつたことが時を隔てゝ再び起つたならば、それを利用して比較して考へるやうに導いてやることも大切である。例へば時計が棚から落ちて壞れたとする。その時「どうして壞れたの」と聞かれて、「高いところから落ちたでせう、だから壞れたのよ」と答へて置いたとする。そして次に茶碗を土間に落して割つたと云ふやうことがあつたら、「この前棚から時計が落ちたら壞れたでせう、今日もお茶碗落したら壞れたのね」と、云ふのである。

さきに擧げた「電車はどうして走るの」と云ふ場合、「車があるから走るのよ」と答へて置いて、そこへ自動車が來たら「自動車も車があるでせう、だからやつぱり走るでせう」と云ふ形で行くのである。

(5) さて以上は幼兒の質問の中、答へられるものについてその答へ方を述べて來たわけであるが、さてよく考へて見ると、幼兒の質問は全部が全部答へられるものではないし、又答へるべきものでもない。その時の親の知識とか判斷では答へられないときは、親も一緒になつて考へると云ふ態度で「どうしてでせうね」と云ふ形で殘す。そして親自らも調べ解答を求めて子供に說明してよい範圍の問題であるかどうかを知るべきである。それが知らすべき範圍のことなら機會をとらへて說明してやるのである。

滿六歲の次郎君がある日火鉢にあたりながら手を見てゐると、ふと母親にかう質問した。「どうして手にしわがあるの」母親は突差にうまい答が浮かばなかつたので、一應「どうしてでせうね お母さんもよく考へて見ませう」と云つて、早速近所の知り合ひの先生のところへ遊びがてら相談に行つた。すると先生はかう云つたらいゝでせうと云つて次の樣な答へを敎へて下さつた。「着

物を見て御覽なさい、たくさんにしわがあるでせう、これはしわがないと窮屈でたまらないからゆつくりさせるためにしわが出來てゐるのです。手の皮もそれと同じにしわがあるのですよ、ぴんとしてゐたら手がまがらなくなつてしまふでせう」

答へられないと云ふのにもう一つ別の場合がある。それは子供には到底理解出來ないやうなむづかしい理論を必要とする場合である。例へば次のやうな場合である。

ある夏の夜のことであつた。滿四歳半のとし子ちやんはお父さんと一緒に夕飯後二階でお月樣を見乍ら涼んでゐた。とし子ちやんは二つ年下の妹と何んと云ふこともなしにピョン〳〵はねて遊んでゐたが、不意にお父さんにかう質問した。「私がとぶとお月樣もピョン〳〵とぶね、どうしてとぶの？」そこでお父さんは早速「エッ！お月樣がとぶんだつて、それぢやあお父さんもとんで見よう、……（とんで見る）……あゝほんとにとぶね、よくとし子ちやん氣がついたのね」と答へたので、とし子ちやんも滿足して又ピョン〳〵とびながら遊びつゞけた。

右の例のやうな質問は、相對と云ふ考へ方を以てしなければ說明出來ないことであり、幼兒には到底無理なことである。かう云ふ場合にはこのお父さんのやうに、親もはじめてその事實にぶつかつたやうな態度を示す。そして子供自身に大發見をしたかのやうに感じさせ、發見のよろこびを感じさせるのである。そこに科學的發見への出發點があるわけだ。

右の二つのいづれにしても、親に判らないことだからと云つて簡單にかぶとを脫いでしまひ「お母さんにはわからないよ」と云ふ無知を示す態度を無暗に見せるやうなことをしてはいけない。これが度重なると子供は親への信賴感を失ふことになり、從つて又親の敎育的な權威と云ふものが失はれて行くことになるからである。子供に對して正直であれと云ふことは馬鹿正直であれと云ふことではない。「どうしてゞせうね、お母さんも考へて見ませう、あんたも考へてごらんなさい」と云ふ態度、そして更にその約束を守つて親切に解答を與へたり相手になつてやることが度重なると長い間には幼兒の方でもその年齡の進むと共に「親は子供のために說明の仕方を考へて下さるのだ」と云ふことが判つて來て親への尊敬と信賴が增加するのである。

(6) 幼兒の中には、殊に滿六歳近くになると、自然な質問でなくて質問のための質問と云つたやうな不自然な質問が見られることがある。自分はこんなことにも氣がつくんだぞと云ふやうな態度の質問もあるし、又大人を困らせるやうな質問もある。これはこまつちやくれた甘やかされ

た子供に多い。そして母親があまりに質問をすることを特別な手がらでもあるかのやうに思ひ込ませるやうな態度をとつた結果でもある。從つてこれは精神發達による眞の質問ではなく質問癖とも云ふべきものである。このことをもう少し詳しく說明して見よう。世の中には子供を自分の虛榮心のだしに使ふ親がある。例へば學童を持つた母親であるとすると、どうかしてその子を一番にし級長にして他人に誇らうとする。そして自分の虛榮心を滿足させようとする母親である。かう云ふ母親が幼兒の質問は知識慾の現はれであるとか探究心の芽生であるとか聞くと、忽ち自分の子に過度に質問を奬勵することになるのである。子供が質問もしないのに親の方からどうしてどうしてと聞くのである。そして他人に會へば「宅の子供はもう何んでも聞きたがりまして困るんでございますよ」と云ふが、その心は「どうです宅の子供はこんなに探究心に富んでゐるんですよづゐぶんえらい子でせう」と誇つてゐるのである。子供はこれを聞けば敏感に母の內心を感知する。そしてさうすれば母の氣に入るのだと云ふことを感ずるから、それが質問のための質問謂はゞ質問癖となつて現はれて來るのである。かう云ふ風な、野心があり而もそれが淺慕であると云ふ母親の子供は、單に質問癖の點だけでなく、すべての點で淺慕な小賢しい子供にさせられてゐるのである。注意しなければならないところである。

子供の質問が質問癖によるものであると判つたらこれをあまり重要視せず、素知らぬ顏で無視するのがよい。原因が母にあるならばその母の態度を變へることも大切である。

七、科學的な處理と生活指導

次に物事の科學的處理と云ふ點から幼兒の生活指導の要點を述べて見よう。

科學的處理とは何か　科學的處理と云つても色々の意味がある。例へば3頁に擧げた防火用水の配置のことなども、合理的に配置すると云ふこと全體が、一つの科學的處理であると云へるだらう。これは廣い意味の處理と云ふことであるが、こゝではもつと狹い意味なのである。例へば採集して來た植物を分類するとか、更に分類したものを標本に作るとか、云はゞ物の取り扱ひのことを云ふのである。從つて科學的處理とはやさしく云へば、正確な處理と云ふことであり、更にくだいて云へば正確な物の取り扱ひ方であると云へるであらう。そしてその根本になるものは何かと云ふと、前の植物分類の例で云へば、分類の仕方とか標本の作り方とか云ふ個々の知識

ではない。同じく寒暖計の見方とか顕微鏡の使ひ方とか云ふことでもない。結局一番元になる大切なものは几張面に物事を取り扱ふ態度である。

この態度を作るには幼兒時代にどうしたらよいかと云ふと、一見して科學と縁のないやうな、玩具の整理と云ふ方面から几帳面な態度を養ふと云ふことが第一に考へられるのである。

先づ整頓の習慣をつけよ　先づ親自身の生活が几帳面であり、きちんとしたものでなければならないことは、前から度々述べたところの親が率先して模範を示すと云ふ立前上當然のことである。がこれはこれとして次に玩具のあとかたづけと云ふことを述べよう。玩具のあとかたづけはよち〳〵歩きの時代から習慣として行ふのがよい。この頃の子供に親の方から只口でおもちやをおかたづけなさいと云つても判るものではないことは云ふまでもなからう。(そこで親が率先して模範を示すと云ふ教育の重要な原則が實行されざるを得なくなるのである。)この時代の子供は玩具のあとかたづけの意味など自覺しないが、それでよいのである。とにかくおやつを頂く前とか御飯を頂く前とか遊びのくぎり目に來たとき、そばにゐる大人(親や女中等)がさきに立つて遊びの形でもとの場所にをさめると云ふやり方で行くのである。(從つて最初から玩具の置き場所や箱は

一定して置くことが必要だ。)積木で遊んでゐるとしたら「さあ、太郎ちやんもうすぐ御飯ですからね、これをこゝに入れませう、……(積木の箱を出す)……さあ一つ二つ三つ……太郎ちやんも入れて頂戴、かはりばんこに入れませうね……うまいのねお利口さんね……」と云ふやうな調子でやる。とにかく玩具あそびをやめる時は必ず後仕末をするものだと云ふことを習慣にするのである。こゝから進んで次には「おしまひなさい」と云はれゝば自分で出來るやうになり、更に五六歳頃には指圖されずに後仕末が出來るやうに躾けて行くのである。この場合に親に根氣が要ることは當然である。一二回くりかへして數日の中にこの習慣をつけようとすることは誤りである。

着物の整理　物を整理すると云ふことは玩具だけに止らない。衣服類一切を子供一人々々別の箱とか引き出しに入れて一定することも大切である。このために石油箱の古を求めて紙を貼り、利用するのもよい。そしてそれらすべて子供の手のとゞくところに、自由に出し入れの出來るやうに置いてやる。滿三歳半頃には例へば洗濯物が乾いたら「はいあなたのシャツですよ、あなたのひき出しに仕舞つて頂戴」と云つて自分で仕舞はせるやうにするとよい。そしてその時「お母さんのお手傳ひをしてくれて有り難う」と云ふ氣持を、口にはそれと出さなくても、表はしてゐ

る態度であれば尙更よい。

所持品の整理　以上の玩具とか着物とかのための場所は大抵どこの家庭でも一應は持つてゐるものであるから、問題はたゞそれを幼兒に都合よくしてやることである。(例へば帽子掛を低くして手のとゞくところにするとか引き出しを下の方にするとかすること。)ところがもう一つ別に新たに幼兒に與へてやらねばならぬ場所がある。それは幼兒の所持品を入れて置く場所である。所持品と云ふと大げさに聞えるが子供は街から野原から色々のものを拾つて來たり買つて來たりして大切に自分のものにしてゐる　それはある時はサイダーの王冠であり、ある時はぜんまいのきれはしであつたり、めんこびー玉の如きものや又時には我々の目からは殆んど意味のない石ころなどであるかもしれない。(これは蒐集癖とも云はれるものによるのである)又お土產に頂いた折紙とかクレヨンだとか、子供の持ち物は案外馬鹿にならぬ。たとへ大人の目にはどんなつまらぬものでも子供にとつては大切な自分の所持品である。さう云ふこまごました「所持品」を入れて置く場所を與へてやりたいのである。母親の用箪笥の引き出しの一つを割愛してやるのもよい。空き箱に美しい紙を貼つてやるのもよい。とにかく「こゝはよし子ちやんの引き出しだから自分の

自由にすることが出來るのだ」と云ふ場所を與へてやることが大切である。與へるのは滿二歳頃に始める。これを與へられると子供は何か自分のものが出來れば、ちらかしつぱなしにしないでそこへ入れるので、それによつて整理と云ふことの第一歩を踏み出すし、又自分の場所が出來たことに對する誇りを持つので自負心をつけ自發性を養ふのにもよいのである。つまり子供は自分の場所を與へられたことによつて、自分も一人前に扱はれたのだと云ふことを感じ、大きなよろこびを持つのである。これを逆に云へばそれ程子供と云ふものは早く大人のやうに自由に何かしたいのである。一人前に扱はれることを求めてゐるのである。從つてそれを與へれば、子供はそれを與へてくれた人の云ふことによろこんで服すると云ふことになるのである。ところが普通には子供にそれを與へないで只むやみに子供に云ふことをきかせようとするばかりである。それは何故かと云ふと、親にとつて與へることは面倒くさいが、要求することは容易だからである。(これは親だけのことでなく人間全體の弱點だらうが)これでは子供はいやになつてしまつて進んでお手傳ひなどしないのはあたり前なのである。話が横道にそれたが、この點は子供を教育する上の大切な點だから述べたわけである。

子供自身の場所を與へると云ふことは單に一つの引き出し、一つの箱に止らない。國民學校へ行くやうになつたら、たとへたゝみ一疊のところでもよいから、こゝはよし子ちやんの机の場所と云ふものを與へてやりたい。廊下の行きづまりのところでもよい。そこに壁があつたらそこも子供の自由にまかせて繪を貼つたり色々裝飾をつけることにむやみに干渉することを止めにしたい。そしてその場所に關する限り助言は與へるが命令はしないと云ふことにしたい。我々はかう云ふ點に、子供の整理の心を養ふ上からは勿論、更に子供に自負心、獨立心を與へる點から、大きな價値を認めてゐるのである。そして獨立心や自發性がなかつたら、科學する心も一體何によつて動くだらうか。

計器と科學的處理　前に科學的處理とは物事の正確な取り扱ひであると云つたが、その「正確」と云ふことのために役立つのが色々の計器(例へば物差とか秤とか寒暖計の如きもの)である。從つてこれの取り扱ひに馴れさせることは科學的處理の基礎として大切であるから次に少し述べよう。

計器の使用と云ふことは家庭生活の科學化と云ふ時にはいつも云はれることであるが、又誤解される點が多い。萬事目分量が好きで計器の使用に慣れてゐない我々日本人は計器をもつと家庭生活の中で使用することが科學的なやり方だと云はれると、とかくそんな面倒くさいことは御免だと云ふことになり易い。又一方では新しがりやの人々は計器を使はないでもよいところ迄、計器を使つたりする。これは人が計器を使ふのでなく、計器に使はれてゐる形であるが、これ等はいづれも間違つたことである。最初目分量が利かないときは、目分量だけでやると非常な無駄をすることもあるから、先づ正確に計器を使つて測つて見る。そしてその經驗を重ねてゐる中に、「勘」を働かせることによつて目分量が可能になるから、それに移つて行くと云ふことが、正しい意味で科學的な態度であらう。要するに計器を使用する目的は無駄をはぶいて比較的に正確に物を處理することにあるからである。しかし乍ら現在の日本では、まだ〳〵計器が必要なのに使用されてゐないと云ふ場合の方が多いことは否定出來ないのであるから、面倒くさがらずにその使用に慣れることが大切である。

ところでこれを幼兒の場合について考へて見ると、幼兒には殆んど家庭で使ふ程度のものでも計器と云ふものの意味は判らないと云つてよい。例へば最も簡單な計器である物差にしたところ

で、それが理解出來るのは滿七歳頃のことである。滿二歳の子供に物差を與へたところで尺度としては無意味である。このやうに、計器は幼兒に理解出來ないのであるから、幼兒の後期になつても尙、子供自身にそれを使はせて、科學教育の手段とすることは出來るものではない。しかしそれらを親自身が生活の中で實際に活用して行くと云ふことは直接に幼兒にその使ひ方が判らなくとも、知らず識らずそれ等を活用する生活の仕方を重んずるやうな氣風を身につけさせて行くことになるのである。從つて子供に理解出來ぬものを無理に使はせる必要はない。只親達がさう云ふ科學的な器具を實際に使つてそれを子供に見聞させて置くことが大切なのである。

八、觀察態度と生活指導

以上に於ては、合理創造の精神からはじめて、思考(考へ方)や處理(取り扱ひ方)について、その生活指導を述べて來たのであるが、之等の考へ方や處理の仕方の更に基礎となるものがある。それは物を觀察すると云ふことである。

見ることと觀察することとの相違　觀察すると云ふことは單に事物を見ると云ふこととはちがふ

單に見ることならば子供は生れて數日經つた時から、たとへ始めは極く漠然とではあらうが、事物を見てゐるわけである。そこで、只見ると云ふことと觀察することとの相違を例を擧げて說明しよう。

「幼兒の精神發達を檢査する問題の中に次のやうなものがある。卽ち十個の正立方體の積木を以て階段の形を子供の見えぬところで作り、それを子供の前に置き、十秒間それを見せ、次にそれを壞して「今と同じものを作つて下さい」と要求する問題である。この十秒間見せるときに「よく見て置いて、今私がこれを壞しますから、今度はあなたがこれと同じものを作つて下さい」と注意する。この場合に觀察態度の出來てゐる子供、つまり觀察することが出來る子供は、前後左右に頭を動かしてよく注意して見る。時には縱にいくつならべてあるか、橫にいくつあるかと小聲で數へる子供もある。ところが觀察態度の出來てゐない子供は只漠然と見るだけで、時には十秒間それを持續することも出來ず、すぐに「もういゝよ」と云ふ態度を示したり、キヨロキヨロあたりを見廻したりする。

右の例のやうに觀察するとは單に漠然と見るのではなく、事物をよく注意して見る、そして更

に見たものを銘記してゐることである。又更にあるものを觀察して疑問を持つたならば、それを解決しようとする態度である。これが科學上の觀察の第一歩であり、こゝから始つて、知能の進んだ子供は、見たものの各部分間の聯關を把握するに至るのであるが、幼兒時代には前の初期の程度が出來ればよいのである。

さてこのやうな觀察は、廣い意味で事物を科學的に處置しようとするのに、先づ第一に必要なことである。何故かと云へば、事物をよく注意して見なかつたならば、正しい考を發展させることも出來ず、亦正しく取り扱ふことも出來ないからである。例へば電燈がこわれてつかないから治さうとする場合には、先づ何處が壞れてゐるのかを、よく注意して發見しなければならぬ。それをいゝかげんにして修理に着手しても、まぐれあたりは別として、失敗が多いと云ふことになるのである。この意味で、觀察と云ふことは幼兒の科學教育に於ては最も基本的なものであり、それだけに特に重要なのである。

觀察態度と自發性　以上で大體、單に「見る」ことと觀察することとの相違がお判りのことと思ふが、さてそれならば觀察態度を養ふにはどうすればよいのだらうか。

子供に向つて、只口だけで「よく注意して見なさい」と何べん繰り返へしたところで、決して觀察態度は出來るものではない。自ら進んで見る氣持が先づなければならない。これの一番先になるものが前の方で述べた自發性と云ふことであるが、觀察態度が科學的態度の一つの面である以上、當然こゝにも必要なわけなのである。子供は自發性を阻害されない限り、自分の周圍の事物に對して新鮮な興味を感じるのであり、その興味にひかれてそれらの事物に直接にぶつかつて行かうとするものである。美しい花を見れば傍に行つてそれを取らうとする。この氣持が花をよく注意して見る、即ち觀察しようとする第一歩である。從つて先づ自發性を阻害せず、之を助長すると云ふことが第一に必要になつて來るわけである。勿論花を見ればすぐにとらうとすることを無暗に助長すべきではない。殊に公園の花などは公德心と云ふ方面から考へなければならぬ。しかし自宅の花であつたならば、一つや二つは快よく取らせてやつて、「さあこの花をビンに入れてかざりませうね」と云ふ風に導くことがのぞましい。自發性の助長涵養については前に述べたからこゝはこれだけにして先に進まう。

觀察するものを與へること　次に必要なことは觀察するものを與へることである。子供は元來

變化あることを好むものであるから、變化あるものを與へることがよい。しかし只目さきを次から次へと變へても、それは子供の性質を輕薄なものにして落ち着かなくしてしまふだけであるから、同一のもので而も繼續的に變化するものを與へるのがよいのである。例へば庭の一遇に廿日大根の種子を蒔いてその成長の樣子を觀察させるとか、動物を飼育するとかするのである。(國民學校初等科の「自然の觀察」に於て植物の栽培や、動物の飼育を材料にしてゐるのはこの理由によるのである。)

野菜の種蒔き　滿五歲位の子供の場合に於ける實際指導例を述べよう。

先づ廿日大根の種を買ふときに子供と一緒に行く。買つて來たら種を手のひらに出して見せ、「何でせうね?」と話しかける。「小さい種でせう、これは廿日大根の種ですよ」。「廿日大根つてどんなの?」と聞かれたら、種の袋に描いてある、繪を見せるのもよいであらう。又「これを土の中にいけて置くと、お大根が出來るのよ、こんなお大根よ」と云つて袋の繪を見せてやるのもよい。大體こんな調子で進み、次には「さあ一緒に蒔きませうね」と云ふ形で種を蒔くことにする。庭の一遇とか或ひはみかん箱の中に土をいれたものとかに蒔く。種を蒔くときには種が生きてゐることを話してやり、「お水やお陽さまのおかげで芽が出るのよ」と期待を持たせるのもよい。「だから正子ちやん土が乾いたらお水をやりませうね」と云ふ風に、生き物を可愛がることを教へるやうにする。その中に芽が出て來るであらうが、さうしたら「可愛いい芽が出たでせう。今にだんだん大きくなるのよ、さうするとこの土の中に赤いちいさなお大根が出來るのよ」と又期待を持たせる。又毎朝起きたら父や母がさきに立つて「今日はどの位大きくなつたかな」等と子供にたのしげに呼びかけて一緒につれだつて見に行くやうにする。一緒に見てゐる中に、子供は根の方を見たがつて「どんなになつてゐるだらうね」と云つたら「それぢやあ一つだけ抜いて見ませうね」と云つて、抜いて見せてやるのもよい。その時赤い根がふくらみかけてゐたら「大きくなつたらいたゞきませうね、どんなにおいしいだらうね」と云ふ樣な調子で行く。

いよ〳〵充分に食べられるやうに大きくなつたら、子供自身に抜いて來させ、自分で洗はせ食膳にのぼせる。この時充分に、それ迄の丹精を褒めてやり、「買つたのよりもづつとおいしいね」と云つて、自分の努力の結果が收穫出來たと云ふよろこびを強くしてやる　このやうにして子供は褒められると、又何か植ゑてくれと要求して來ることが多いから、又廿日大根のやうに早く成

長し、早く收穫出來るものを選んで種蒔きからはじめるがよい。小松菜等もよいであらう。これはいゝかげんのびると、時々子供自身に間引きをさせて、汁の實などにすることが出來るので興味を湧かせるのによい。

草花の種蒔き　以上は野菜ばかりを例にとつたが、同時に草花の種を蒔くこともものぞましい。種蒔きのことなど前と同じであるが、花の場合は「今にこれが咲いたらお部屋にかざりませうね」と云ふ風に期待をもたせる。色々の種を蒔くやうになると、種にも色々と形や色にちがひがあることを判らせることが出來る。

野菜、草花などと共に紀念の木を植ゑることもよい。例へば幼稚園へ入つたときに櫻の苗木を植ゑるとか、國民學校入學の時に植ゑるとかする。

このやうにして一年中何かしら植ゑてやることは繼續的に、物事の變化を觀察出來る機會を作ることになるから、觀察態度を養ふ點からのぞましいことである。しかしこれ等の場合にあまり立ち入つた詮索や比較をして聞かせたり、葉の形がどうだとか、根の樣子がどうだとか教へ込む必要はない。只さうした自然の事物に親しませ、進んでそれに興味を感じさせることと、生き物

を愛する心をはぐくむことに主眼點があることを忘れてはならない。幼兒期の子供に向つてあまりにこまかいことを詮索すると興味を失ひ、いやになつてしまふからである。興味を失つては進んで觀察する態度を養ふことなど出來なくなつてしまふからである。

觀察する必要を持たせよ　以上のやうに觀察する事物を與へるのもよいが、特にそれらを與へなくとも觀察態度を作るのにもつと大切で有效なことがある。それは子供の生活の中に觀察する必要を起させてやることである。このわけを次に說明しよう。

最初に私達は、子供に進んで觀察する氣持を持たせるためには、自發性が大切であると云つた。しかしこの自發性がそのまゝ觀察することになるのではない。子供の心が自發性に富んでゐれば觀察する必要が生じた場合に、それに應じて進んで觀察することになるのである。つまり觀察する必要と云ふきつかけを與へてやることが大切なのである。それならば、どう云ふ仕方で、この觀察する必要を起させることが出來るであらうか。

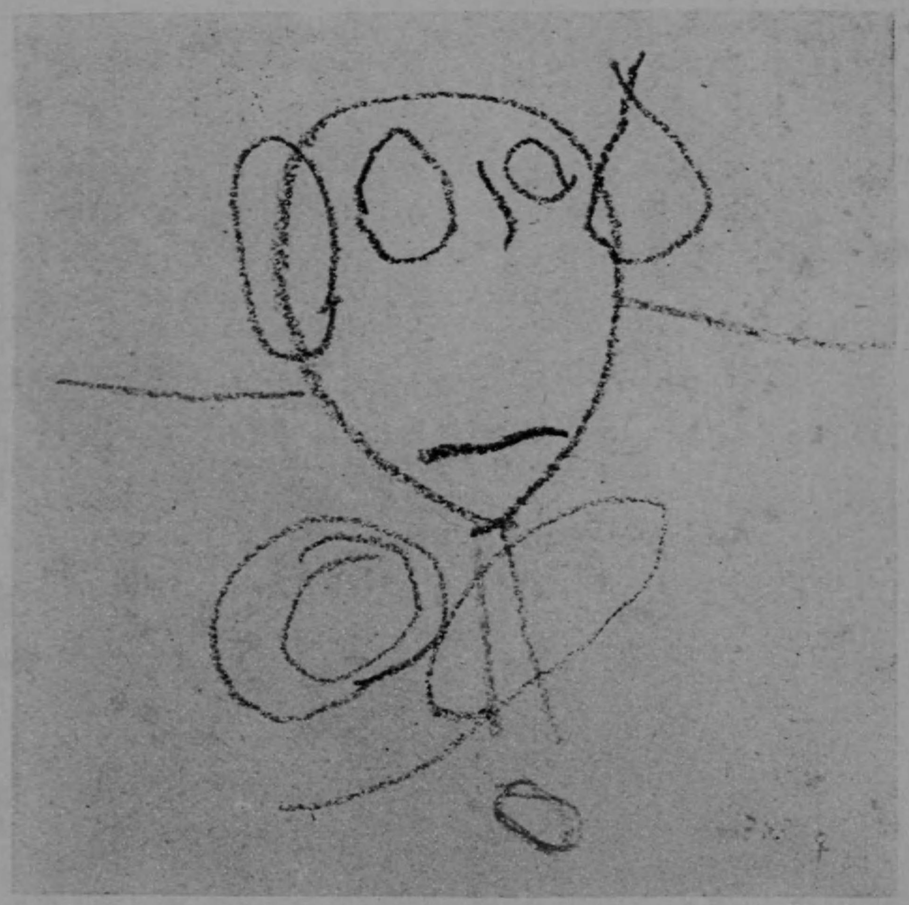
それは幼兒の生活の中に、一つの遊びを、而もその遊びをするには自然(ひとりで)に觀察することを必要とするやうな遊びを、一つの日課の仕事のやうな形で、持たせてやることによつて出來るのであ

る。それではかう云ふ性質の遊びが實際にあるだらうか。こゝで子供の遊びの生活を見てみよう。

觀察を必要とする遊びは何か　遊びの生活を見た場合に、性による相異があるし又年齢、環境等によつても異るが、子供が所謂自立の狀態（一人歩きの出來る狀態――滿一年二、三ヶ月頃）に入るとき、子供は新しい經驗を自ら求めようとし、干渉を極度に嫌ふ時代になる。この時代になるとどの子供も一樣に一度は經驗するのは、何か描かうとすることである。そして鉛筆を持たせれば無茶苦茶な、なぐり書をする。それは點や線の交錯などであり、大人の目からは決して畫とは云へない。（一圖參照）この時代を我々は搔畫（又は錯畫）の時代と云つてゐる。これから徐々に發達して落書をしたり、或ひは往來に蠟石で丸や四角を描く時代に入る。しかしこれは決して自分の內部にあるものを表現しようとするのではなく、只手あそびとしてやつてゐるにすぎない。

次に滿三歲前後から、圖式畫時代と呼ばれる發達段階に達して子供は意味のある畫を描くやうになる。（二圖參照）卽ち「お父ちやん」とか「お風呂」とか命名する畫であり、はじめは錯畫式のものに只名をつけてゐるがその中に、「お父ちやん」と命名した畫であれば、大體人間の顏らしいものを描くやうになる。しかし「お父ちやん」を描いても「お母ちやん」を描いてもいつも同じ人間の

圖一・第



第二圖

畫を描いてゐる。つまり圖式畫と云ふのは「お父ちゃん」を描いても「お母ちゃん」を描いても、いづれもすでに子供が心の中に持つてゐる、人間の圖と云ふ一定の形式を以て描いてゐるのであつて、いはゞ人間の圖式で以て、個々の「お父ちゃん」「お母ちゃん」を代表させてしまふ形なのである。從つてこの時期の子供は見たことを描いてゐるのではないのである。この圖式畫時代が大體滿四歳いつぱいつゞき滿五歳に入るとぼつ〳〵寫實的な記憶畫の段階へ移つて行く。

我々の云ふ記憶畫とは、實際に子供が見たものを記憶によつて描いた畫である。記憶畫と云つても從來なされてゐたやうな、見たことのある畫を眞似して描いたものだとか、家庭や學校で教つた畫を憶えてゐて描くと云ふ意味の記憶畫ではない、子供が實際に見たことや現實に體驗したことを記憶によつて(思ひ出して)描いた畫を云ふのである。實例について見られゝばすぐ理解し得られるから、後に掲げた第四圖以下の畫を見て頂きたい。それによつてお判りのやうに、我々の云ふ記憶畫とは子供の一日の生活の中で、子供に一番印象の深かつた場面のこと、例へば面白かつたこととかつらかつたこととか、特に興味をひいたものとか云ふ樣なことを、記憶によつて描いたものなのである。むづかしく云へば一定のものをそれによつて得られた心像により、それ

に近い表現をしたものなのである。例へば公園へ妹と二人で遊びに行つてブランコに乘つて大變面白かつたとする。翌日それを思ひ出して、自分がブランコに乘つて、そばに妹が待つてゐる畫を描いたとしたら、それが記憶畫なのである。

かう云ふ意味の記憶畫は勿論、圖式畫から急にはつきり區別されて現はれるものではなく、次第に寫實的な部分が增加するのである。

この記憶畫の時期が大體滿七歳いつぱい位續き、滿八歳前後から寫生畫の時期へ入る。このことから幼兒期には寫生は出來ないと云ふことが云へるわけである。我々の記憶畫は見たものを描いたものだと云つてもそれは寫生と云ふ意味ではないことに御注意願ひたい。寫生と云ふのは實物を見乍らすぐその場で描くのである。記憶畫と云ふのは、見たものを思ひ出して描くのである。

描畫と觀察　以上が大體子供の描畫の發達の經路であるが、さてこれが普通の場合は誰でも一度は經驗する遊びなのである。但し例へば五歳の子供だがちつとも畫を描きたがらないと云ふやうな場合はある。これはもと〳〵描畫の欲求があつたのであるが何か家庭の環境に（父母の態度等を含む）それを阻止阻害した原因があつたことによるのであつて、普通には描畫と云ふことは

子供の遊びの中で最も一般的な子供の欲求なのである。

而かもこの畫を描くと云ふことに於ては、今述べたやうな記憶畫の段階（見たものを描く段階）に入るならば、畫を描くためには先づ、そのものをよく注意して見る（觀察する）ことが必要になつて來るのである。つまり記憶畫を日課としてゐると、「明日はこの自動車の畫を描かう」と思ふと自然にその自動車をよく注意して見る必要が起つて來るのである。（ところでこれだけお讀みになつたゞけでは、「さううまく註文通りには行くまい」と云ふ疑問を持たれるかもしれない。勿論註文通りに行かせるためには色々とやり方があるのであるが、それはいづれさきへ行つて記憶畫の實際指導のところで御承知願ふことにしたい。こゝでは、描畫と云ふ遊びは、自然に觀察することを必要とするものだ、と云ふことを頭に入れて置いて頂きたい。）

私達は以上二つの理由、即、描畫は子供が誰でも好むものであると云ふことと、それによつて觀察する必要を起させることが出來ると云ふことの、二つの理由によつて、描畫を幼兒の生活の中心に日課として入れ、それによつて觀察態度を養はうと云ふのである。勿論この外に生活の中心となるものがあり得るが、子供の精神發達の見地から見て繼續的に行ひ得るものとして、描畫

を最も良いものと考へる次第なのである。

ところで描畫による觀察態度の涵養と云ふことは、今述べたやうに記憶畫の段階（大體滿五歳以上）に入つてはじめて出來ることであるが、それ以前に出來ることで、觀察を自然に必要とするものは何かないであらうか。それで考へて見るとよいことがある。それは畫を描くためによく注意して見ることが必要であるやうに、見たことを他人に話して聞かせるためにもよく注意して見なければならぬと云ふ經緯（いきさつ）があることである。從つて子供に、その日にあつたことのあれやこれやを、親に話して聞かせることが、樂しみになるやうに仕向けてやれば、親に話して聞かせたいばかりに、よく注意して見るやうになるのである。そして、子供がどうやら話が出來るやうになるのは個人々々によつて遲速があるが、大體滿三歳頃からであるから、描畫によるよりももつと早くからこのお話（むづかしく云へば言語表現）による觀察態度の涵養と云ふことが實行出來ることになるのである。

さて描畫と云ふこともお話と云ふことも、云ひかへれば自分の心に持つてゐるものを外に現はす、即ち表現すると云ふことに外ならない。そこで以上述べたことをひつくるめて云へば、表現

するためには觀察しなければならない、故に表現力を養ふことは自然に觀察態度を養ふことになると云ふことなのである。從つて表現力涵養の方法は同時に觀察態度涵養の方法なのであるから次の節で一括して述べることにしよう。

九、表現力と生活指導

表現とは何か　こゝで云ふ表現とは、自分の見たことや考へたことを他人に話すことや、文章や畫に描いてそれを他人に傳へることを云ふのである。このやうな意味で自分の心の中に持つてゐることを充分に表現出來ると云ふことは科學的態度として極めて大切なことである。眞の科學者と云ふものは單に研究のみをしてゐればよいのではない。その研究の結果が直ぐに實用化され應用化されなくても、それが廣く世に知られ、それによつて人類を裨益することが必要なのである。そのためにはその研究結果が判り易く表現されなければならない。具體的に云へば科學者は自分の研究業績について他人に話すことが出來、又それを文章や畫に描いて報告することが出來ることを必要とするのである。又一般社會人としてもその生活を科學化し能率を增加して國力

増大に寄與するためには、專門科學者のやうな仕方ではないとしても、ともかく自分の見たことや考へたことを正確に表現出來ることは極めて大切なのである。

右に述べたことが科學教育に於て表現と云ふことを重んじる第一の理由であるが、更に前節に述べたやうに觀察態度を養ふと云ふ點から見ても、表現は大切なのである。つまり他人に話したり畫に描いたりするためには先づ充分注意して見なければならぬと云ふことのために、ある事柄を表現しようとすれば、自然にその事柄をよく觀察することになるのである。こゝに表現を重んじる第二の理由がある。

それならば幼兒の科學教育に於てはどんな表現方法を子供に體得させたらよいであらうか。誰でも判るやうに國民學校入學前は普通には文字は書けないと云はなくてはならない。勿論進んだ子供は假名で短文を綴ることは出來るが、大體に於ては書けないと云へるだらう。從つて幼兒の表現方法としては、言語と畫による表現、つまり他に話すことと畫を描くことが主要な表現方法となるのであり、この二つが幼兒の科學教育に於ける表現力涵養の主なる目標となるのである。そこで先づ言葉による表現の指導から述べよう。

言葉による表現の指導

(イ)第一に大切なことは、親自身が子供に向つて充分にお話をしてやることである。但しここでお話をしてやると云ふのは、おとぎ話をすると云ふ意味ではない。子供の質問に對して充分に說明を與へると云ふ意味でお話をしてやることである。一つの例を擧げよう。例へば知人からおみやげにお菓子を頂いたとする。夕飯後にそれを皆で頂くと云ふ時など、よく子供は「どこから頂いたの？」など、聞くものである。そのやうな場合に、只簡單に「もらつたんだよ」と云つてかたづけずに「誰々さんが旅行なさつてそのおみやげにこれを頂いたのよ、誰々さんのいらつしやつた××と云ふ所はとても栗がとれるんですつて、だからそれで栗羊羹を拵へるのよ」と云ふ風に成るべく言語表現を豐富にしてみせることを云ふのである。ところが一般には、親はそんなことを聞く必要はないと云ふ態度で、くはしい話をせずに子供に接することが多いのであるが、まづこの點から改めてかゝらねばならない。これは質問の取扱ひを云ふこととも關聯するが、敢て子供が質問せずとも、親自らが進んで言語表現を豐富にする、つまりよくお話をしてやると云ふことなのであるから改めて說明したわけである。

(ロ)第二に大切なことは、子供が話をして來たときに、よい聞手になつてやり、いゝかげんな相手にならぬことである。子供の話だからと云つて問題視せず、いゝかげんに聞いてゐてはいけないと云ふことである。

滿三歳位になると言葉も可成充分にしやべれるやうになる。例へば「昨日お姉ちやん、公園のブランコから落ちたのよ」などゝと云つたとする。そしたら大人が友達から戰爭の新しいニースでも聞いたときのやうに、熱心に相手になつてやることが大切なのである。「さう、お姉ちやん泣いた？」「どうして落ちたの？」「あんた大丈夫だつたの？」と色々に話を引き出すやうに仕向けてやる。しかし決してわざとらしい態度を示してはならない。これは質問の取り扱ひのところで述べたこと(57頁參照)と同じことであつて、極めて自然にはこんで行くことが大切である。親にとつては日常茶飯のことになつてしまつてゐて、すこしも興味をひかないやうなことであつても、子供にとつては極めて大切なことがたくさんにあるのだから、つまらないと思ふことでも面白さうに相手になつてやることが大切である。(これは決して子供に對して僞つた態度を示してゐるのではない　教育と云ふものは誠意に基く技巧を必要とするのである。)學校へ行くやうになるとよく母親が、「うちの子供に學校で何をして來たかお話しと云つてもちつとも話しません」と云つてこぼすことを聞くが、幼い頃にこの快よく誠意を以て相手になつてやること（よい聞き手になつてやること）を怠つた報ひであることが多い。

(ハ)第三には子供が毎日の生活の中の色々の出來事を親に話すやうに仕向けてやることである。いはゞその日にあつたことの一つでも二つでよいからそれを親に話させるのである。かう云ふと中には話をさせると云ふことをはきちがへて、子供に向つて詰問的に出る親がある。子供が幼稚園から歸ると、早速自分の前に座らせて「さあ今日あつたことをお話しなさい」と云つた形で行くのであるが、これでは子供は却つてびつくりしてしまつて、話しも出來ないことになるのである。私達が子供にお話をさせると云ふのは、そんな方法ではないのである。むしろ子供の話をそれとなく引き出してやる態度で行くのである。このことは(ロ)のところですこし述べたが、三時頃におやつを貰ひに家へ歸つて來た子供であつたら、親も一緒におやつを頂きながら、樂しさうに何かきつかけをつかんで、だんだんと子供の話を引き出すやうにする。公園で遊んだことを話題にしてもよからう。とにかく詰問的な態度をとるやうなことをしなければ、幼兒はだん〳〵と豐

富にその日のことをお話出來るやうになるのである。「今日なにして遊んだの？」と聞いてもはじめの中は只「ブランコに乘つたの」としか云へないのであるが、それをきつかけにして「公園にブランコいくつあるの？」とかなんとか聞いてやると次第にお話が豐富になるのである。但し親としては決して結果を焦つて求めず、いつかよくなるだらうと云ふ氣持で、わざとらしくない毎日々々を送る心構へが必要である。この心構へがないと子供を「教育」すればするだけ子供を惡くすることさへあるのである。

(二)さて、これが成功して子供がよく話をするやうになると、今度はそれをすつかり聞いてやることが可成うるさいことになり勝ちである。殊に勤め先きから疲れて歸つて來た父親など、矢つぎ早に子供が、「今日はどうしてかうした」とか「よし子ちやんがどうした」とか話しかけて來ると、ついうるさくなつて、そんなつまらないことはどうでもよい、だまりなさいと云ふ氣持になり、時には「うるさいね」と云ふこともあり、或ひはうはの空の返事をし勝ちである。しかし大人にとつていかにつまらぬことも子供にとつては極めて重大な事件であり、それを親に聞いて貰ひたいと云ふ欲求が強いのであるから、これをいゝかげんにあしらはれたり、「うるさい」などゝと云はれると子供は怒る、又それが度重なると段々お話をしないやうになつてしまつて表現力を減退させることになるから、この場合に快よく相手になつてやることが大切である。疲れて歸つた父親が、子供のお話の相手をすることが苦痛であつたら、こんな調子で行くのもよい。「そのお話はお母さんにお話ししたの？」と聞いて見る。まだお話ししてゐないと云ふ答を得たならば、(子供は一日中父に接する機會が少いので、面白かつたことを先づ父に聞いて貰はうとする傾向が強い。)「それぢやあ、そんなに面白いことなら、お母さんと一緒に聞かせて頂戴ね、お夕飯の時に話して頂戴」と云つて夕飯後のくつろいだ時にもつて行くのもよいのである。これをやらずに「うるさいね」とはねつけると、子供は怒るし又こわがることもあり、話をしないやうになりがちであるから注意すべきである。

要するに子供が親に氣輕になんでも話しかけることが出來るやうな習慣を作ることが大切なのである。そのためには子供の話をひき出すと共に、子供がどんなことを話しても頭から叱らない一應聞いてやつて間違つたことはおだやかに敎へ訓すと云ふ態度をとることが大切である。子供にして見れば、こんなことを話せば頭からボンと叱られるのぢやあないかと云ふ不安があつたの

では、こわくて、ついひつこみ思案になり、お話も充分出來ないと云ふことになるのであるから、この點に注意しなければならないのである。

描畫表現の指導（畫の描かせ方）　描畫による觀察態度の涵養と云ふことは、大體滿四歲半から五歲頃に始まる。それ以前は專ら言語による表現を通じて觀察態度を養ふことになる。（但し、かうなつたからとて、前節のお話のさせ方の注意が不必要になると云ふのではない。滿四・五歲以後とてもお話をさせると云ふことは勿論必要であり、そこへ畫を描かせることが加つて來るわけなのである。）これは何故かと云ふと、前に子供の描畫の發達のところで述べたやうに滿四・五歲以前の子供の畫は圖式的であるから、觀察したものを描いてゐるわけではない。それが滿五歲以後になると、觀察したものを表現するやうになる。そこで逆に表現するために觀察させることが可能になつて來るからである。このやうに觀察態度を養ふと云ふ點からのみ云へば、搔畫圖式畫時代に直接に意味はないのであるが、描畫の表現力そのものを伸ばすためには、搔畫圖式畫時代から適當な指導を加へることが必要なのである。つまりその時代から描き慣らさせて置かぬと描畫の力が充分に發達しないことになるし、又この時代から畫を描くことを好きにさせて置かぬといざ

記憶畫を描かせやうとするとき非常に困難になつて來るからである。

搔畫圖式畫時代の指導の要點

(1)搔畫時代には紙と鉛筆を充分に與へることである。充分と云つても鉛筆は一本でよい。紙は廣告紙の裏を使つてもよいし藁半紙を與へてもよい。あまりやぶれ易くない白い紙がよい。そしてこの時期の何か描きたいと云ふ欲求を充分に滿足させてやることが大切である。これをやらせないと、子供はたまに大人の鉛筆を手にした時など、壁に落書をしたりする事になるのである。さう云ふ場合は決して手荒らく叱ることなく、靜かに紙と鉛筆を與へて「これにお描きなさいね」と云ふ調子で行く。

搔畫の時代は云はゞ描畫と云ふはたらきの第一歩であり船出に相當するものだからこゝで出鼻をくぢくやうなことをしないと云ふことが何よりも大切なのである。それ以外は只子供の好きに描くにまかせて置くのがよい。手を持つて何かの形を描かせようとする事などしてはいけない。出鼻をくぢく大きな原因は描くことに對して叱言を云ふことゝ描いたものをけなすことであるから、この二つのことを注意すればよいのである。

(2)掻畫の時期の終り頃には描いてゐるものは依然として掻畫であるが、それを「お母ちやん」とか「赤ちやん」とか命名する時期がある。この時期から圖式時代へかけては、へんなお化けのやうな人間の顔を描いて「お母ちやんだ」などと云ふので、とかく親は「何だいこの畫は、いやな顔だね」と云ふ調子で子供の描いた畫をけなすことが多いが、これは注意しなくてはならない。子供は何もお化けのやうな「お母ちやん」を描いたのでもなく、それしか描けないからさう描いたにすぎないのである。ところである人々は「親の方だつて別に深い意味があつて子供の畫をけなすわけぢやあない。たゞその場かぎりの反省の無い輕い批評にすぎないのだ。そんなことにいち〳〵氣をつけてゐられるか」と云ふ人があるかもしれないが、之は誤りである。こゝに子供が親の言葉をどう感じるかと云ふことを理解する根本的なことがある。子供は、親が輕い氣持で云はうが冗談で云はうが、自分のしたことをけなされてゐると云ふことしか感じないのである。そしてけなされることは嫌ひだから畫を描くことなどいやになつてしまふのである、描畫と云ふことが教育上全然無意味なことならば、子供が畫を描くことを好むか好むまいが、かまつた事ではない。しかし前述の如く大切な意味を持つてゐるのであるから、先づ畫を描きたいと云ふ氣持の出鼻をくぢかぬと云ふことが何よりも大切なのである。

(3)この時期には右に述べたやうに描いた畫のうまい下手をとやかく云つてはいけないと云ふことで（適度にほめてやることはよいが）お判りのやうに、子供に畫を描くことを樂しい愉快なことにして置いてやりさへすればそれでよいのである。畫だけを特に上手にしてやらうとか、早くうまくさせようとか野心を持つことが最もいけない。畫だけにかぎらず、野心を持つととかく態度が命令的になり、かたくるしく「教育的」になりすぎやすい。子供に「電車を描いて見なさい」とか「人を描いて見なさい」と要求して「こゝはかうするんだ」「もつとよく考へて描きなさい」などと小うるさいことを云ふのは最もいけないことである。

しかし同じくあるものを描かせようとする場合にもこんな態度で行けばよい。たとへばこたつにあたり乍ら畫を描いて遊んでゐる最中とする。こんな時に「をぢさんはおなかゞ空いたから、おだんご描いて頂戴」と云ふやうな調子である。この調子に乘つて子供がおだんごらしい丸を描いたら「はいありがたういたゞきます」と云つて、つかんで食べる眞似をするのである。かうすると子供はとてもよろこぶものであり、自然の遊びの雰圍氣の中にそれとなく畫を描く機會を多

くすることが出來るのである。又滿四歲から五歲位の子供の場合は「これはうまいからお父ちやんに頂戴、本の間にはさんで置くからね」と云つた調子で、描いた畫を貰ふと云ふことも子供はうれしいものであり、次には子供の方から「描いてあげよう」と云ふことにもなるのである。これらは知らず〳〵子供の描畫と云ふはたらきを促進してゐることになるのである。

(4)この時期の子供に向つて「さあ畫を描いて遊ばう」などと調子をつけても「描いてよ」と云ふ場合がある。これはそれ迄あまり描く機會がなかつた子供や、前にのべたやうに自分の畫をけなされたゝめに劣等感を持つてゐる子供の場合が多い。かう云ふ時はさしあたりこちらで描いてやることも必要である。「それぢやあよし子ちやんのお顏描いてあげませう」「こゝが頭でせう」と云つて頭を描く。「かみの毛があるね、それからお目々でせう」と云つて、かみの毛と目をかき、それから子供の鼻を一寸さはつて「ほらこん度はお鼻ね」と云つて鼻を描く。こんな調子で行くのは要するに子供に畫を描いてやるときは、さつさと「へのへのもへじ式」の人の顏を描いて與へると云ふやり方でなく、ゆつくりと描く過程を見せてやり、實物との關聯をそれとなく知らせることが大切であると云ふことなのである。

この描いてやることは出來るだけ早くやめて、子供が自發的に描かうとするやうに導くことが大切である。例へば顏のつぎにはおだんごで描いてやる。そして(3)に述べたやうな調子で、いたゞいたり御馳走になつてゐる中に子供の方で「こんどは私描く」と云ひ出すことが多い。この時描いたものは充分にほめてやる。すると調子がついてくるのである。しかし又次の日に「さあ畫を描いて遊ばう」とやると、又「描いてよ」をはじめる。この時もやはり今のやうな調子でいつとはなく子供自身が描くやうにひつぱつて行くのである。これを何回かくりかへしてゐる中に子供ははじめから自分でクレヨンをとり描くやうになるのである。

描いてやる場合のもう一つの注意としては、出來るだけ略畫を敎へないことである。さきに述べた顏の描き方のやうにして描いてやることは一つの方便としてよいが、子供の遊びとして親が進んで略畫を描いてやつてよろこばせると云ふやうなことはしない方がよい。花と云へばチューリップを描き、自動車と云へば流線型を描く子供がゐるがこれは略畫を敎へられて來た結果である。これをしてゐると實物に對する觀察が鋭くならないのである。描いてやることはあくまで方便と心得、出來るだけ子供に自分で描かせることを目的としなければいけないのである。

記憶畫の描かせ方　さて一般にこの時期の子供に畫を描かせると、得意な畫とか描き易い畫とか描き慣れた畫しか描かないものである。例へば後に掲げる第三圖の如き畫であつていはゞ圖式畫の延長である。相當の年齢に達してもこの傾向があり、學童に自由畫を描かせると富士山の得意な子供はいつも富士山に朝日の出た畫を描くし、飛行機の略畫を憶えてゐてそれを描き慣れてゐる子供はいつもきまりきつた飛行機ばかりを描くのである。かう云ふ畫を描くには觀察することも必要でなく、又そこに眞の意味の表現もなく、ぬり畫とさして變りのない程度の低い價値しか有しないのである。

この種の畫から出發して記憶畫を描けるやうに指導することは可成困難であるが、大抵の子供はこの狀態であり、後に例に擧げるやうに此處から出發しても充分成功するのであるから、先づこれを出發點とする指導法を述べよう。

(1)　最初は仲々自ら進んで描かうとしない。ぬり畫のやうなきまりきつた畫や他人の眞似をしてゐるやうな畫ばかり描いてゐたのでは、知らぬ中に創造的な自發的な態度が、一時的にではあるが、阻害されてしまふからである。かう云ふ子供は第一に何を描てよいのか判らないことが多

いから最初はこの點に助力を與へてやるのである。要する畫題をきめてやるのである。それには前に言語表現の指導のところで述べたやうに夕飯後など子供の話を引き出し、又よい聞き手になつてやり、色々とその日にあつたことを話題にするのである。そしてさう云つた話題の中から一つを選んでやり、それを畫に描かせるのである。これは勿論自ら選ばせることが必要であるが、はじめは今云つたやうに自發性を缺いてゐるから、親の方から「そんなに面白かつたの、それを畫に描くとよいね」と云つた調子で、畫題をきめてやるのである。

(2)　さて畫題をきめてそれを描くことになると、最初は主題になるものを一個描くにすぎない。例へば畫間兵隊さんが通つたのを見て面白かつたと云ふのでそれを畫題にしたとする。すると兵隊さんだけしか描かない。それが隊伍を成してゐてもその一部分しか描けない。それも時には首がなかつたり手に長短があつたりして仲々滿足な表現は出來ない。しかし決してこれをけなしてはいけない。これはこの時期としては上乘なのだからである。この點の注意は圖式畫時代の注意と同樣である。子供の出鼻をくぢかぬやうに注意しなければならないのである。

(3)　假りにこの時にいつも描くやうな描き慣れた畫を描いたとしたら、「昨日見た兵隊さんを描

くのよ、どんな洋服着てゐたの？　兵隊さんサーベル持つてゐたの？　鐵砲持つてゐたの？」と助言を與へる。正帽の兵隊さんを描き慣れてゐる子供が實際は戰鬪帽の兵隊なのに正帽を描いてゐたら、「その兵隊さん戰鬪帽ぢやあなかつたの？」と云つてやる。すると「あゝさうだつたね」と云つて直す場合もあるし又「僕忘れちやつた」と云ふ場合もある　後のやうな場合は「それぢやあ今度兵隊さんが來たときはよく見ませうね」と云ふ注意を與へて置く。

描き慣れた畫や大人に敎つた畫をどんなに綿密に描いてもそれは觀察を基礎に置いたものではないから觀察態度を養ふことにはならないのである。たとへどんなに表現がまづくとも、戰鬪帽の兵隊は戰鬪帽をかぶせねばならない。こゝに觀察態度を養ふ根幹があるのである。

(4)　子供の描いた畫をけなさないばかりでなく、むしろ進んで褒めてやつて自信をつけさせることが大切である。自分の畫に自信を持たせることは次の機會に畫を描く原動力になる。畫をいやがる子供は結局この原動力のない子供である。何故に自信がなくなるかと云ふと、大抵兩親やその他の大人が高い鑑賞眼で子供の畫を評價する結果、とかく注文が多すぎてけなすことになりがちだからである。その結果子供が畫について劣等感を持つてしまふので、自信がなくなるのである。(これについては劣等感について述べたところを思ひ出して頂きたい)

さて子供に自信を持たせるには、先づ子供なりの努力を認めてやり褒めてやることである。勿論缺點も多くあるのであるから、その中の一つだけを選び「ずゐぶん上手に出來たけれど、手が變だね、手がびつこね、此處がうまく描けるともつと上手になるのにね、だから今度描くときには手や足がびつこにならないやうにしませうね」と云ふ調子で行く。決してその時に描き直させたりしない。時には子供は子供らしい理窟を持つてゐる場合がある。足がびつこだとして、それを注意すると、「この人、足が痛いんだよ」とか「この人、足をまげてゐたんだよ」とか云ふ。このやうな時は「あゝさうなのよく氣がついたのね」と云ふ程度で輕くうけこたへして置くがよい。

少し描いては描き直させたり、見方が惡いとか、一筆毎に色々と批評を加へると子供は個々の過程に捉はれて描かうとする全體を見失つてしまひ、興味もなくなり果ては自信を失つて描くのがいやになる。いやになつて來たらそれを軌道に戻すことは仲々困難であるからはじめが大切である。とにかく最初は、畫の主題がきまつたら描き上げる迄一切批評を加へない。しかし子供からの相談に對しては或る程度の助言を與へることがのぞましい。

(5) かう云ふ狀態を何日か續けてゐる中に畫としての普通の意味の上手下手には批評の餘地は多分にあつても、とにかく觀察したものが適當に表現されてゐると云ふ狀態になる。例へば第四圖の畫の如きものである。こゝまで來たら指導は第二の段階へ入る。即ち主題に關聯したものを思ひ出させて主題の周りにそれを描くやうに仕向けるのである。主題に關聯したものとは、いはゞ畫のバックとでも云ふものであつて、街を走つてゐるバスならば、はじめはバスだけであるが次にはそのバスの向ふにあるもの、右にあるもの、左にあるもの、前にあるもの、と云ふ風に、その主題の周圍にあつて畫面を滿すべきものを思ひ出させるのである。「バスの右(左)には何があつたの?」「バスはどこを走つてゐたの?」「バスの向ふには何があつたの?」「そばに何かなかつた?」と云ふ種類の助言的な質問をして、思ひ起させるのである。(この場合に直接に畫面を指さして「こゝに何かなかつたの?」と云ふやうなやり方をしてはいけない。)この質問に對して子供が忘れちやつた」と云つたらやはり前と同じやうに「それぢやあこん度はよく見て來ませうね」と云ふ注意を與へるだけに止め、決して「もつとよく見なければいけませんよ」などと云ふ叱言に類する注意をしてはいけない。

色については未だやかましく云ふ必要はない。子供のするがまゝにさせて置く。

(6) イ、さて見たものを忠實に表現することが出來るやうになつてもはじめの中は、主題となるものは最も詳しく描いても外のものはぞんざいに簡單にしか描けないものである。この時期がある程度續くと、觀察が畫面全體に正確になつて來て、主題となるものも、それに關聯したものも同一の精密さ、正確さを持つて來るやうになる。(第十一圖參照)畫を描く順序から云ふと主題を詳しく描く時期は主題から描きはじめるが、その時期をすぎると何處からでも描きはじめる。片隅の方から完成した畫が次々と繰りひろげられることも時には見られる。これは繪畫としての畫の指導から云ふと問題になるかもしれないが、我々は繪畫を上手にすることを目的としてゐるのではなく、觀察態度を作ることゝその觀察したのゝ正確な表現を主たる目的としてゐるのである。そしてこゝに、幼兒期に於ける描畫と云ふことの新しい價値を認めてゐるものなのである。又繪畫としての指導は寫生畫の時期にあるのではないだらうか。

ロ、さて主題とそれに關聯したものとが同じ精密さ正確さで描かれるやうになつた時に——このやうな場合を我々は畫面が豐富になつたと云ふ——子供が使用するクレヨンの色と觀察したも

の丶色とを出來るだけ一致するやうに注意してやる。例へば「その兵隊さんの自動車どんな色だつたの？」「兵隊さんの乘つてゐるのは黑ではないでせう？」等と聞いてやると子供は思ひ出してカーキ色に近い色を使ふ樣になる。しかしこれは描いてしまつた後に注意するのであつて、描いたものは一應褒めてやり、前に述べたやうに、缺點を一つだけ擧げて「こゝを直すともつとよくなるね」と云ふ形で注意するのである。この時子供が「忘れた」とか「思ひ出せない」と答へたら「それぢやあこの次はもつとよく見ませうね」と云ふ形で行くことは前に述べたと同じである。

ハ、この時期になつたら色の塗り方についても注意を與へてもよい。ぞんざいに塗り、亂暴な描き方をする子供でもはじめは一切それを注意しないで、ひたすらに描くことを好きにさせたのしくさせるのがよい。しかしこの時期になつたら徐々に「もつと丁寧に描くともつとよくなるね」と云ふ形で注意を與へるのもよい。しかし描き方の丁寧であるとか亂暴であるとか、筆致に勢があるかないか等と云ふことは、ある程度以上はその子供の氣質性格に基づくのであるから强ひてそれを改めさせることは無意味である。

二、又この時期には描いた畫の中のまちがひを子供自身に見つけさせると云ふことをそろそろはじめてもよい。（再三申してゐるやうに、これ以前はあまりこまかい注意は避けなければならないが、この時期になると子供に畫についての自信が可成出來てゐるから段々と色々な注意を素直に受け入れることが出來るのである。）例へば左手に箸を持つた畫を描くことがある。このやうな場合は「きよ子ちやんどつちの手で箸を持つの？」と聞いてやる。子供が「こつち」と云つて右手を出したら「ぢやあこの畫はちよつと變ね」と云つてやる。すると子供は「あつさう〳〵」と氣がつくわけである。

又特にまちがひと云ふわけではないが、子供は時に、特に長い首を描いたり、特に大きなボタンを描いたりすることがある。これは何故かと云ふと、子供はある一定のものに氣がつくとそれを特に珍らしく感じて大きく描くのである。例へば子供の人物畫を發達的に見ると、はじめ（滿三歲頃）は顏の部分にすぐ手足がついてゐて胴とか首と云ふものは氣がついてゐない。それが段々に胴に氣がつき手足のつけ根の位置に氣がつき、首に氣がつくと云ふことになるのである。そしてはじめて首に氣がついた時期であると特に首を長く描くと云ふことになるのである。しかしこれは一時的のもので間もなく首が珍らしいものでなくなると、他のものとつり合ひのとれた大き

さになるのである。從つてこれは誤りではないのであるからそのまゝにそつとして置けばよい。

ゐイ、記憶畫に關する實際に當つての描かせ方は大體以上のやうなものであるが、前に述べたやうに描畫を生活の中心にするためには、この記憶畫を描くことを日課とすることが必要である。

記憶畫に入り立ての頃は仲々描けず又興味がそれ程湧いて來ないので、今日一枚かくと二三日お休みすると云ふことになりがちであるが、あまりやかましく云はずほめてやつて專ら興味を持たせるやうに仕向ける。しかし調子がついて來たら、毎日大體きまつた時に、一定の仕事のやうな形式をとつて描かせると云ふやうにした方がよい。それには朝食後か、おやつのあとがよいであらう。前の方で畫題を選ぶことを述べたところでは、夕飯の樂しい談笑の間に畫題を選びその場ですぐに畫を描くと云ふ風に說明して置いたが、はじめはどんな機會でもよいから、子供が描かうと云ふ氣になつたときを捉へる必要があるので、敢て描く時を一定すると云ふことを云はなかつたのである。日課とするにあたつてはこんな風に云ふのもよいであらう。「ゆき子ちやんもずゐぶん畫がうまくなつたから、これから毎日一枚づつ描くことにしようよ、お父さんは日記をつけてゐるだらう、だからゆき子ちやんも毎日、畫の日記を描くといゝね、とてもおりこうさんになるよ」と話してやつてもよいであらう。そして例へば朝食後ときめたら、朝食がすんだら「さあ畫を描かう」とか「さあ畫日記を描きませう」とか調子をつけて、子供が自ら一定の仕事をするやうな氣持にさせるのである。

ロ、ところで毎日の日課となると畫題に苦しんで來ることがある。これは要するに夕飯後の畫題を選ぶお話がだらけて來た時のことである。從つて畫題がなくて描けずにゐることをやかましく云はずに、夕食後のお話を充分にたのしくしてやり、畫題を引き出してつかませるやうに努力することが大切である。例へば兵隊のことが子供の興味をひいたとすれば親自らもその話が非常に面白いやうに、「今日の兵隊さん何處で見たの?」と話題を投げかけ徐々に深く細く話を發表させて見る。「兵隊さんたくさん居たの? サーベル持つた兵隊さんも居たんでせう?」等。「兵隊さん鐵砲どんなに持つてゐたの?」と聞くと、時には「一人で二つ持つてゐた兵隊さんも居たよ、それでそばの人、何んにも持つてゐなかつたの、づるいね」と子供らしい解釋が出る場合もある「それぢやあそれを描いたらいいでせう」かうして話を進めながら「正子ちやん兵隊さん描くときどこに描くの? 眞ん中に描くの?」「兵隊さん何人描くの?」等と次第にそれが一つの畫面に收

まるやうに一定の指示を與へるやうにすると、子供は大體畫にするものを把めてくるのである。

最後に「それぢやあ明日の畫はとてもうまく出來るでせうね」と期待を示してやるのもよい。又「明日出來たらお父さんが出かける前に見せて頂戴ね」と云つて子供に張り合ひを持たせることもよい。かうすると描くのに不必要な長い時間のかゝる子供も早く描くやうになる。つまり自分の畫を親に見せることが親をよろこばせることであるやうにしてやることが大切なのである。これは前の方で述べたことであるが、親が日常子供の話のよい聞き手になつてやると子供が進んで話をするやうになることゝ同じ理窟である。

又畫題がなくて困るときには出來るだけ日常平凡な生活の中から選ぶやうに仕向けて行くことも大切である。これは日常生活で見られるものであまり特別に注意をひかないものにも深く注意するやうに慣れさせるためである。例へば動物園へ行つた場合などは新鮮な興味を湧き出させるから別に表現と云ふ目的がなくても可成よく見てゐる。しかし日常生活の平凡な事柄はそのまゝでは仲々注意をひかないから、それを畫題にすることによつて知らず〳〵注意するやうにさせることが出來るのである。そこで母親が近所へおつかひに行くときに一緒につれて行き、その時見たものや經驗したことを畫題とするのもよい。その場合に、子供は思ひ出せないことが出てくるから、前にのべた指導のやうに「今度よく見て來ませう」と云ふ形で行くと、自然にさう云ふものへも注意を拂ふやうになるのである。こゝから觀察態度が生活全體に及ぼされて行くことになるのである。

八、それから畫題に苦しまなくても、子供は同一場面を二度も三度もつゞけて描くことがある。しかしこれは決してやかましく云つてはならない　子供にとつてはその場面の中で、描かうとするものが少しでもちがつてゐれば、全くちがつたことゝして感じられるのである。公園のブランコでもそこに居た人、そこであつたことが少し異れば、大人には同じブランコの畫であつても子供にはちがつた畫なのである。これをよく理解して、「この間描いたぢやあないか」とか「同じものを描くのぢやあない」等と云つてはならない。これをやると子供が描くことを嫌ふやうになる

二、日課とした以上は、病氣の時以外は決して休まないと約束させる。一枚でも缺けることは惜しいことだと云ふことを何かの例で說明してやるのもよい。例へば「幼稚園」とか「幼兒の友」と云つたやうな雜誌を毎月買つてゐて何かの都合で一冊缺けたとする。一體にこの位の年齢の子供

は、蒐集癖とでも云つたやうな傾向があるから、一つでも缺けると惜しいと云ふ氣持がある。こゝをつかんで、一つでも缺けるとあとでは仲々手に入らないことをよく云つて聞かせ、「あなたの畫もなまけて一枚でも缺けると、あとであの時描けばよかつたと思つても、もうその時のことは忘れてしまふでせう、いくらあとでほしがつてもどうにもならないのよ。だから決して休んではいけないの、さうでせう。」と云つた調子で話してやるのである。

ホ、さて日課となつてからは勿論であるが、さうでなくても、描いたものがたまつて來たら、それを親も一緒になつて大切にとつて置くと云ふことが大切である。今迄はとかく「子供の畫なぞ」と云ふ氣持で、描いたものも二三日すれば屑籠へ放り込むと云ふやり方であるが、これでは子供に張り合ひが出ないのである。つまり子供は自分のしたことがちつとも大切にされないと云ふことを非常に不滿に感じるのである。それ故に子供に畫用紙が入る大きさの紙の箱でも與へ親も一緒になつてそれを大切にとつて置くと云ふやり方が大切なのである。さうすると子供は自分も一人前の仕事をしてゐるやうな感を抱き、自負心をつけるのに大きな效果があるのであり、同時にそこから畫を描かうとするはげみもつくことになるのである。幾枚かたまつた時は親も一緒になつて何枚たまつたねと數へて見て、よろこびを體驗させることなどもよい。

(8) 大人の仕事やスポーツなどでもさうであるが、子供の描畫にもやはり調子の波がある。はじめは調子がよくつてある一定のところ迄うまくなると今度は調子が惡くなつて今迄よく出來たのがどうもうまく出來ないと云ふ場合に、俗にスランプに落ちると云ふが、子供にもこれがあるさうなると子供は思ふやうに描けないのでぐづ〳〵云ふやうになり、描畫がいやになることがある。かうしたときには、新しいクレヨンでも買つて來てやつて元氣をつけたりするのがよい。このことを少し說明しよう。

どうもこの頃調子が落ちて描きたがらない樣子であつたら、勤め先とか何處かの歸りにでもおみやげにクレヨンを買つて來るのである。そして何げない調子で「昭夫ちやんはとても畫がうまくなつたからおみやげを買つて來たよ」と云ふ風にして與へるのである。(これを「どうもお前は近頃描けないからこれで描いてみなさい」など〻云つたら臺無しになる。)かうしておみやげを與へた翌日、畫を描く時になつたら「今日は昨日買つてあげたクレヨンで描いてごらん、きつとよく描けるよ」と調子をつけてやる。(母親は一般にしまりやで新しいものをしまつて置きたがるが

そしてこれも亦大切なことではあるが、この場合は父に調子を合せることが必要である。)子供は「新しいのを使つてもいゝの?」と聞くかもしれない。「いゝともおみやげにお前にあげたのだもの、好きなやうに使つていゝのよ」と元氣をつける。するとスランプに落ちて畫にいさゝかいや氣がさしてゐる子供もその新しいクレヨンが使ひたいあまりに描いて見たくなるのである。

ところでこのやり方は、すでに持つてゐるところへ又一つ餘計に買つてやる形であるから、かう云ふやり方で行くと、子供に物を粗末にする習慣をつけやしないかと御心配になる方もあるかもしれないと思ふので、その點について少し書き加へて置く。

子供に物を粗末にしない習慣を與へるのに最も大切なことはその家庭全體が堅實な質素な生活を營むことである。堅實な質素な生活とは決して食べるものを減らして榮養不良になりながら節約したり、子供の勉强に必要な本を買ふこともしないで勉强しろ勉强しろと云ふことではない。やぶれた靴下は丹念につくろつて何度も使用するとか、鼻をかむちり紙を一度に三枚も四枚も重ねて使ふやうなことをしないとか、又榮養がすぐれてゐると判つたら鯛よりも鰯をたくさんたべるとか、することを云ふのである。要するに虚榮を出來るだけ捨てゝ、實質的によいものを出來

るだけ經濟的に調達し、そして教育費衞生費と云つた方面にはその收入に應じて金を惜しまないと云ふことである。家の父母が先づかう云ふ考へ方で家庭生活を營んでゐると次第にその家風は堅實質素なものとなる。(勿論一方につましい生活の中に風流を解すると云ふやうな心のゆとりのあることが大切である。)この家風を背景にしたその上で、うまく機會をつかんで物を粗末にしてはいけないと云ふことを話してやれば、子供もやはり物を無駄づかひしてはいけない、粗末にしては勿體ないと云ふ氣持を持つに至るのである。

ところで今述べたクレヨンの問題はいはゞ教育費とでも云ふべきものであり、この點から先づ認めてもよいものである。しかし强いて無駄であると云へば、たしかに餘計に與へるもので無駄とも云へるが、凡そ何か目的を達するには必要な無駄と云ふものもあるのが當然なのである。その無駄とも云へるものが、前に述べたやうな效果を擧げる事によつて無駄でなくなるのである。一方子供の氣持に與へる影響の方面から云ふと、このやうにして與へられたものは、子供自身に自分のものに對する所有感がはつきりして、ある種の責任感に近いものを持つやうになるのである。決して物を粗末にしても構はないのだと云ふやうにならない。(若しそれがあるとしたら、そ

の子供の父母の毎日の生活そのものが、物を粗末にするだらしのない生活であるにちがひないのである。それがしつかりしてゐるなら、たまに餘計にクレヨンを與へやうが大したことはないのである。)事實筆者の友人の子供は度々のスランプの度に與へられたクレヨン、色鉛筆、パステルなどを、二三度使つた後は自ら「もつたいない」と云つてちやんと自分の整理箱にしまつて古いみちかくなつたりクレヨンを相變らず使つてゐる。この傾向は家庭が質素堅實であるかぎり、どこでも見られることである。

(9) 最後に畫の道具について少し述べよう。クレヨンは圖式畫時代から與へてよいが始めは六色位(赤黃綠青茶黑)のものがよい。そして記憶畫の初期もこのまゝでよいが、主題とそのまわりのものが出てくる時期には十二色位のものを與へるがよい。

紙は記憶畫時代は八ッ切以上の大きさを要する。普通に國民學校で圖畫に使ふ紙でよい。クレヨンと云ふものは大體こまかい畫がかけないから、紙は大きなものの方がよいのであるが、同時に畫面を廣くすることによつて觀察態度を廣くするためでもある。紙の質は普通のクレヨンペーパーとか畫學紙とか云ふのでよい。日課としてはじめたら、それにふさわしく形のそろつたクレヨンペーパー程度の紙を與へる方がよい。あまりつまらぬ紙を與へてゐると子供にはげみがつかない。學童がきちんとそろつた御帳面を頂くときの誇らしいよろこびを思ひ起すとこの理屈がよく判る。凡そ何事でも子供だからと云つて、いゝかげんなものを與へたり、まがひものを與へたり、他人のお古ばかりを與へて置くことはよろしくない。性質迄が知らぬ中にまがひものになる傾向がある。と云つたからとて決して高價のものを與へよと云ふのではないことは前述の堅實質素の家風を說明したことを思ひ起して下されればお判りのことと思ふ。經濟の許すかぎり子供にもきちんとしたほんものを與へてやりたいものである　話が横道にそれたが大切なことだからつけ加へたわけである。

さて以上のやうに記憶畫の指導を行つて行くと、最初に述べたやうに畫を描く力が養はれると同時に、觀察態度が出來てくるのである。つまり子供は畫を描くために事物をよく注意して見るやうになる。そこからまづ畫を描くための觀察態度が出來、それが次第に鋭く深くなつて來る。次に、はじめに畫を描くためのものであつた觀察態度が次第にどんな場合にでも移されて、いつも物事をよく注意して見ると云ふ態度に變つて來るのである。こゝまで來てはじめて本當の意味

で觀察態度が出來たと云へるのであり、この狀態に達することが、記憶畫を描かせる最後の目標なのである。

十、科學教育の實際指導

——描畫による幼兒の科學教育——

以上記憶畫指導のあらましを述べたわけであるが、次にこの方法によつて實際に指導した例を擧げて讀者諸氏の御參考に供しようと思ふ。

こゝに例示する柴田晴夫君(假名)は昭和十六年の十月に當相談所へ來られたのであるが、母親がよく我々のやり方を理解して家庭に於ける指導を行つたので、例示するやうな效果を擧げたものである。その時々の母親の手記を引用し乍ら說明を加へ、私達が今迄述べて來た描畫を中心とする生活指導を一層よく理解して頂かうと思ふ。

柴田晴夫君は來所當時滿六歲四ヶ月であり、家庭には父母の外に國民學校三年の姉と滿三歲の妹とが居る。本人は智能の點では優秀兒であるから、一般的な例としては適當でないとも云へるのであるが、母の手記と云ふ點から他に適當なものがないので、晴夫君の場合を發達的に例示することにした。それに描かせ方を理解するには可成役立つと思ふからである。

十月十五日に母親が晴夫君を連れて相談所へやつて來た。相談事項はどうも晴夫君が亂暴で怒り易くて困る。又落ち着きがない。別に異常とは思はないが、かう云ふ子供はどう躾けたらよろしいでせうかと云ふことであつた。そこで色々しらべて見ると觀察表現等と云ふ點で未だ〳〵力が充分に發揮出來てゐない點が見えるし、又すべての生活が體驗的になつてゐない。要するに我々がこの本で述べてゐるやうな點で色々と缺陷があるので、そこを正して行けば、この子はよくなるにちがないと云ふわけで、我々の生活指導の話をしたのである。これに從つて母親が指導をはじめたのであるが、以下畫について說明する形で述べて行かう。

第三圖ABCD

十月十五日に來所され、この生活指導の話を聞いて早速實行しはじめたが、晴夫君が最初に描いた畫は、このやうな得意な畫や描き易い畫にすぎなかつた。ABは十月十七日でありCDは十一月三日の作であるから仲々この習慣から拔け出られないことを示してゐる。これは後の手記に

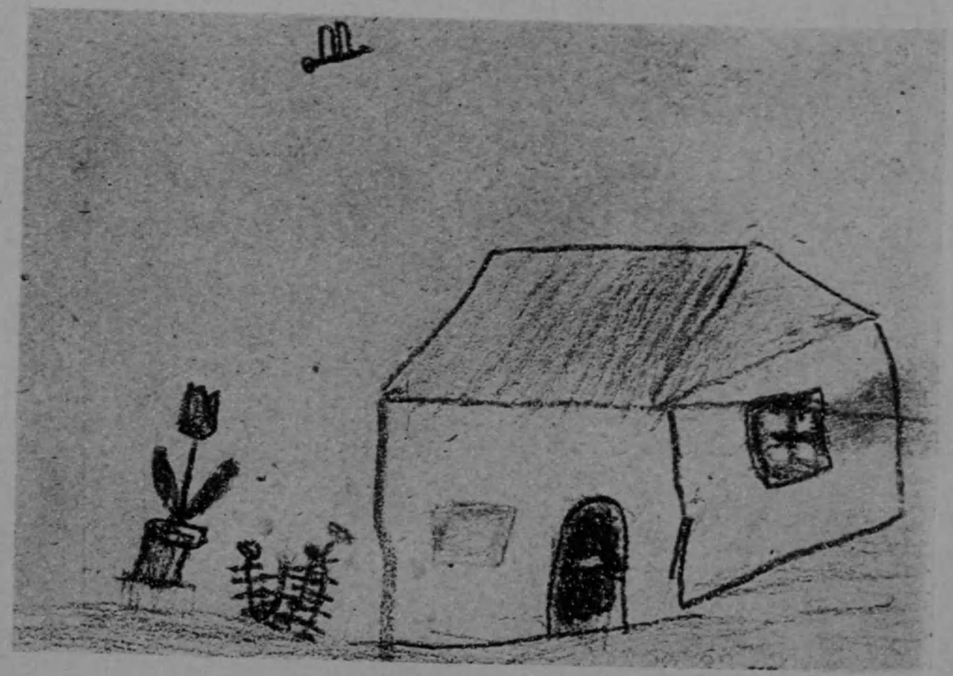
あるやうに母親の指導が不充分であつたことにもよるが、同時に晴天君が以前にかう云ふ畫しか描かぬやうに指導されてゐた結果である。恐らく幼稚園の畫の描かせ方もその一つの原因であらう。この點で幼稚園のやり方も大いに改善の餘地あることを述べたいのであるが、こゝではこれ以上觸れることを止めよう。

とにかくこの傾向は約一ヶ月間續いてゐる。この間の母のやり方、苦心などをありのまゝの手記によつて見よう。

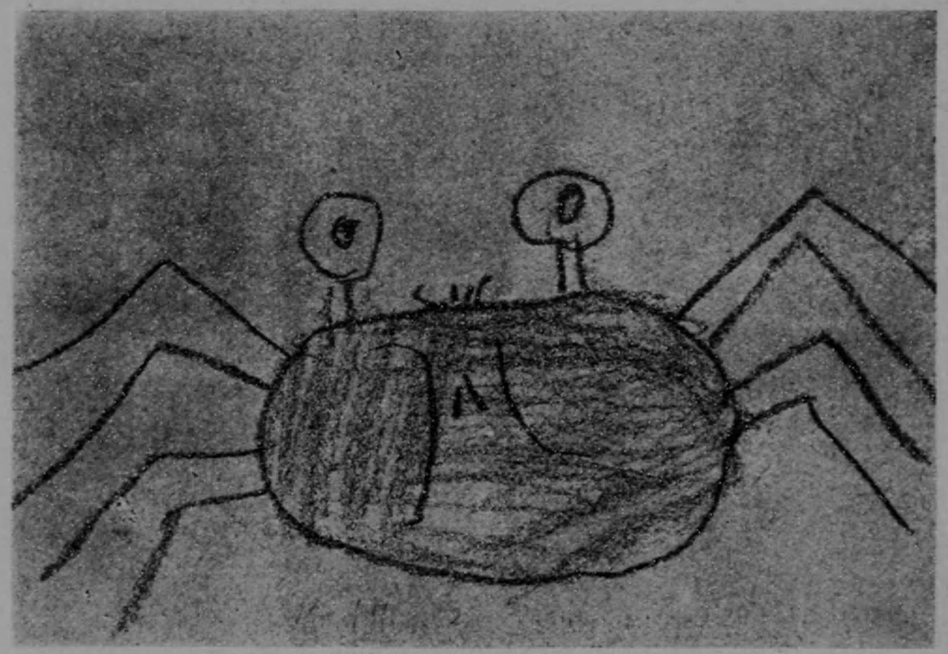
母の手記――『相談所でうかゞつた生活指導を實行に移すとなると先づ第一に學生時代の宿題をする樣な樂しみを感じたが同時に果してこれが實行出來るか否かと考へると重荷とも感じられるのであつた。

毎日一枚の記憶畫(81頁で說明した意味のもの)を必ず描くと云ふこと。これは大變なことになつたと緊張した私は畫について色々と細い注意を頂きながら、結局頭に殘つたのは、毎日一枚づゝ描くと云ふ良い習慣をつけてゐれば必ず段々に畫が上手になるにちがひないと云ふことであつた。(註――この時は未だ充分に我々の云ふことを理解してゐなかつたことは後の手記に見

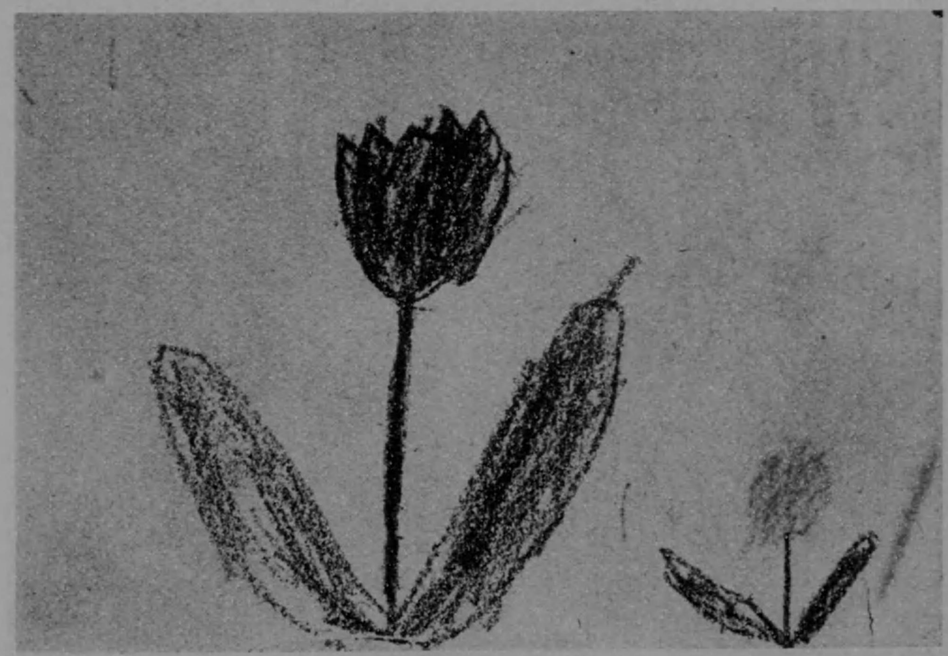
第三圖 (A)



第三圖 (B)



第三圖　(C)



第三圖　(D)

られる通りである。)

私はその日、子供に向つて「今日は大變面白いことを敎へて頂いたのよ、私も知らなかつたので今迄やらなかつたけれど、それは毎日何か見たことを翌日の朝一枚だけ畫に描くのよ、それを大事にして置いて先生にお目にかけませう、どんな畫が描けるかしら、あなたは畫が好きだから毎日描いてゐたらどんなに面白い畫が描けるやうになるか樂しみだわ」と話してゐる中に、明日から描くと云ふ約束をした。この話で子供の興味をひいたことは先生に自分の畫を見て頂くと云ふことであつた。何故かと云ふと、今迄は描いたものに對しては私丈がよく描けたとか面白いと云ふばかりで而もそのまゝ屑籠に捨てゝ了ふ事が多かつたからである。

始めは朝幼稚園へ行く前に描くと云ふことであつたが、寢坊するのでとうとう幼稚園から歸つてからになり、又時には夜になることもあつた。朝描けた時は一日中ゆつくり遊べるから朝描くと一番良いと褒めてやるが、なか〳〵むづかしい。そこで幼稚園から歸つておやつの前に畫が描けたらおやつにしませうと云つて描かせたり、御飯迄に描くことにしたりした。度々のことなので特別食事に變化を考へ、子供にはどんな食事かを樂しみながら描かせることにした。

又描いてから折り紙をして一緒に面白く遊ぶことにしたり、色々工夫した。かうしてゐる中に私は子供に描かうとする氣持を起させるには親の心に餘裕がなければならないと云ふことに氣が付き、子供だけが描くのでなく、自分も描く心持が必要なのだと思つた。

はじめの中は何でも一枚描き上げれば今日も一枚出來てよかつたと子供と共に喜び合つた。しかし段々同じ樣なものを描き續けて行く中に、又同じやうなことを云つて畫の用意をされるのに慣れて來ると、「毎日描くの？」と云つて口をとがらせることもあつた。そんな時は失望させられるし又怒りたくなるが、先生から怒ることと叱ることは違ふ、大概の母親は怒つてゐる、と敎へて頂いた時の耳の痛さを思ひ出して氣分の轉換を考へ怒らないやうに用心した。散々に遊んで歸つて來た時、今畫用紙を出して良いか否かを考へつゝ出して、機嫌良く描くと嬉しかつた。遊びすゞして描く機會を無くし、夜になつても描きたがらない時、怒らずにどうしても描ける迄待つ思ひで接すれば、その中に描きはじめ、却つて丁寧な描き方をする樣な事もあつた。

子供が描くのをいやがる時は「一枚づゝ描くと決めた事は、一日でも止めれば約束にならない、偉い人は少さい時からしようと決めたことは、今日はやりたくないから止めようと云つて休んだ事は一度もない。雪でも降つてゐる間は積つて奇麗だけれど、止むとすぐに溶けるでせう」と云つて話した。

出來上りの畫については何を描いても、出來てよかつた、今日は少し亂暴だけれど明日はもつとよく描きませうと云つた。畫を描き始める始めの氣分さへ出來れば、畫そのものは何でもよいと考へてゐた。そのために子供は今迄に描き慣れた得意な畫、描き易い畫ばかりを描いた。最も多いのは乘物で、毎日でも飛行機を描きたがる。日課の畫が出來てしまつても又畫用紙を出して飛行機を描いたりする。成る可くちがつたものをと思つて今日は花にしたら家にしたらと、他のものに變へさせ樣とした。そして少しでも變つたものを描いた時は嬉しく思つた。又興味を持つて描いてゐる時等、先生の云はれた、子供は一番印象に殘つたものだけを描くから周りのものを引き出すやうにする事と云ふのを思ひ出し、大きな花一つでは淋しいから傍にもう一つ少さいものを書くともつとよくなると云つたり、家を描いた時は、家の傍に花が咲いてゐると奇麗だと云ふと喜んで花を描いた。又軍艦には海、空、飛行機等を描くやうに云つ

た。』

かうして晴夫君は、段々と複雑な畫を描くやうになつて來たが、所謂描き易い畫の域は未だ一歩も出てゐないといふ狀態であつた。云ひかへれば、私達の求めてゐるやうな記憶畫にはなつてゐないのである。これは何故かと云ふと、晴夫君の場合は母親の指導が充分でなかつたことによることが最も大であると思ふ。次に引用する手記で母親自らがのべてゐるやうに、母親はその當時は未だ、我々の云ふ記憶畫の意味を本當に理解してゐなかつたのである。このことは、今引用した手記の中で「大きな花一つでは淋しいから傍にもう一つ少さいのを書くともつとよくなる」と云つたり、「家の傍に花が咲いてゐると奇麗だ」と云つたりして、只畫面を寄木細工式に賑はすことを目的としてゐるところによく見てとれることである。「そのそばに何かなかつたの？」と聞き子供がおぼえてゐたら描かせ、忘れてゐたらそのまゝにして置くと云ふのが記憶畫の眞の意味を理解した指導法なのである。(102頁參照)

さてこのやうな畫が大分たまつたので、母親はそれを持つて十一月十二日に再び相談所を訪れた。そこで再び我々の指導法について說明を聞き、記憶畫の本當の意味を理解したわけである。

母の手記を續けよう。

『再び先生のお話をうかゞつてゐる中に、私が實行した事は、畫を描く日課を作つたと云ふだけで、記憶畫を描くと云ふ大切な事を忘れてゐた事に氣が付いた。それは先生が「これ等の畫は皆得意な畫、描き易い畫であつて記憶畫ではありません」と云つて特に家の畫(B參照)を示され、「本當に見たものを描くなら、今この花は咲いてゐないから、此處に出て來ないはずです。記憶畫としては家だけの方が餘程價値があります」と云はれた時初めてはつきりと判つたことである。ましてその家の畫こそ、子供の畫と云ふよりも、私の考へたことを描かせたやうなものであつたゞけに、反省せざるを得なかつたのである。判つてゐたつもりで過した一ヶ月の收穫の結果を考へると失望したが、又失敗したことによつて先生の御主旨の幾分なりとも體得出來た樣に思へて嬉しかつた。最初に敎へて頂いた指導法を實行するには自分から再敎育されなければならない事に氣がついた譯である。

これから暫くの間、次の目的として、見たものを描くやうな環境を作ると云ふことに一生懸命になつた。第一に見る樣に仕向けなければならないと思つた。(それには親の生活と子供の生

活が物質的に結ばれてゐても、精神的にもつと聯絡してゐなければならないと思つた。)見たものを描くことは、云ふことは易いが、本當に若し自分がやつて見るとしたら、子供よりむづかしいに違ひない。自分は畫には描けないけれど、一緒に見、一緒に描いて行く氣持にならうと思つて翌日から何を見ても畫にはどう描かうかと共々相談し合つた。それから幼稚園の往復にも畫題を見付けて來るやうにと送り出し、又必ず朝描くことを實行するやうにして、段々朝寢坊を治さうとした。』

第四圖、果物屋(十一月十三日、所要時間三十分)

これは晴夫君の描いた、最初の記憶畫である。勿論この前にも見たものを描くと云ふ傾向が現はれなかつたわではないが、それがはつきりと畫面全體に現はれて來たのはこの畫が最初である。これは母親が相談所へ再來して、記憶畫の眞の意味をあらためてはつきり理解した結果、適切な指導が行はれたゝめであることは次に引用する手記によつて明かである。

『朝六時半頃から床の中で目を醒ましながら仲々起きず。とう〳〵七時半頃に食卓についた。いつもなら食事をすませるとすぐに父と一緒に幼稚園に行くので今朝も、もしそんなことがあつてはならぬと思ひ、今朝はどうしても畫を描いてから行きませう、送つて行つてあげるからと云つた。そして昨夜から昨日見たものは何と何かと話し合つてゐた中で、〇〇のバス停留所前の果物屋に蜜柑がたくさんあつたのを描いて見ると云ひ出した。

始め何處から描いたらよいかと迷つてゐたので「果物屋の家を描いたら」と云つた。始め三角の屋根無しの家を描き次に蜜柑の臺とざるを、それから右の方に「柿があつたね」と云ひながら柿の臺を描いて色を塗つた。次に「蜜柑は何色で描いたらよいかしら」と云ふので「あなたはどの色とどの色を使ふつもり」と云ふと、橙々の濃淡と綠、黃を出し、又少し赤色を滯びた朱色も出したので、昨日求めた蜜柑を七つ出して「こんな色してゐるのよ」と竝べて見せた。子供は一つづつよく見て、蜜柑にクレヨンをつけて見て、赤色は「これは柿の色だ」と云つて箱の中に入れ、それから一つづゝこれは美味しさうだ、これは少しまづい、と云ひながら愉快さうに畫き「百匁十六錢だつたね、札を描いたけれど、六錢は蜜柑にかくれてゐるのよ、百匁のメの字が書けないから、百十六錢によめるといけないから百の下に筋を引くのよ」と云つた。又蜜柑がもうじき天井につきさうになるから今度は柿を描くと云つて柿を描いた。「小母さんが店に

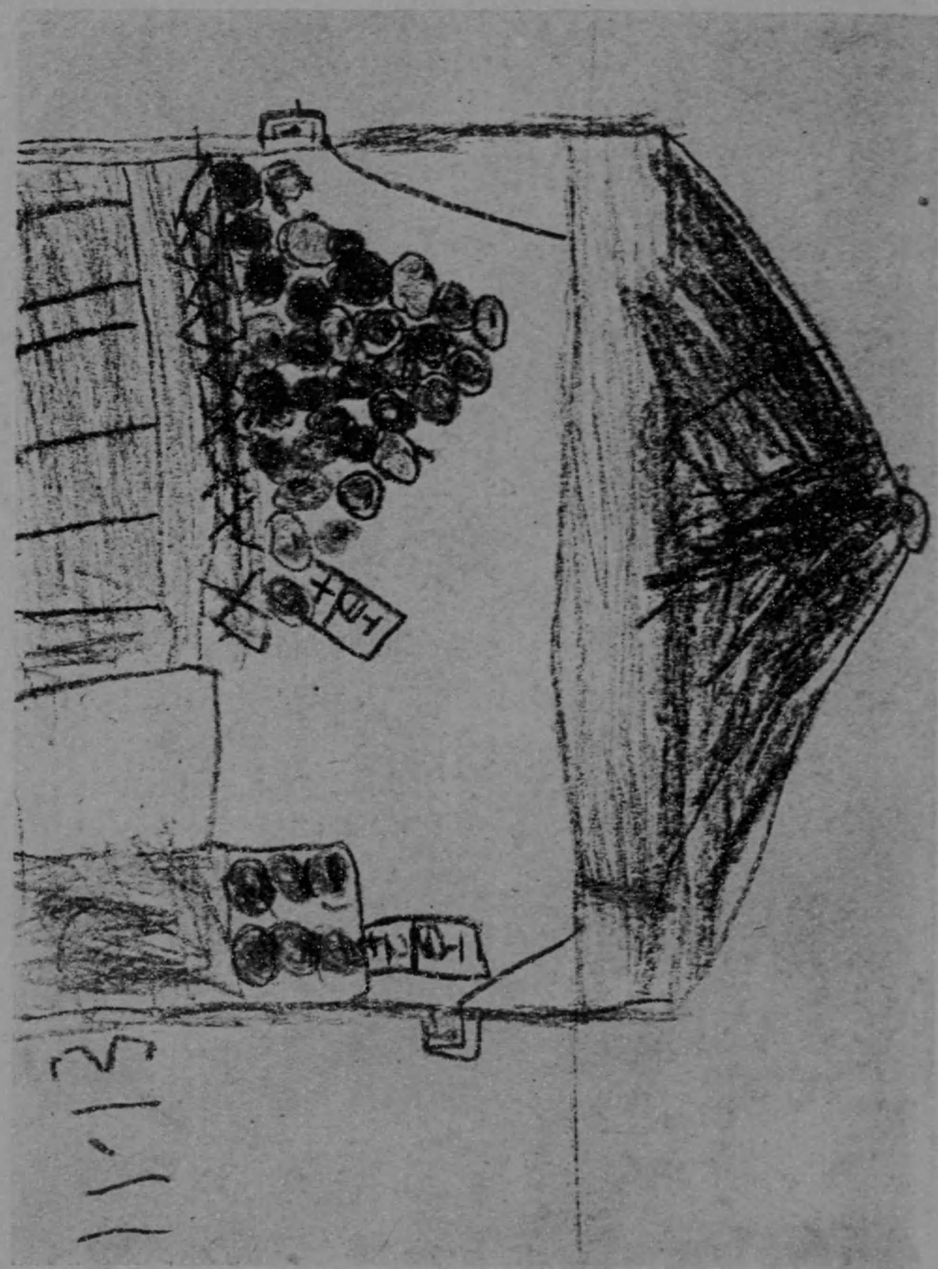
わたけれど描かなくてもよいでせう、美味しさうだ」と云ひながら「柿は百匁いくら」と聞くので答へると、二十錢を書き、次に日除けがあつたことを思ひ出してそれを描き、最後に屋根をつけて終つた。

幼稚園はこのために三十分遲刻した。私は送り乍ら「あそこも畫になる、こゝも」と話し合ひ、子供も「何でも氣をつけて見れば描けるね、今度はあれを描かうかな」と喜び勇んで明朝から必ず幼稚園へ行く前に描くと云つて別れた。」

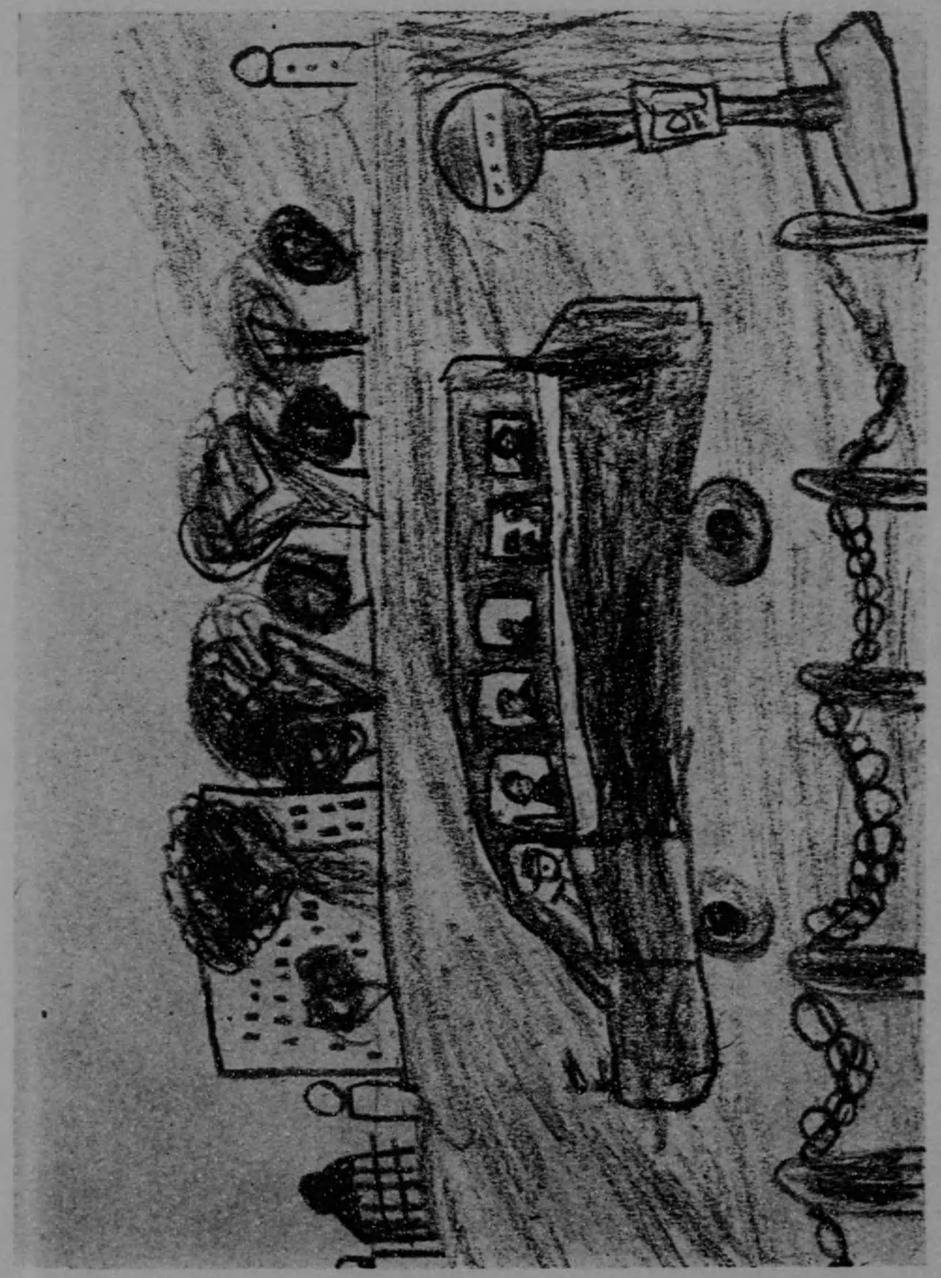
以上の手記の中で特に注意すべきところは母親が蜜柑の色について質問された時に、逆に「あなたは何色にするの？」と聞いてゐることである。これは我々が特に指示したことであるが、非常に大切なことである。しかしその次にすぐに蜜柑の實物を出して見せてしまつてゐるところが惜しいと思ふ。もう少し子供自身に考へさせる方がよいのである。しかし物によつてどうしても憶ひ出せない時で、その物が手近にある時は、見に行かせることもよいであらう。

第五圖、青バス（十一月十四日、二十五分）

この畫は未だその主題が平凡であり、所謂繪本の繪のやうな傾向があるが、しかし前にくらべ



圖四第



五　繪　圖

れば、畫面がまとまり、豐富になつて來たことを示す畫である。

母親の手記――『昨日から、明日は幼稚園のブランコを描くと云つてゐた。今日は六時半に私も何時もより優しく起したのですぐ起きて仕度し、食事前に描く事にした。しかし始めは勢ひ込んでゐたが、いざクレヨンをとると、ブランコではむづかしくて、思ふやうにクレヨンが動かぬのを、つまらなさうにして、十分位考へてゐた。結局ブランコはむづかしいから青バスにすると云つて、食後に描きはじめた。バス全體の形を描いてから少し小さかつたと氣にしてゐたので、「バスの止つてゐるところの周りにはどんなものがあつたでせう。家はなかつたかしら、木は？」と云つたので、「さうだ」と云ひ、喜んで手を休めずに描いた。銀杏は二三本であるが、昨日私と一緒に見た時、奇麗だと感心してゐたので、銀杏ばかりを描いてゐて、常磐木は一本だけであつた。そこで「あの邊は銀杏だけであつたかしら？」、外の綠の木もあつたでせう」と云ひ添へた。バスの入口はこちら側にあるのに「むづかしいから向ふ側にあることにして置かう」と云つて窓にしてしまつた。私は「今度はこちら側に描きませう」と云つて置いた。

今朝は遲刻なしに幼稚園へ行かれるので「僕は畫は大好きになつた、今日は何を見て來よう

か？」と元氣に出かけた。」

右の手記の中で、母親が「バスの止つてゐるところの周りにはどんなものがあつたでせう？。」と聞いてゐるところは、母親自身が記憶畫と云ふものを理解したことの一つの現はれである。これだけの理解が出來てはじめて子供も亦記憶畫が描けるやうになるのである。

又この母が云つてゐるやうに、バスの入口が逆になつてゐるやうな場合も、いつたん描いてしまつた時は、「こん度はこちら側に描きませう」と云ふに止め、決して描き直しをさせたりしてはいけないのである。これを描き直させると、その一つの缺點を指摘したことによつて、子供にとつては全體の努力が無視されたことになり、自負心を失ひ、又は反抗心を抱き、ひいては畫に對する興味を失ふことになるのである。それ故にこのやうな場合は、この母のやうにして再び失敗をくりかへさないやうに云つて聞かせ、畫全體としては褒めてやり、自信をつけさせることが大切なのである。

以上の畫を見、又母の手記を讀むと、この十四日頃迄に、早くも晴夫君は記憶畫の軌道に乘つて來て、可成觀察態度も出來て來たことが判る。又特に注意すべきことは、以前に圖式的な得意

な畫や描き易い畫を描いてゐた頃の「畫が好きだ」と云ふのとはちがつた意味で、畫を描かうとする要求が現はれて來てゐることである。

第六圖、省線電車（十一月十五日、十五分）

觀察が細かくなつた例である。

母親の手記――『昨日から、明日は原宿驛にしやうか、運送屋（驛附近にあり、荷物トラックの等澤山あつて子供の目につき易い）にしようかときめてゐたが、夜親類の家へ行つたので、今朝になると、京王電車を描くと云ひ出した。

朝は畫を描くことに決めてから、起すと素直に床の上に起き上るけれども相變らず洋服を着換へる時間は長い。京王電車のつもりで車體を描いてゐたが、省線にしてもよいかと尋ねるので、「今度からは、はじめからこれを描かうと決めたならば、途中で止めてはいけない」と云つて今日は省線にすることにした。

電車全部は、あまり興味を持つて描いたやうではなかつた。（遲刻しないやうに早くといそがせたせゐもある。）そして夜にすると云つて薄黑く塗つたので、「夕べは空は奇麗だつたわね」と

云ふと「さうだ星があつたねいろんな色に光つてゐた」と描いてゐながら、「黄色が一番星らしい」と云つて、黄色を多くした。(引用者註——星をかゝせたいと思ふ時に、まともに「星があつたでせう?」と云はず、「夕べは空が奇麗だつたわね」と云つた母の行き方は、我々の指導の急所をはつきりつかんでゐることを示してゐる。すべて、描かせたいと思ふものを直接に教へず、暗示を與へたり、又は「何かなかつた?」と聞き、子供自身に思ひ出させ、考へさせることは、極めて大切なことである。これは單に描畫指導の場合に止ることでなく、子供躾け上の急所である。)次に「背線は今何處を走つてゐるの?、昨夜はドアの所で外を見てゐたでせう」と云つたので「さうだ家があつた、お店があつた」と喜んで描き添へた。

今の處、描きはじめは興味なく、描かうとするものの輪廓が大體出來上ると興味づいて愉快に描く。

日一日と畫を描く態度、物を觀察しよう、畫にしようとする氣持が出て來た。しかし心の中には描かれてゐても、手を動かして描き現すことが充分出來ないらしい。そのために自分の氣に入るやうに描けないで、癇癪を起して、持て餘すことが多くなつた。私がよく描けてゐると

圖六 第

第七圖

云つても滿足しなくなる。しかし自分で下手だと決めて描きたがらなくなつた畫でも先生から面白く描けてゐると云つて頂いたゝめに、自信を得て度々描くやうになり、終りには自由に取扱つて描くやうになつた。」

第七圖、沙魚（十一月十七日）

これは父親の釣つて來た沙魚を描いたものであるが、從來の圖式的な畫からぬけ出して見たものを忠實に描いてゐる畫である。これだけ觀察が鋭くなつてゐるのである。畫そのものは簡單であるが、よく見ると、我々の云つてゐるやうな指導をしてゐない子供にはこれだけの沙魚は描けない。この時我々が非常に褒めたので、自信を强めた。その後、觀察の鋭さ深さが一層增して來てゐる。

第八圖、下駄屋（十一月二十日、四十分）

この頃は次の母の手記に見られるやうに畫を描くことに興味が强くなり、どこでも畫題を見つけて描き始めた頃である。從つて毎日の畫に變化が多くなつてゐる。どんな物でも畫に描かうとする、いはゞ潑剌たる積極的なところが出來て來てゐる。そしてそれが單に畫に對してだけでな

く、生活全體に現はれて來てゐることは注意すべきである。

母の手記――『昨夕、祖父母の家に行き御褒美に印度林檎を頂いたので嬉しくて、歸る途中之は僕のものだから誰にも分けないと云ひ乍ら樂しさうであつた。今迄私は畫が面白く出來たと思つても一度も賞を與へた事がなかつたので、今日は如何にも得意らしかつた。

私は「一生懸命に描きたいものを描いてゐると、段々今迄氣がつかなかつたところも見えてくるし、見たものと同じものが描けるやうになる。大人が描かうとしても眞似の出來ない面白い畫が描けるやうになる、晴夫も又明日から描きませう」と云ひ乍ら續く店先を一軒づゝ、此處も畫になる、此處もと見ながら一番角の下駄屋が店が大きく目立つてゐた爲か下駄屋にすると云ひ、二分位立ち止つてゐた。

今朝五時半御不淨に起きる時、丁度今朝から早起きの習慣をつけやうと思つてゐたので、大きな腕時計を枕元へ置き、この長い針が十二時の處へ來る迄(六時のこと)にすつかり洋服を着換へて洗面所へいらつしやい、と云ひ渡して置くと、何時になく十二分後に仕度を仕終つて元氣に出て來た。それから今朝始めて一人で東鄕神社へ參拜し、騷け足で歸つて來た。今朝支奬

勵のつもりでお菓子を與へると、僕の林檎は皆で食べる事にしようと嬉しさうに云つた。

始め下駄屋の「げた」の字を教へて欲しいと云ふので、書いて見せると、二度程他の紙に書いて見てから畫の中に書いた。看板を描くときは興味ありげであつたが、ウキンドウの陳列や、下に並べてあるものや上にかけられたものを、自分ではもつとはつきり描きたいが、それが描けずに不滿であるらしい。次に臺の上にも、奥の方にも下駄がたくさんあつたけれど、あれをどう云ふ風に描いたらいゝかなと云つてゐた。下駄は皆同じやうであるが、角張つた大きいのはお父さん、小さいのが子供ださうである。心には澤山の下駄があり、一足描くと畫面が狹くなるのが氣になるらしかつたが、出來上つた時は喜んで、「面白いね」と昨日よりも三十分早く幼稚園へ行つた。

今朝の樣に、自發的に早く支度をしたのは始めてゞあつた。今迄は毎朝六時半頃に起しても床の上に座つて頭から布團を冠り、なか〳〵着換へず、催促されると澁々一枚づゝ着ては時間がかゝるので、なんとかしなければならぬと思つてゐたのであつた。』

右の手記の中で特に注意すべきことは、下駄屋の看板を描くために字を知ることが必要になり

自然に母親に向つて字を敎へて呉れと求めて來たことである。學齡前の幼兒に字を敎へたものかどうかと云ふことは、多くの親御さん方が質問されることであるから、こゝで少し說明して置かう。

原則として、學齡前の幼兒に字を敎へてはいけないと云ふ道理は何處にもないのである。たゞ子供が自ら知らうとしないのに、無理に敎へる必要はないのである。所謂强制勉强をしてはいけないのである。反對に子供が自ら進んで字を知りたがり、今の例のやうな調子で聞いて來たら早速敎へてやるがよいのである。かう云ふことは滿四歲前後からはじまり「トシ子つて書いてよ」などと求めてくることはしば〳〵ある。滿四歲では未だ自分で字を眞似して書くと云ふ程精神發達がないが、晴夫君のやうな年齡ではもう自らも書くことが出來るのであるから、そこに又ちがつた注意が必要になる。つまり字を求めて來た時には、敎へ込まずに、かう云ふ風に書いた方が書き易いからと云ふ具合に正しい書き方を敎へる樣にすることが必要なのである。それをいきなり「それではちがふ、かう書くものよ」などとけなすことは子供の劣等感を增すことになるから注意しなくてはならないのである。この調子で文字を憶えた子供は、その精神發達に應じて、假名からやさしい漢字、ひら假名を要求し、次に新聞などから知つてゐる字を探す事に興味を覺え、逆に新聞等に書いてある文字を讀み、憶え、書かうとするやうになるのである。これは大人の趣味の勉强としてやつてゐるのではなくて、遊びとしてたのしくやつてゐるのであるから、しつかりと身についたものになるのである。

文字については更に述べることがある。それは、我々の生活指導の立場から云ふならば、子供が自ら文字を知りたくなるやうな環境を作つてやると云ふことである。この場合に大切なことは決して焦つて結果を求めてはならないと云ふことである。環境を作つてやつても、子供がそれに應じて來なければ、あゝこの子供は未だ字を知りたがるだけの精神發達がないのだな、その中に發達してくれば、進んで知りたがるやうになるだらう、それまでゆつくり待ちませう、と云ふ氣持で靜かに待つてゐればよいのである。

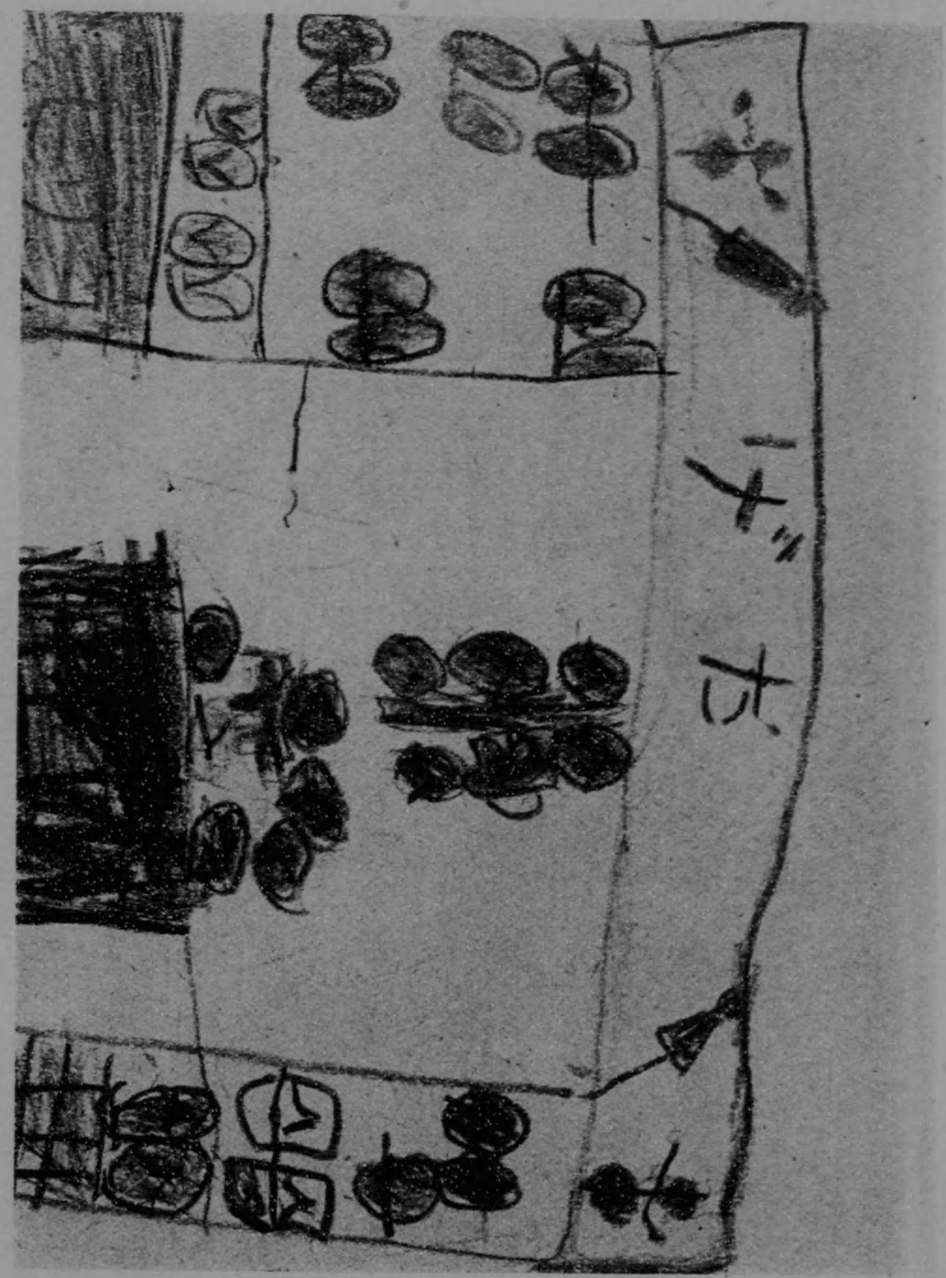
ところで、文字を知りたくなるやうな環境を作るにはどうしたらよいかと云ふと、この記憶畫を日課とするなどその最大最良のものであるが、もつと小さい時から、アイウエオの五十音を假名とひら假名で兩面へ書いてある、積木等を與へて置くのもよい。只與へて置けばよいのである。

子供は、文字に興味を抱くやうになれば自ら「これはなんて云ふ字」と云つて聞きにくる。さうして「つ憶へ二つ憶へして行く中に「リンゴのリの字は、リボンのリの字なのね」と云ふ調子に文字のはたらきが判つた來るのである。この外適當な繪本を與へることなども文字に對する興味をひき出すためによいであらう。但し學校の讀本は與へない方がよい。これに慣れさせると、入學の時に新鮮な興味を持たせることが困難になるからである。

第九圖、落葉拾ひ（十一月二十一日、一時間）

この畫は日常平凡な生活の中から畫題をとつた例であり、それだけ畫が生活化したとも云へるのである。又他方から見れば、かう云ふ畫が描けるやうになつたと云ふことは、それだけ日常生活に於て自發性が豐富になり、思ひ切つて自分の力を出しはじめたと云ふことをも示してゐるのである。この變化は、後に引用する母の手記の中によく見られるところである。

母の手記――『午後幼稚園から歸つてから暫く盡瘦し、夕方は外で遊んでゐた。庭には此頃落葉が絶間ない。私は大きな葉はお風呂の焚き付けになると思つて、少し拾つて來て焚いて見るとよく燃へるので、丁度外に遊んでゐた子供達に、落葉を拾つて來てと頼むと、大喜びで三



圖八第

圖九　第

つの美子迄兩手に抱へて拾つて來た。そこで三人にお風呂で燃すと役に立つことを見せてやつた。すると晴夫が突然　ついでに僕は門の前をお掃除して來ようと云ひ出し、草箒と塵取りを持つて外へ出て五分位すると、奇麗になつたから見てと元氣に歸つて來た。そこで私が、上手に出來たと、澤山褒めたので、僕明日もやると、云つて嬉しさうであつた。

夕食後、本を見てゐたが、今迄とちがつて通り一邊の見方でなく、默つて暫く見つめ乍ら丁寧に見るやうになつた。又私が讀んでゐる新聞を見て讀める字を探しては、質問した。褒しなにお風呂に入り乍ら明日は落葉拾ひの繪にすると云ひ出した。

かうして畫題がきまつたわけである。さて翌日になると……

『今朝は六時に起すと、時計を見て遲く起したと怒つた。昨日はもう六時に仕度が出來てゐたと不機嫌だつたが、妹が起きたので洋服を着かへさせ乍ら、お兄ちやんは昨日からとても仕度するのが早くなつたのよ、見てゐて御覽なさいと云ふと、それでは長い針が三時のところへ來る迄に仕度すると云つて始めた。きつちり十五分すぎに仕度出來て洗面所から出て來たので東郷神社へ今日も喜んでかけ足で行つてお參りして來た。六時半に食事して七時から畫を描くこ

とにした。

始め僕は人物が下手だから嫌だといつて愚圖々々してゐた。之は私に責任があると思つた。と云ふのは、前に相談所で先生に、人の畫を描いてごらんなさいと云はれたときあまりに幼稚な拙い人の畫を描いたので、つい家に歸つてから皆の前でそのことを話してしまつて、いはゞけなしてしまつたので、その時から晴夫に、自分は人の畫が下手だと思ひ込ませて了つたらしいのである。そこで、この間あなたの描いた原宿驛の切符切りの人の畫は、先生が面白く描けてゐるとおしやつてゐたのよ、と云つてゐる中に、姉や妹が描きはじめる。私が又「皆、思つた通りの畫がどんなに面白く出來るかたのしみだ」と云ふと、それ迄妹の顏だけ描いて愚圖愚圖してゐたのが、急に一生懸命になり出した。妹を描き上げると、姉を描き、洋服の色を出すのに苦心して、赤と茶を合はせて見ようか、などと云つたりした。次に自分を描き頭の毛がむづかしいと云ひながら胴迄描くと、隣の妹とくらべて、背が同じ位になつたので、私に向つて「困つたね、どうしたらいゝだらう」と云ふ。そこで私が、「道のすじより足を長くしたらどうでせう」と云ふと、「さうだね」と元氣に足を描いて「足が大きすぎちやつた」と云つた。それか

ら塵取りを描いて、黑く塗り終つてから、「惜しいことをした、葉が入つてゐるところにすればよかつた」と云ふので、「今からでも出來るでせう」と云ふと、茶色で上から葉を描き乍ら「かうして葉の柄を出して置けば一杯になつてゐるやうだ」と云つてゐた。次に自分の洋服は白いところが殘るやうに塗つたので、「白いところが出てゐると何だかやぶけてゐるやうに見えないかしら」と云ふと、笑つて今度は丁寧に塗り、外の洋服も、もう一度上から塗り足してゐた。次に葉が落ちてくるところを澤山描いて、「あゝこんなに澤山落ちて來てをかしい」と云ひ、又「うしろは家の塀だつた、塀を描くと引き立つから描かう」と云つて、このやうに描いた。「向ふに木があるね、あとで描かう」と云つて、さきに地に落ちた葉を描いてゐたが、「もう疲れたから木は描かない」と云つて止めにした。昨日から今日は一番面白い日であつた。晴夫が自發的に變つて來たのに驚いた。どうして、こんなに變つたかの一番の原因は、一昨日、相談所の先生から、畫を褒めて頂いた爲に、晴夫はやれば出來ると云ふ自信がつき、又云はれたことをやつてみようとする氣持が強くなつたことにあるらしい。今迄、愚圖だとか、のろまだとか云つては叱つたことが如何に無益であり害があつたかを知つた。』

この手記を見ても、又前の方に度々引用した手記を見ても、晴夫君は相談所の先生に、自分の畫を見せると云ふことが大きなはげみになつてゐるし、又その先生に度々褒められることによつて自信を得、又それが畫を描く上のはげみになつてゐることが判る。これは晴夫君が相談所の先生に大きな權威を認めてゐたからである。權威を認めてゐると云ふことは、つまり「この先生は本當にゑらい人だから、この先生がうまいと云つたならば、本當に自分はうまいにちがひない」と考へることである。ところが一般に母親はさう云つた權威がないのである。これは家庭内で父が母を貶すと云ふやうなことや又あまりに妻をあごで使ふと云ふやうな態度の結果、子供迄母を馬鹿にするためでもある。しかしさう云ふ缺點のない家庭で、母が教育的な權威を持つてゐる場合でも、子供は日常生活の普通のことには母の權威を認めるが、畫のやうな特殊なことになると權威を認めなくなりがちなのである。從つて母親がいくら、うまいと褒めても、子供は信用しないで「僕は下手なのだけれど、お母さんは只うまい〳〵と口で云ふだけなのだ」と云ふやうな感を抱くのである。從つて只畫を描かせるだけでなく、子供が權威を認めてゐる人に、描いたものを見せて、その人から我々が述べたやうな指導方法に從つて、適當な批評を時々與へて貰ふことは大いに必要なことになつてくるのである。晴夫君の場合はその權威ある人が相談所の先生であつたわけなのである。

そこでから云ふ質問が出てくるかもしれない。即ち、晴夫君のやうに相談所へ行ける人はよいが、さう云ふ便宜の得られない場合は結局この指導は效果を擧げ得ないと云ふことになりはしないかと云ふ質問である。しかし私達は、勿論相談所の直接の指導を受けた方が一層效果が擧がることは當然であると思ふが、それだからと云つて、この指導法が一般家庭だけでは無效であるとは云へないと思ふ。相談所の先生の外にも子供が權威を認めてゐる人はゐるのであるから、さう云ふ人に連絡をとつて、繼續的に見て貰ふやうにするのである。例へば國民學校の先生であるとか幼稚園の先生であるとか、又は祖父母であるとか、或ひは又父親自身でもよい。これらの人々がよく我々のやり方を理解して行つたならば、決して相談所がなければ效果がないと云ふことはないと思ふのである。勿論前にのべたやうに相談所で直接指導を受けた時の效果を百とすれば、或ひは八十とか七十とかの效果しか擧げ得ないかもしれないが、それでも何もしないよりは、はるかによいではないか。又一歩を讓つてかう云ふことも云へると思ふ。即ちたとへ記憶畫の指導

が充分に出來なくとも、我々の云ふ意味の幼兒の生活指導の立場からの畫の見方、導き方を知つてゐるだけでも、幼兒を躾ける上に一段と進歩が見られるはづであると思ふのである。

第十圖、神社の鳥居（十一月二十二日、四十分）

この畫は、朝お參りに行つた東郷神社の鳥居を描いたものであるが、再び鳥居の前を通つた時に、さきに描いた鳥居が實物とちがつてゐることに氣がつき、早速訂正したと云ふ過程を經てゐる。つまり見たものを忠實に描かうとする傾向が強くなつて來てゐることを示してゐるのである。

母の手記――『六時十五分前起床、六時に時計を持つて元氣に洗面所へ出て來た。雨降りなので火鉢にあたつてゐたが、東郷神社へお參りしていらつしやいと云ふと喜んで出かけた。昨日から東郷神社を描くと云つてゐたので、今朝お參りに行くとき紙と鉛筆を持つて行つて、字（東郷神社の四字）を見ながら書いて來ようかと云つてゐたが、出かけるとき、つい私もそのことを忘れてしまつた。

はじめに、僕がお辭儀をしてゐるところを描かうと云つてゐた。社前の道を描いてから右の方にある問題の東郷神社と書いた石が立つてゐるのを描いて、神社の社の字が書けなくなつたと云つてゐた。次に鳥居を縦の棒を一本書いて、まるで大木みたいになつたと云つて色を塗り乍ら、すき間のないやうにしようと云つて塗つてゐた。（次に左側の棒、次に上）それから燈籠を描き周りの木を描いた。鳥居下の五本の線は下へ下りる石段を描いたもの。又その先は道を描き現はしたものである。「なか〳〵向ふの方を描くのはむづかしいね」と云ひ、「僕を描くのはもう止した」と云つて止めた。

鳥居は、はじめ横木が一本しかなかつたので「幼稚園へ行く時、よく見ていらつしやい」と云つて置いた。すると歸つて來てから「今朝の鳥居はちがつてゐたからなほす」と云つて、この樣に描き上げた。そして見直して來たので、縦の柱だけ丸太で、上の木は角材であることが判つたと云ふことを云つてゐた。

今日は幼稚園で犬ゴッコをして遊び、幼稚園へ行くのも何時もより早かつたので嬉しかつたさうである。相變らず本をよく讀んでゐる。又色の組合せの本が面白く、二色合せて新しい色になることが不思議であり、面白いらしい。今週になつてから、色に氣をくばつてゐる樣子が見えて來たやうな氣がする。』

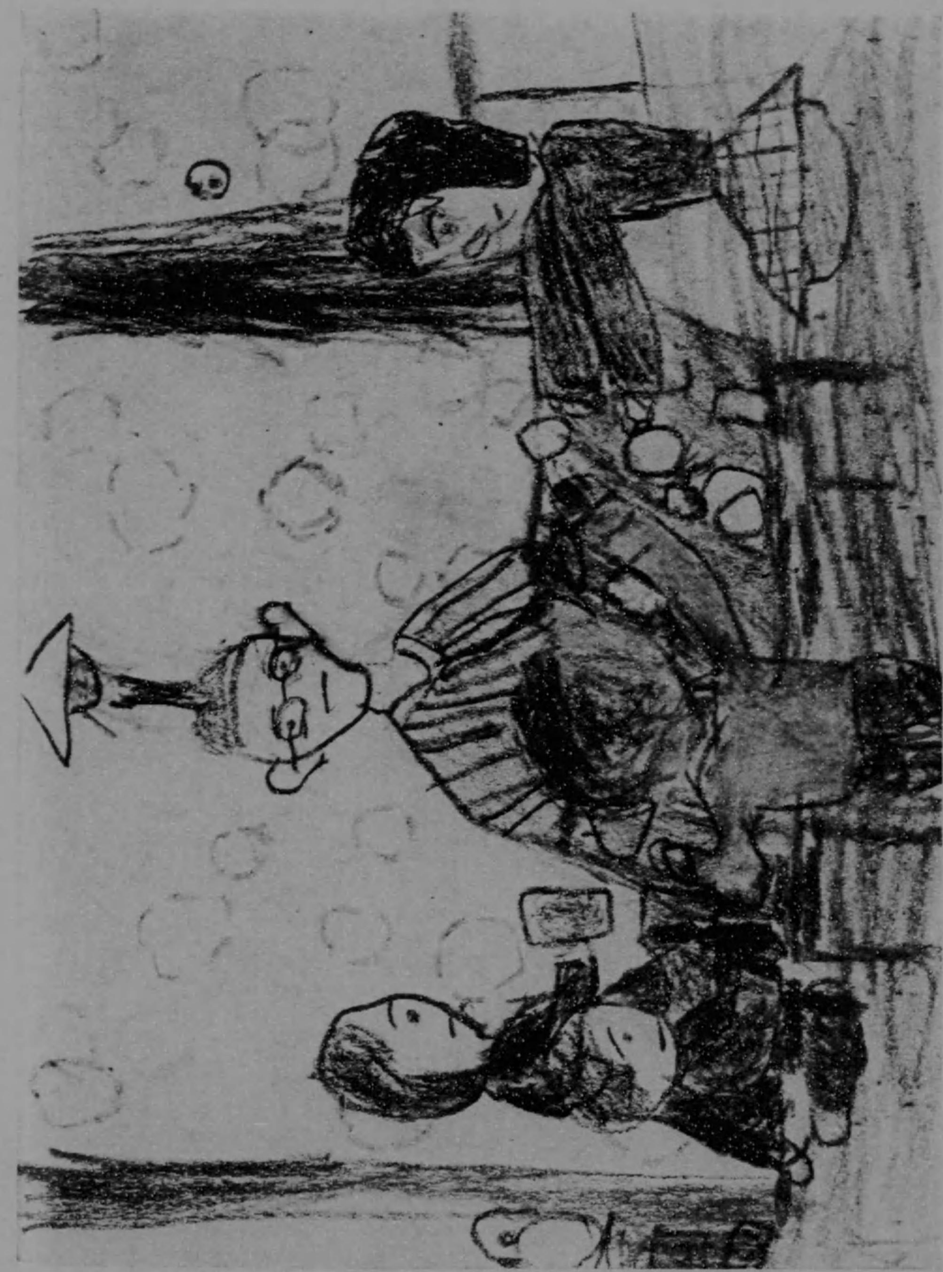
第十一圖、朝の食事（十一月二十三日、一時間三十分）

前の「落葉拾ひ」の手記にあるやうに、晴夫君ははじめは人物畫に自信がなくて嫌つてゐたが、「落葉拾ひ」を描いてから急に自信を得たものらしく、その後たくさんの人物を中心にした畫を描くやうになつた。その一つがこれである。

母の手記――『日曜でも寢坊しない約束なので、何時もの通りに起き、お參りを終へ食事の後に、皆の御飯の時を描くことにした。

はじめ僕の頭は後がどうなつてゐるかしらと云ふので、よく手を後へやつてごらんなさいと云つて置くとこのやうに描き、少し丸くなりすぎたと云つてゐた。左手をどう云ふ風にしようかと考へてから描き、右は特に五本の指に注意してゐた。自分の姿が描けると喜んで姉を描きこの面白い鼻のかつかうで皆を笑はせた。（引用者註――この皆が笑つたと云ふ笑ひは、そのをかしな鼻を、けなす意味ではないことに注意されたい。所謂一家團欒の笑ひである。）洋服の色は實物通りにしたいと氣を付けてゐた。又「やぶけてゐると大變だから白い處のないやうにしよう」と云つてゐた。次に妹を描き、妹に喜ばれて滿足してゐた。次に母を描き、父は一番む

圖十一



第十一圖

づかしいと云ひながら描き終つた。テーブルはどう云ふ風に描いたらよいか、とたづねるので座敷のテーブルの脚が、向ふ側とこちら側とでは、どうちがつて見えるか、緣の向き方がどうなつてゐるかをよく見せてから、描かせた。疊を描いて向ふ側に襖があるが、「今日はもうよす」と云つて止めた。出來上つた時は大變喜んでゐた。(襖の模樣は翌日描き足した。)

午後から來客があり、夜は親類へ行き、歸りが遲くなつた。雨の夜、電車道にうつる電燈の光が大變に面白く、畫に描きたいけれどもむづかしい、明日の畫は何にしようと殆んど閉められた店の多い中を探し乍ら歩いてゐた。」

この手記を讀んで特に注意すべきだと思ふことは、晴夫君が畫を描くのに現實に忠實に、云ひかへれば出來るだけ本物と同じやうに、描かうとする態度が特に著しく現はれてゐることである。その一例は自分の頭を描かうとして「僕の頭のうしろはどうなつてゐるかしら」と云ふ問を發してゐることであり、又左手をどう云ふ風にしようかと考へてから描いたと云ふことである。この態度は我々の指導を行つてはじめて出てくるところのものであり、漫然と自動車だ、飛行機だ、軍艦だ、と云つて得意な畫ばかり描きちらす態度とは全く異つたものなのである。この現實に忠

實な態度が觀察態度の大切な基礎なのである。

○十一月二十四日には「八百屋」の畫を描いてゐる。都合によつて畫は省くが、母の手記から要所だけ拔いて置かう。(以下にも時々、畫を省いて手記だけ引用することがあるから豫め御斷りして置く。)『店の畫はいくらか慣れて來たやうに見える。店の奥はどうなつてゐたのと尋ねると、「僕は奥の方は見て來なかつたよ」と云つてゐた。自分も段々見たものを描くと云ふ樂しみが出て來たらしい。……』

見なかつたものは描かないと云ふ態度こそ、我々の描畫指導ひいては生活指導に於て特に强調してゐるところなのである。これによつて、本當の觀察態度が出來上つて行くのである。それからもう一つ御注意願ひたいことがある。それは、見なかつたものは描かないと云ふ態度は要するに正直な態度であると云ふことである。從つて「正直」と云ふやうな道德的な態度が眞に實行を通して(實踐的に)養はれて行くことになるのである。この本は科學教育と云ふことを中心にして生活指導を述べてゐるのであるから道德教育の方面迄觸れる餘裕がないが、我々の云ふ生活指導はそこ迄入つて行くものなのである。再び母の手記に歸らう。

『今日は幼稚園では砂場で遊び、又ワンワン遊びをしたと云つた。又ハトポッポ體操はこんなことをするのだと云つて見せてくれた。』

これは總じて、表現が豐富になつて來てゐることを示してゐる。

第十二圖、自分で作つた細工物(十一月二十六日、三十分)

これは、自分で作つた紙細工の動物(鰐、家鴨、かこひの柵等)を畫に描いたものである。我々はその實物を見たが、それに忠實な畫である。遊びとして、時々かう云ふ工作をとり入れることは、子供が畫にあきて來た時などにも、よいことであると思ふ。それには紙細工の外に粘土細工、はり紙細工など色々とある。

母の手記——『二十五日、幼稚園で今日は古葉書で動物をお作りなさいとおつしやつたので「僕は鰐を作つた、鰐のお父さんとお母さんに、子供を作つた」と大層得意さうであつた。夜、今日の鰐を作つて見るからと、面白さうに大きな裁縫鋏で拵へた。そして明日は何を拵へようと云ひながら、家鴨も作つた。それから、柵、小屋、餌、を作り本當に嬉しさうであつた。

二十六日。例の時間に起き、何時もの通り食事後、もう描くものがなくなりさうだと云ひ昨

日は、消防自動車の車庫を描くことにしてゐたのが、今朝になると、夕べの動物が描きたいと云ひ出して、このやうに描いた。柵を描く時には少し困つて、これで柵に見えるかと尋ねた。」

○十一月廿七日には靴屋を描いてゐる。この日から母親は、假名の正しい書き方を教へることを始めてゐる。前に述べたやうに晴夫君は、もう自ら文字を求めはじめてゐたのであるから、これは丁度適當な時期を得てゐたわけである。この日の畫用紙の裏面にはクツヤさんの五字がたくさん書かれてある。

とかく字の指導は、すぐにアイウエオと順に教へようとするが、これは誤りである。晴夫君の場合のやうに生活からの自然の要求に應じて與へて行くのがよいのである。

第十三圖、兵隊さん(十一月卅日)

この畫は人物が動的になつて來たことを示してゐる。つまり動いてゐるものを、その動いてゐる姿のまゝに描くやうになつたのである。一般には記憶畫を描くことが軌道にのり、觀察態度が相當に出來て來ても、尙人物は靜的に描かれがちである。それだけに晴夫君は進歩が早いことが

圖二十 第

第十三圖

判る。

この畫を晴夫君自身は下手であると思つて不滿足の樣子を示してゐるが、かう云ふ場合は父や母はいゝところを見つけてほめてやることが必要である。

母の手記――『幼稚園へ昨日行く時、晴夫の前を歩いてゐた兵隊さんを描くことにした。右端の兵隊さんからはじまつたがはじめは、なか〳〵進まない。帽子がむづかしいとか顏が描けないと云つてすねてゐたが、考へて彈の箱を先に描いてから漸く帽子、顏と描きはじめて、色を塗り終つてからまるで屑屋さんが籠を背負つてゐるみたいになつて了つたと云つて自分も滿足してゐない。二人目も足が太くなつたと云ひ乍ら描き、次の二人は銃をかつぐのに苦心して漸く描いた。昨日の兵隊さんは、歩き乍ら絶間なく銃の持ち方を、變へる訓練をしてゐたので、描くのにもむづかしかつたのかもしれない。兎に角、自分の頭にあるやうに描き現はせないために腹立たしさうであつた。文字も今日はあまり書きたくないらしく、少しでやめた。でも今日はヘイタイサンと私が描いてゐると、自分でバンザイと書いてと云つたので嬉しかつた。』

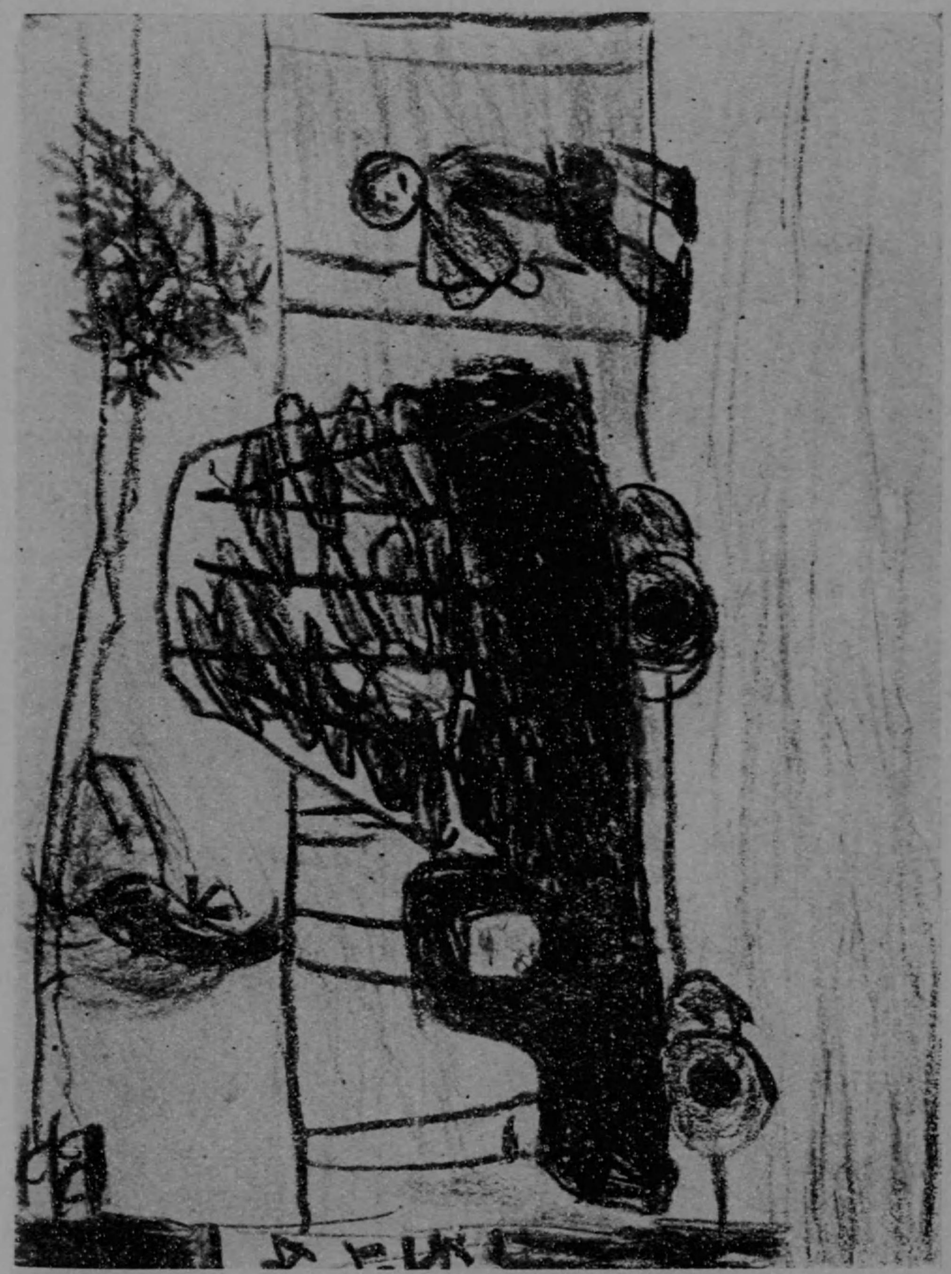
第十四圖、たなご（十二月一日）

第五圖の沙魚と同じやうに、眞に見たものを忠實に描いてゐる。お魚の略畫（例へば第三のCの如きもの）に慣れてしまつた子供であつたら、恐らく沙魚もたなごも區別出來ないやうなお魚の畫を描いたことであらう。略畫を敎へてそれに慣れさせてしまふと觀察態度が出來なくなるのである。勿論滿三四歳の頃に「何か描いてよ」と求めて來た時は、略畫式な畫を描いてやることになるのが普通であり、それも致し方ないことであるが、前の圖式畫の指導のところ（97頁）でのべたやうに、出來るだけ子供自身で描くやうに仕向けてやることが大切である。

母の手記――『昨夜、父の釣つて來たたなごを、そのまゝ入物に入れて置いたので今朝はそれを描くと云ひ出した。一度よく魚を見てから描きはじめたのは、中央の一番下の魚である。はじめは可成丁寧に描いてゐたが、段々に早くなつて來た。描き乍ら、どうして魚はこんな鰭があるのか、尾は何故こんな形か、背中の鰭は何をするのかと尋ねた。器は先達ての沙魚の時は色を塗らなかつたから今日は描いて置かうと云ひ乍ら描き足した。描き終つてから、もう一度たなごを見て來た「こゝが少し赤くなつてゐたよ」と云ひながら鰭の一部を赤くした。

今日から大變文字に興味が出て來たやうな氣がする。私が何も云はなくても、自分から僕の

第十四圖



第十五圖

云ふことを書いてよと云ふ。私がそれを書く順序をよく見せ乍ら書いてやると、それを見ながら一生懸命に氣をつけて書く樣になつた。行儀もよくなり坐つて落ち着いて書く。その中に急に自分から、今日から繪日記を書くと云つて、姉の日記の見覺えを眞似て、畫の裏に書いた。

こゝでは、オトウサマ、イラツシヤイマシタ、イツバイ、ツツテ、カヘツテモ、を書いてと云つて別紙に書かせられた。終りに、「イキテイラツシヤイマシタ、なんて書いたら大變なことになつてしまふね、お魚だもの」と云つて笑ひ乍ら書き終つた。今迄「モ」の字が左へ曲つたり、「シ」の字の終りが反對に上から下へ書き下してゐたのが、本當の書き方を覺えて嬉しくなつて來たらしい。」

日記の一部——「キノフハオトウサマハ、ツリニイラツシヤイマシタ。イツバイツツテイラツシヤイマシタ。オウチニカヘツテモイキテキマシタ。」

○十二月二日に鷄の畫を描いた。この日手記に注意すべきことがあるから左に引用して置かう

『姉が昨日、晴夫を連れて學校へ運動に行つて、鷄を見て來た。昨夜も、明日は鷄を描くと

云つて、姉と樂しさうに話し合つてゐた。晴夫が「僕はかう描く」と云つて描くと、姉は「私はかうよ」と云つて鷄の形を三角にして、略畫式に圖案化した鷄を描いて見せ合つてゐた。私は晴夫に略畫の習慣がついては殘念だと思ひ、さりとて姉の描いてゐるのをまつかうから駄目だと云ふことも面白くないので、「折角、自分で見た鷄は、自分々々の思ふ樣に描いた方が面白いでせう」と云つて置いた。今朝どう云ふ鷄になるかと樂しみにしてゐたが、矢張り、自分の初めに思つた通りに描いてゐた。

今日も字は喜んで書いた。自分から書いて欲しい語句を云ふ、それが段々短いながらも話になつて行くので面白い。はじめ一言づゝ書かせて置いて自分で一つの文にまとめてしまふやうになつた。……「もう今日から自分一人で畫日記を書くから見ないで」と云つて書いた。まだ「ヲ」と「オ」の使ひ方をたづねる。』

日記の一部――『ニハトリ。チヤボ。ヒヨコ。エサ。コヤ。トマリギ。クチバシ。コケコッコートナイタ。ヒヨコガオクノハウヘハイツタ。ガッカウ。』以上をまとめたのが次の文である

『ボクハキノフハ　ガッカウヘイツタ。ソレデニハトリヲミタ。ソレヲミテカイタ。ヒヨコガシッポヲフッテナカノハウヘハイツタ。メンドリガエサヲタベヤウトシタ。』

この日記をみても判るやうに、晴夫君は早くも文章による表現へと進みつゝある。これは晴夫君の精神發達の程度が、普通以上であつたと云ふことにもよるが同時に文字を求めるやうな環境を作つたと云ふことも看のがすことは出來ない。しかし普通にはこれを望むことは無理と云つてもよいであらう。前の表現のところで述べたやうに、幼兒時代は言葉と畫による表現を目標とすればよいのである。

第十五圖　トラック（十二月三日）

この畫は、子供の注意が非常に細かくなり、我々大人の氣づかないところ迄向けられた例である。それは左の方の電柱にあるタイヤストの廣告、右手の塀の上にある紅葉などに見られる。畫としては丹念な畫になつてゐるわけであるが、かう云ふ風に丹念に描きはじめた時は、ほめてやることが必要である。

母の手記――『昨夕、私と二人で煙草屋へ行く時に見かけたトラックである。それは山の樣に澤庵を積んでゐたので、瞬間に取りすぎたのであるが、二人で思はず顏を見合せたトラック

である。ほんたうにチラッと走り去つた瞬間に目に觸れたものを捉へて畫にするやうになつたことは嬉しいと思つた。

今月に入つてからは描くものが前夜はつきりきまつてゐることと描かうとするものに初めから興味を持つてゐることが增して來たやうである。描きはじめてから考へたり休んだりしなくなつて、自分から喜んで描かうとする態度が出て來たやうに思へる。特に今日は、私は一言も云はなかつた。只「今日の紅葉は、折角描いたけれど、もう少し黃色を入れたらどんなに良くなるでせう」と云ふと、「でも一生懸命一枚づゝ葉を描いたのに黃色を入れると目茶々々になつてしまふんだもの」と云つた。トラックの前方など可成念入りに描いてゐた。先週迄は背景等、描くときもあるし、自分からは描かない時もあつたが、今日は細かに描くやうになつた。電柱はあるけれど、タイピスト養成所の廣告は、私には氣がつかなかつた。最後に澤庵が紐で縛つてあつた事を思ひ出して描き上げた。』

この日の日記を見ると、昨日煙草屋へ行く時、澤庵を積んだトラックが走つてゐた。僕ははじめて見た、と云ふことを書いてゐるが、はじめて見たと云ふことが印象を强くし、その結果、チラット見たものでも畫になつたのであらう。しかしこのことを觀察態度と云ふ方面から見れば、畫を描くための觀察態度が、この頃には生活全體に行き渡つて來たことを示してゐるのである。115頁に述べたやうに、はじめの中は畫に描かうとするものを特に觀ようとしたのであるが、この頃はすでに觀察態度が生活全體に行き渡つて來たゝめ、日常生活の中で　チラッと見たものが、そのまゝ畫に描けるのである。

○十二月十一日は果物屋を描いた。これは第二圖の果物屋と同じ店である。

母の手記――『(前略)……畫面全體の色が薄く、線が弱々しいので私は「大變よく描けたけれど、蜜柑が臺と同じ位の色に見えるでせう？　もつと强く塗つて御覽なさい。此の頃の蜜柑は色も赤くなつて來て甘いでせう、もつと〳〵美味しさうにして頂戴」と云ふと、一つづつ强く塗りはじめ、「ほんとうにさうだ、ひき立つて來た、リンゴもさうしよう」と云つて描き變へた。「店のリンゴや蜜柑が美味しさうになつたから、今度は御店の看板や周りの柱を太くしませう」と云ふと、太くすると云ふ意味が通じなかつた。强くしつかり描きませうと云ふとやつと

判つた。」

この手記を見ると、この母の指導が非常に要を得て來てゐることが見てとれる。それは一つには「母も共に描かう」と云ふ氣持が自然に底に流れてゐるからでもあらう。その結果として、母の指導に對して子供が素直に從つてゐるのがよく現はれてゐる。それは他方から云へば、母が子供と一緒になつて描かうと云ふ氣持になつてゐるために、子供は母に何か注意をされても、少しもそれを叱言として聞かず、又それに反抗しようともしないのである。

○十二月十二日の手記から。

『日記を書く時は、「今日は何曜？」と必ず聞く。私は毎日、「昨日は×曜日だつたから、今日は何曜でせう？」と云ふと自分で今日は金曜だと云ふ。そして金の字を教へてと云ふ。漢字を順序正しく書く事を要求してゐるらしいので、何度も書いて見せる。「今」の次の「丿」が、反對に「八」に書く。何度も同じ誤りを繰り返すので、思はず大きな聲で「何度教へてあげても判らないの」と云つて了つた。いつもなら「そんなら書かない」と云ふのに今日は兩方が眞劍だつたのか、お互に顏を見合せて笑つてしまつた。』

こゝにある、「何度教へてあげても判らないの」と云ふ云ひ方は、我々の避けてゐることである前の方でも我々は、子供の失敗に何度でも繰り返へして教へることが大切であると云ふことを述べたが、この母もその事は充分承知である。しかし人間は時には失敗をすることは當然であるから、この母も思はずこの言葉を口にしたものであらう。しかしこゝにあるやうに、お互に顏を見合せて笑つてしまつたとあるのを見ても、この言葉はこの場合には決して惡い結果を生じてゐないことを示してゐる。普通の場合であつたら、恐らく子供は「もう書かない」と云つて反抗したであらうし、又時には「そんなら仕方がないから書いてやる」と云ふやうな恩にきせるやうな（陰性の反抗）態度に出たことであらう。これが出てゐないのは、母の注告が眞劍であつたことによるのである。と同時に、この母の心に、自分も一緒に畫を描かうと云ふ氣持、云ひかへれば、自分も一緒に修業してゐるのだと云ふ謙虛な氣持があつたことによるのである。

第十六圖、兵隊さん（十二月十三日）

この兵隊さんは四列の縱隊で行軍してゐるところを描いたものであるが、兵隊が重り合つて見

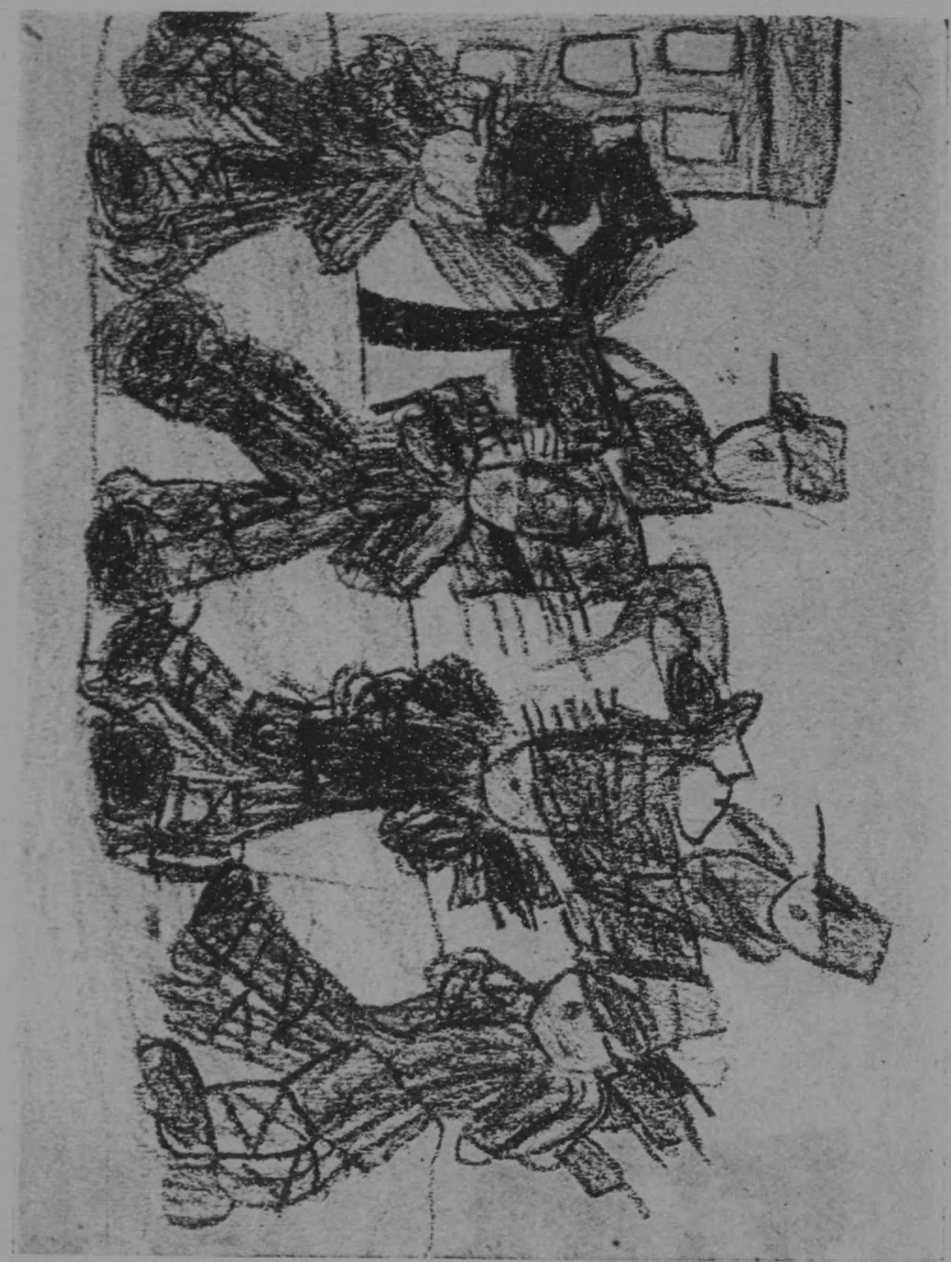
える様子がそのまゝ描かれてゐる。これは大きな進歩である。子供が集團とか何かの群を表現すると云ふことは一般には容易に現はれないものである。子供はさう云ふ場合に、個々のものを羅列したり、寄せあつめたりして、群を表現することが多い。一般に集團的なものを表現することは、學童に於ても低學年に於ては仲々現はれて來ないものである。

第十七圖、輕氣球と街路（十二月十五日）

この畫は遠景が現はれ、所謂遠近法が採られてゐる點で大きな進歩を示してゐる。

母の手記――『昨日の夕方、東鄕神社へお參りして明日の畫を見付ける事にした。街に出ると丁度、面白い氣球に夕陽が映えて　晴夫は大喜びであつた。

今朝描きはじめる處を見てゐると、遠くのものより身近のものを描かうとするので、「氣球はづつと空高く上つてゐたでせう、あまり近くの景色を大きく描くと、氣球が描けなくなつて困りますよ」と云つて置いた。するとロータリーの境と街路樹、海軍協會の入口を描くと「それでは先に氣球を描いて置かう」と云つて描いた。そして「空は夕燒で奇麗だつたな」と云ひ乍ら描いた。



第十圖

第十七圖

この道は海軍館のロータリーから青山四丁目へ出る通りであるが、道の遠近の描き方を自分で發見させたいと思ひ（このことは先生の御教示による）、寫眞や畫本を與へて置くと、遠くは細く、近くは廣いと云ふ事に氣を付けてゐた。

その中に「道は遠くの方が細くなるのだね」と云ひながら線を引きはじめたので「空迄道にならない樣に」と云つて置いた。それから順々に家を描いたが、これもこの間本を見て近くのも の程はつきり濃く描き、遠くなる程薄く描くことを知つてゐたので、その氣持で描いてゐた。

夕方、大日本無敵海軍と敎へて欲しいと云ふ。何をするのかと思つてゐると、何時の間にか水兵帽を紙で拵へてゐる。帽子の圓い緣を貼るのには相當苦心してゐたが、氣がついてみると折角苦心して書いた字が逆さまになつてゐる。姉が注意すると殘念さうでかうすればいゝとすぐに反對になほし、後のリボン迄つけた。まだ拵へることそれ丈に興味があるのか、私が「色を塗つたら」と云ふとあまり良い顏をしない。姉が「水兵の帽子は、上が緣より外に出てゐるのよ」と云ふと大變に不機嫌に怒つた。自分としては一生懸命に拵え上げて、かぶれる處迄來てゐるので、非常に神經質になつてゐるのではないかと思つた。そして少しすねてゐたが、又

帽子の形のふた廻り位の大きさの圓をきりぬいて、上から貼つたので、ほんたうと同じやうに出來た。大喜びでそれを冠り軍艦マーチや、行進曲に合せて部屋の中を歩き、本當の敬禮の仕方はどうするのかと尋ねられて困つた。

夜又「蟹の一日」と飛行機の双六を拵へた。」

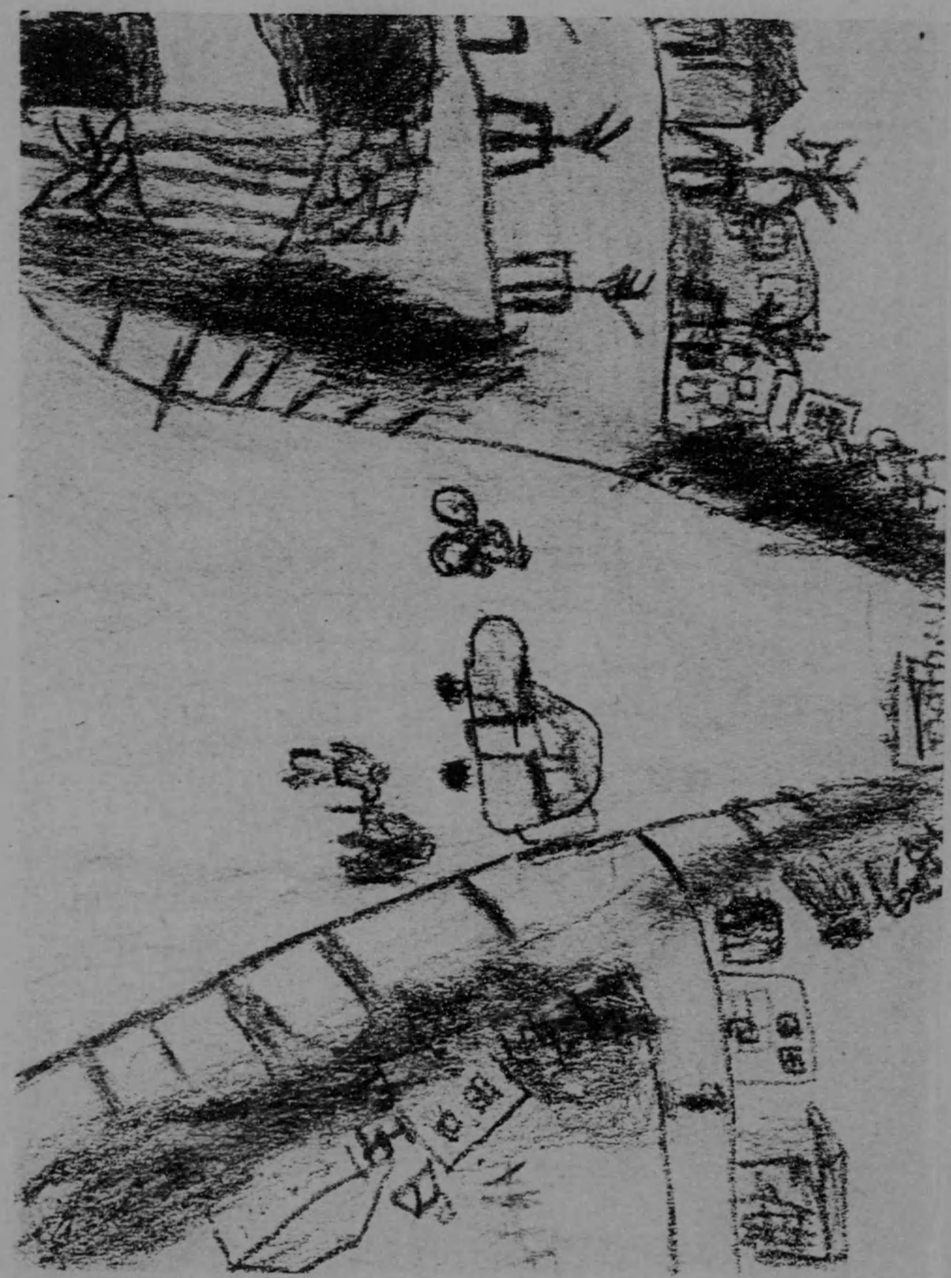
物を工夫し創作することに興味を持つて、グン〳〵積極的に出て來たことが判る。

○「市營バス」の手記から(十二月十六日)

「バスの形が小さくなつた事を氣にしながら書いた。バスの後の學校の塀を描き、木を描く時に、「今迄は道を描くやうに塗つてゐたければ、木もよく見てゐると石と同じやうに縦だの横だのクシャ〳〵になつて、葉が出てゐるよ」と云つて描いたので嬉しかつた。」(傍點引用者)

第十八圖、街と並木(十二月十七日)

これも遠近法によつた畫であり、又街路の表現の仕方に、子供らしい面白さがあるので採錄することにした。



圖八十第

第十九圖

第十九圖、材木積み（十二月十九日）

この畫は材木を積んでゐるところを描いたものであるが、働いてゐる人々の力の入つた樣子がよく表現されてゐる。觀察を基礎としなければ、かう云ふ畫はなか〳〵描けるものではない。

第廿圖、沙魚（十二月廿二日）

これも第五圖の沙魚と同じく父の釣つて來た獲物を描いたものである。前の沙魚と比較するとそこに觀察態度に於ける一段の進歩が見られて興味深い。

第廿一圖、汽車（十二月廿三日）

この畫は木の柵の向ふ側を通る汽車を描いたものである。普通には汽車だけに注意が集中するから、前の塀を書かないのであるが晴夫君は現實に忠實なためにこのやうな描き方をしてゐる。

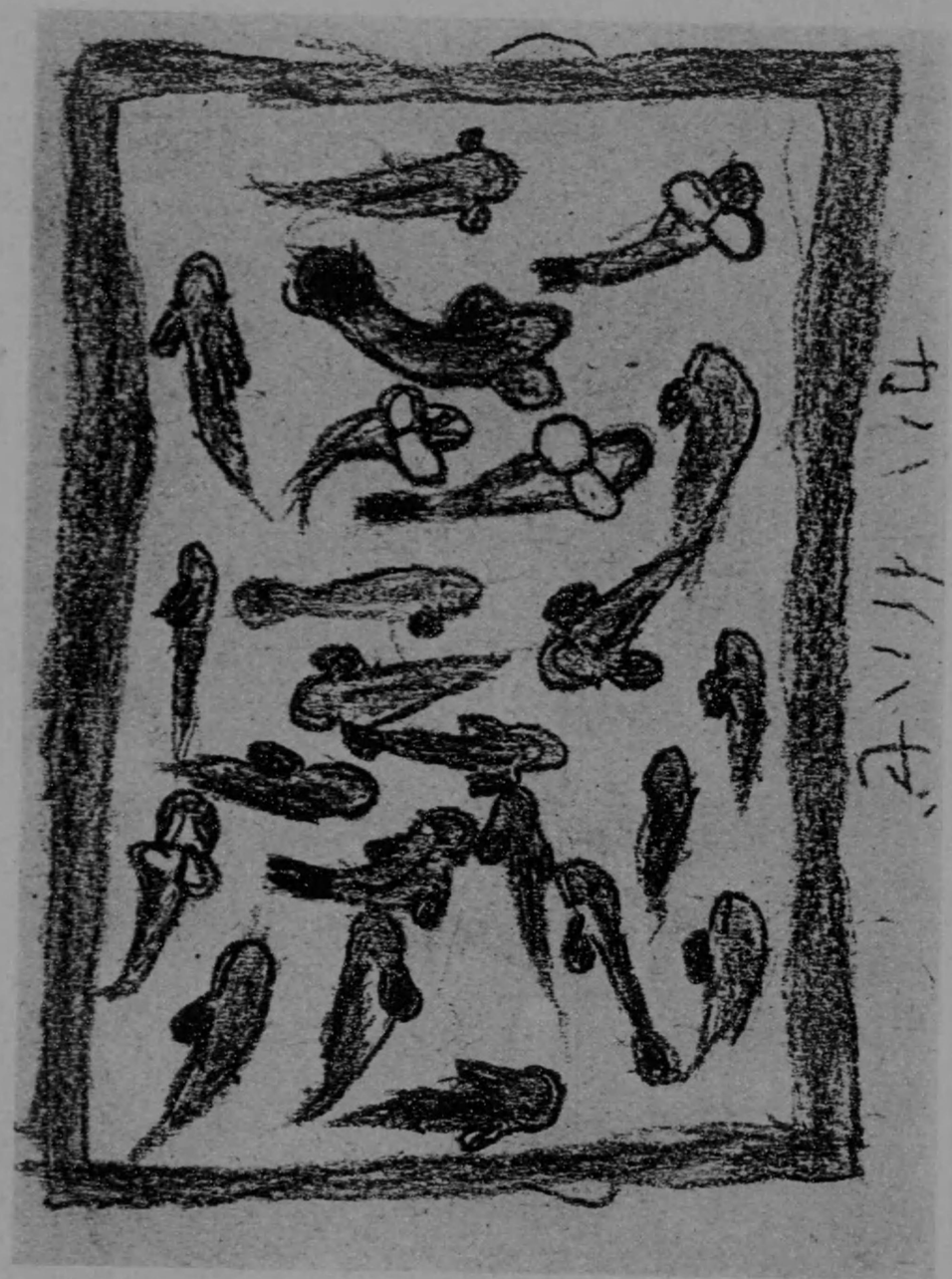
×

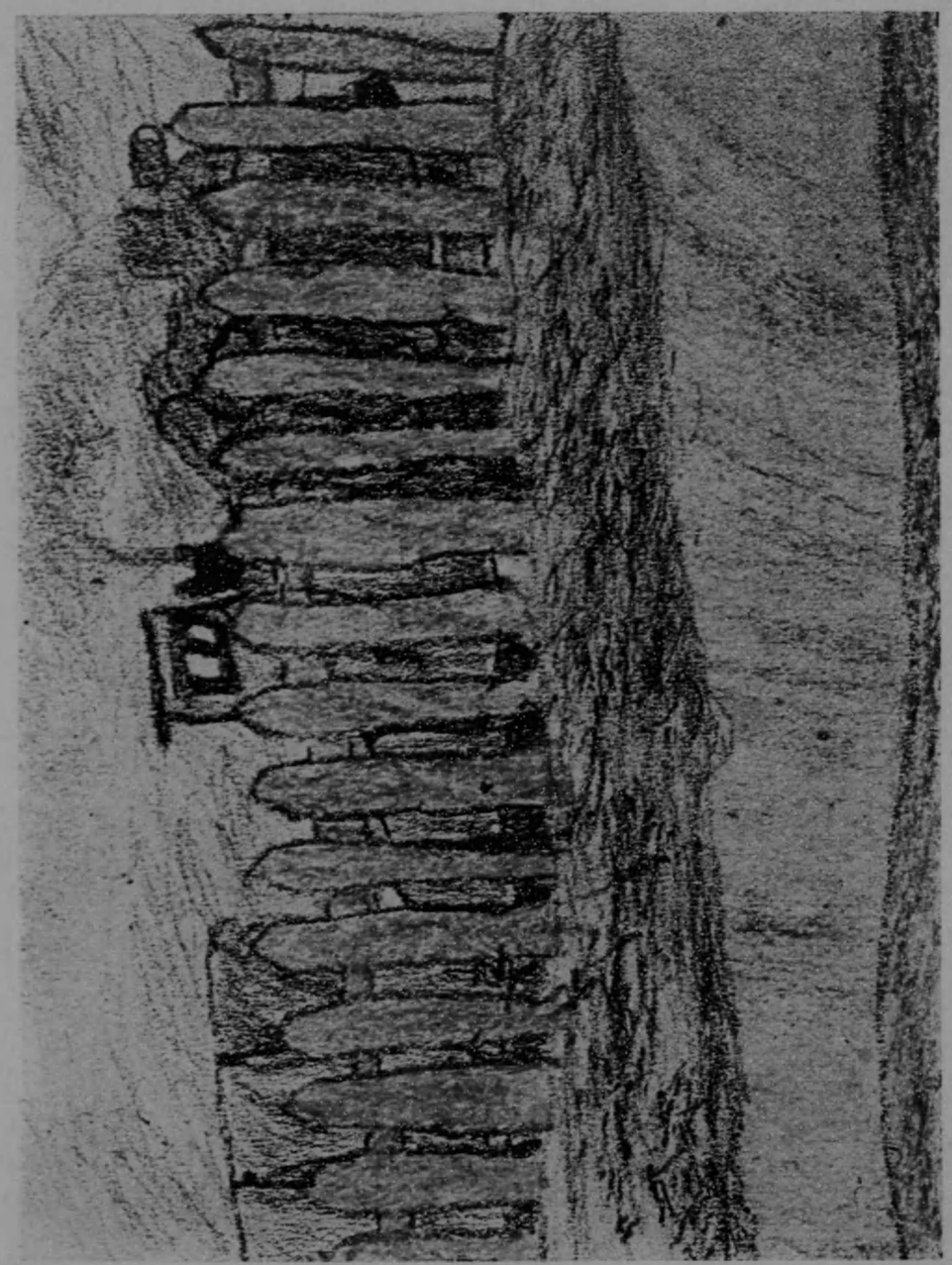
以上二十枚ばかりの畫をづうつと御覽になると　觀察のない畫からはじまつて觀察を基礎とした畫になり、更にその觀察が深く細かくなつて行つた、移り變りが大體お判りになると思ふ。（と同時にその母親の手記をお讀みになることにより、指導の實際が一層よくお判りのことと思ふ。）

さて觀察態度が出來それを基礎にした畫を日課として描くやうになつたと云ふことは、同時にその子供の生活全體が向上しまとまりを持つて來たことを意味するのである。具體的に云へば、落ち着きのない子供が落ち着くやうになる、又癇癪持ちの子供も忍耐が實行出來るやうになるのである。晴夫君の母もこのことを認めて次のやうに書いてゐる。

「この子はおだてればよく動くが怒ればひどく反抗するので、他の子供より氣にかゝる子であるので、何か樂しみになるものを與へて行きたいと思はない事が無いでもなかつた。その點先生によつて畫の御指導を受けてゐる間に私のこの子に對する考へ方が問題の子供から却つて樂しみの多い子になりさうになつて來た。毎日一緒に畫題を探して一生懸命に描いて、一日々々進歩して來ると、本當に嬉しく、おだてると云ふ樣な表面的なことでなく、心から褒めてやる樣になり、子供自身の描き上げた喜びを味つて、私も一緒に喜び合ふ事が出來るやうになつた。自然これに關係して他の事でも從順になり、子供も私も怒らないやうになつた。」

畫を日課とすることの目的が單に畫を上手にすることだけにあるのではないと云ふことは、これを御覽になつてもお判りのことと思ふ。要するに我々の畫の指導は、前の方でも述べたやうに





第十一圖

大人の畫家を縮少したやうな子供を仕立ることを目的としてゐるのではないのである。勿論表現力涵養と云ふ點から云へば畫を上手にすることも目的であると云へるが、但しその「上手」と云ふことの內容が普通の意味と違ふのである。普通には大人の畫を眞似て描いたりすると上手だと云ふが、我々が幼兒に求める畫の「上手」さとは、さう云ふものではない。畫はその子供の年齡相應の畫でよいのである。問題はその子供がどれだけ自分の觀たものを自分の力で豐かに自由に表現出來るかと云ふことなのである。實際に子供の描畫を觀察すると、たとへ亂暴な粗雜な畫でも實に大膽に自分の見たものを描き現はしてゐる子供と、畫はいかにも整つてゐるが、人眞似のやうな畫ばかりを描く子供がゐる。畫が丁寧に描けることは勿論結構であるが、それはむしろ第二の問題であり、畫はたとひ大人の目から見て粗雜で下手であつても、見たものを豐富に表現出來ることを、我々は畫が上手だと云ふのである。かう云ふ意味で我々の描畫指導は畫家を仕立てることを目的とするのではない、と云ふのである。それなら何が目的かと云ふと、今云つた意味の表現力を養ふことがその第一であるが、第二の目的は觀察態度を養ふことなのである。つまり度々前に述べたやうに、畫に描かうとすれば、よく觀察しなければならないと云ふ事情のために、自

然に觀察態度が出來て來る。そしてその觀察態度は次第に畫を描く場合だけに止らず、どんな場合でも物事をよく觀察すると云ふ態度に移り變つて行くのである。そして遂に生活全體に行き渡るのである。例へば學校の勉強をする場合にもよく注意するやうになる、又家事の仕事をするにもよく注意して見ると云ふやうになるのである。こゝまで行くことが、我々の描畫指導の最も大切な目的なのである。これにくらべたら表現力の涵養と云ふことも第二のことになるのである。何故かと云ふと觀察態度と自發性の二つこそ科學的態度の最も大切な二つの土臺石のやうなものだからなのである。

十一、結び

科學教育と云ふことを聞くと何んとなく特殊なもののやうな感じを抱かれるのが普通ではないかと思はれる。それは前に述べたやうに科學教育を單に專門の科學者を作る教育であると解される狹い見解を、知らず知らず持つて居るからではないかと思はれる。勿論中等學校以上では專門科學者を作ることを目的としてゐるものがあるから、それ等の學校の教育は專門の科學者を作るための科學教育である。しかし科學教育とは、さう云ふ狹い意味だけでなく、本書の初めに述べたやうな廣い意味を持つて居るのである。即ち、誰でも日本人として必要な科學的な態度を作ることを目的とするのである。かう云ふ廣い意味を把むならば、當然科學教育は特殊なものではなくなり、日本人としては誰でも一度はかう云ふ教育を受けなければならないことになるのである。これを家庭と云ふ立場から云へば、從來家庭の躾と云へば專らお行儀とかお作法とか云ふ道德的なことや情操的なことが多く取り上げられてゐたのであるが、これからは科學的な態度を作ると云ふ意味の躾も取り入れなければならないと言ふことになるのである。今日に於てはこのことはもはやどうしても取り入れなければならないのである。勿論道德的な躾や情操的な躾は絶對に必要でありこれなくしては、又日本人を立派にすることは出來ないのであるが、これだけに止つて科學的な躾を缺いてゐたのでは、大東亞共榮圈を確立し、世界平和に寄與すると云ふ大使命を完全に果すことは不可能になつて來るのである。從つて、以上に述べたところの科學教育は道德教育とか、情操教育とか或ひは又體育と云ふことと並び、又互に結びつき合つて、立派な日本人を作り上げる土臺を成してゐるものなのである。